

# 縄文後晩期の岩偶岩版類について

—東海地域の事例を中心に—

● 川添和暁

本稿では、東海地域の資料を中心に、関西地域の資料をも含めて、確認できた岩偶岩版類について集成・分析を行った。岩偶岩版類を、断面形状から板状のものと非板状のものに分け、板状を13類型に、非板状を4類型に分類できるとした。これらは縄文時代後期中葉から晩期末までに認められるが、後期中葉から晩期初頭中心の伊勢湾西岸域と後期末から晩期末までの伊勢湾東岸域との様相の差を指摘し、後期岩版類や分銅形土偶、および南九州域の影響を受けた伊勢湾西岸域の様相から、やや東海地域の独自色を出した伊勢湾東岸域の様相へと変遷して行くと考えた。また、岩偶岩版類と線刻礫、および石錘と言われているものの一部にも有機的関係を示すと考えられるものが存在する可能性を指摘した。

## はじめに

縄文時代にはさまざまな精神性を示す遺物が知られており、これまでの研究では石製の人形を模したのものとして、岩偶あるいは岩版という器種名が認められている。東北・関東地域の資料が古くからよく知られていたが、近年、その他の地域でも同様な資料の存在が確認されており、列島的な規模での比較・検討も可能となってきた。

本稿では、東海・関西地域の資料にもとに検討・分析を行い、関連資料との比較を通じて、東海地域での様相を明らかにすることを目的とする。但し、本稿では資料紹介を中心に行ない、考察はごく若干に留めておく。

なお、後で述べるように、東海地域におけるこの類の資料の多くは、岩版という器種名が該当するものとも考えられる。しかし、中には岩偶というべき資料も存在しており、かつこれらは一連の資料として関連づけて検討すべきとの立場から、本稿では岩偶岩版類として一括して呼称する。

## 研究小史

ここでは、後期後半以降の岩偶・岩版とした資料に関する研究を概観する。

## A. 関東・東北地域の縄文晩期岩版・岩偶研究

土版について最初に取り上げたのは、E.S.Morseである(Morse1879)が、岩版について最初に報告したのは、東京都下沼部貝塚出土資料を石盤とした鳥居龍蔵・内山九三郎である(鳥居・内山1893)。複数の資料の分析・考察などに言及したのは大野延太郎が最初である(大野1897・1898・1901・1918)。大野は、東北地域・関東地域の土偶・土版と東北地域の岩版を取り上げ、土版と岩盤とは形状上土偶の退化したものであるとし、土偶・土版・岩盤は系統的関係があるとした(大野1898、同1901:412~413頁)。

池上啓介は、東北・関東地域出土の土版・岩版について、土版・岩版ごとにA型(形態楕円形)・B(形態四角形)・C(人面形)の3型式に分類した(池上1933:44~46頁)。空間的な分布と帰属時期についての言及もあり、関東地方では大森式土器文化、東北地方では亀ヶ岡土器文化に属する遺跡での発見とした(同:53頁)。

中谷治宇二郎は、土偶との関連で土版について言及し、土偶の退化ということのみならず本来土版として発したものがあっても想定し、岩版は土版の型を白堊質の石材に移したものとした。また、岩偶については土偶の型を石材に移したものとした(中谷1943:380頁)。

江坂輝彌は、岩偶と岩版とを区別・整理して

集成と論考を行なった（江坂 1960）。岩偶では縄文時代前期末から中期初頭の円筒下層式、奥羽北部の縄文時代晩期、九州の縄文時代後期の事例を提示した（同：180 頁）。これが岩偶の特徴を詳細にまとめた初めての論であり、ここに挙げられている一群に対して、以降、岩偶という呼称で呼ばれるようになった。岩版は前期中葉に類似のものがあるが、その他は晩期であるとした上で、平面形態・目の装飾および文様によって第一類から第十一類に分類した。関東地域の土版（帰属を大洞 C1 併行期と明示）と東北地域の岩版との関係については、より古い晩期初頭の岩版の存在を提示した上で、同一目的の土版が岩版の代わりにつくられたという見解を出した（同：209 頁）。

天羽利夫は、岩版が土偶と無関係に発生したとする芹沢長介の提言を受け（芹沢 1960）、岩版と土版との関係に注目した（天羽 1964）。編年を行なう上で文様にに基づく型式分類を行なっているが、東北地方で第一類から第六類、関東地方で A 類・B 類と、地域別の分類を行ない、土器の文様との対比から各分類別に時期比定を行なったことは注目できよう。大洞 B 式土器に対比させた第一類（岩版のみ）を初現形態であるとした上で、第一類から第六類の分布の中心が馬淵川流域で、かつ A・B は関東化した現象と捉えることで、土版・岩版の分布は亀ヶ岡文化圏および亀ヶ岡文化の波及した地域であるとした（同：88 頁）。

小林達雄は、形式（フォーム）・型式（タイプ）・様式（スタイル）の概念を明確化することによって、土版・岩版研究の整理を試みた（小林 1967）。特に、上述した天野の分類については様式に当たるとして、さまざまなバラエティーに対して型式分類を行なわなかったことを問題にした（同：5 頁）。小林の型式は、その社会集団全員が好ましいと考える信念に基づいてあらゆる行動を規制し典型的な行動を決定してゆく中で、形式を実体化する過程で形成されるイメージ（範型）とそれに対する模倣型との関係で把握できる概念であり、土版・岩版についてもこの研究方向の必要性を論じた。

鷹野光行は、関東地域の土版について分類の整理と時期比定を行なった（鷹野 1977）。分類

は、天羽の文様による分類成果を継承し、天羽の A 類を I～V 類に、同じく B 類を I～V 類に細分し、新たに細分類 I 類・II 類を含む C 類を設定した。

横山勝栄は新潟北部能登遺跡・南中上野遺跡・駒山遺跡出土の土版・岩版を取り上げ、亀ヶ岡文化の中の土版・岩版は初期の段階から各々の在地社会において製作され、時期的推移とともに形態進展され終末に至るという在り方を示した（横山 1980：174 頁）。

鈴木克彦は、青森県立郷土館風韻堂コレクション所蔵資料の整理・報告を行うに際して、岩版・土版の分析・検討を行った（鈴木 1980）。この論考の大きな特徴は、製作・石材・形態・施文と文様・用途と、遺物の変遷を各段階別に捉えたところであり、特に用途に関しては欠損のみならず、火熱・朱塗りやタール付着・有孔の存在・側縁の磨滅など、各資料でさまざまな痕跡が認められることを初めて問題提議したところにある（同：87～88 頁）。また、これまでの晩期の該当資料のみならず、それ以前の資料についても縄文時代の中で通史的に捉え、各時期での型式を理解する必要があるとした。

小杉康は、土版・岩版の垂孔のないものについてタブレット B と呼称した（小杉 1986）。平面形態・文様の分析を表裏面で行ない、タブレット B では東北地域では 37 タイプを、関東地域では 24 タイプを設定し、各タイプの編年および系統的な組列を提示した。この論では、鈴木の提言した、製作後の変形行為について整理・発展させた点が、大いに注目できる。変形行為には、線刻・敲打・回転穿孔・打ち欠き・ナゾリ・加熱・打ち割りがあるとして、製作行為と各変形行為を順に整理し形態上の特徴を考慮することによって行動系が復元でき、これを連続的な儀礼行為に相当すると仮定した（同：67～68 頁）。

また小杉は、福島県いわき市薄磯貝塚発掘調査報告書で、この論に沿った報告・分類を行なった（小杉 1988）。従来は線刻礫・石製品・岩偶などと称されていた、いわば典型的でないが関連性のある資料が同時に多く存在しており、典型的あるいはそれに準じる石製タブレットを第 I 群、境界領域に属する一群を第 II 群、範疇

外の一群を第 III 類、未加工の一群を第 IV 類とし、同様に分析対象とした。

稲野彰子は土版・岩版について数多くの研究・提言を行なっている。関東地域の岩版・土版については、土偶および石剣・石棒類に用いられる文様について重視した（稲野彰 1982）。また、岩版を概説する中で、岩版と土版とは異材同形態で同一機能をもつものとして岩版から土版への移行を指摘し、早い時期からの移行のある北上川流域など太平洋側の河川流域と、岩版を遅くまでつくり続けた日本海側の河川の流域との差を指摘し、亀ヶ岡文化圏における地域性を示すとした（稲野彰 1983a:111 頁）。また、小林・小杉が岩版・土版の最古のグループとした宮城県沼津貝塚の事例をはじめ、宮城県里浜貝塚、新潟県元屋敷遺跡、富山県桜町遺跡の事例を取りあげ、これらの一群が厚みを持ち、身体的意匠があり打割を除いて著しい変形行為は認められないことから、天羽の岩版第一類とは別系統と考えられるとした（稲野彰 2004:106 頁）。

稲野裕介は、亀ヶ岡文化における岩偶を取り上げ、馬淵川流域での中心と、津軽地域・北上川上流域や秋田県域などの分布の周辺の様相という構図を示した（稲野裕 1983）。また、増加した東北地域の資料との比較検討から、岩偶における地域差を詳細にした（稲野裕 1998）。馬淵川流域で認められる特徴的な資料について馬淵川型岩偶と呼称し、その他の岩偶を A 類（手足を明瞭に作り出すもの）、B 類（手足の作り出しがあいまいなもの）に分け、馬淵川流域、青森県西部、秋田県・山形県、北上川中流域・宮城県地方ではそれぞれ分布の様相が異なることを指摘した（同:77 頁）。また、小杉や金子（金子 2001）の論を受け、馬淵川型岩偶における改変と変形行為について言及したが、土偶や石剣類と同様な故意の破壊であり、岩版・土版などでの一連の変形行為は観察できず、これらとは一線を画するものとした（稲野裕 2007:59 頁）。

渡辺誠は、青森県石亀遺跡の調査報告を行う際に、岩偶について集成・考察を加えた（渡辺編 1997）。岩偶は石素材であるため、土偶と異なり切断や破壊の痕跡が極めて顕著に残ってい

るとして学史的役割が高いとした。また、岩偶の土偶との違いについては石材の白い色という点を指摘した（同:189 頁）。

斎藤和子は、青森・岩手・秋田県の亀ヶ岡文化期の岩版・土版を対象として、正中線など身体表現に注目し、表裏の概念を用いて土偶との関連性を論じた（斎藤 2001）。天羽が分類した、東北地方の土版・岩版の第 1 類から第 6 類は、大きく I（第 1 類）、II（第 2・3・4 類）、III（第 5・6 類）に大別できるとし、II では正中線による表裏や目・口表現を持つものが多く、これら人体意匠としての岩版・土版は、岩木川流域にその原形が求められるのではないのかとした（同:75 頁）。

## B. 南九州域の縄文後晩期岩偶研究

南九州域の軽石製の岩偶については、鹿児島県始良郡福山町小廻遺跡の資料について山崎五十磨が初めて石偶と称して報告した（山崎 1920）。1968 年から 73 年にかけて行なわれた鹿児島県南さつま市上加世田遺跡の調査で 10 点以上の資料が出土し、河口貞徳によって報告・分析が行なわれたことが、研究を多いに進展させたといえる（河口 1973 など）。河口の論で注目できる点の一つに、石棒との関連性に言及した点が挙げられる。近年、1995 年以降行なわれた鹿児島県垂水市柘原貝塚で、岩偶 64 点を含む大量の軽石製品が出土した。整理・報告を行った寒川朋枝によって、詳細な分析・検討が行われた（寒川 2001 など）。柘原貝塚資料について、形態別に法量を計測し、手に持ちやすい形とサイズという点に注目した（同:174 頁）。

## C. その他地域の縄文時代後晩期岩偶・岩版研究

古くは大野延太郎によっては石器時代の石製人形として下総国香取郡滑河町の事例と飛騨国の事例をも示した（大野 1900:352 頁）が、これを縄文時代の資料とすることに否定的見解が多い（中谷 1943:380 頁・江坂 1960:179 頁など）。

三重県松坂市天白遺跡の調査・報告で 10 点を超える岩偶岩版類および線刻礫などが知られるようになった。中村健二は、近畿地域におけ



## 分類

る縄文時代後期の土偶を考察する上で、天白遺跡の事例に加え、岩田遺跡・桑飼下遺跡・穴太遺跡などの岩版類との関係について言及した(中村 2000)。分銅形土偶の有文化について、岩版類が影響を与えた可能性を指摘したものである(同:186頁)。

大野淳也は、富山県小矢部市桜町出土の資料を岩版類と称して、後期後半から晩期の関連資料を列島規模で集成・検討した(大野 2007)。集成・検討資料には、大野は稲田裕介の馬淵川型岩偶以外の岩偶についても併せて関連資料として含めている。大野の論考の最大の特徴は、これまで東北・関東地域の資料で語られていたこの種の議論に対して、他地域の資料を明らかにしたことにより、亀ヶ岡文化圏中心の議論に対して新たな議論の展開を示唆したところにある。桜町遺跡で確認できた A から E 類に加えて、集成の結果認定した F・G 類の計 7 類に分類し、各類別の分布状況と時期比定を行ない、類によっては後期後半以降から存在することを明らかにした。

以上のように、これまでの研究主体は、関東・東北地域であり、特に亀ヶ岡式文化およびそれに関連する遺物として取り上げられてきた経緯がある。岩版と土版との関係、および土偶との関係についても、関東・東北地域の中で完結した議論が行なわれていたといえよう。中村健二や大野淳也の議論は、これまでの範囲にはとらわれない可能性を示すもので、特に日本列島の集成・検討を行った大野の論考は、極めて注目に値するものである。また、東北地域の縄文時代晩期では江坂以来、岩偶と岩版は明確に区別して論じられているが、稲野のいう馬淵川型岩偶以外は、この区別が明瞭ではないと考えられる。

鈴木・小杉の提唱した製作後の変形行為も、ここ 20 年来の研究で各人が意識して検討するようになった事柄であり、新たな視点として議論の深化が望まれる。特に、鈴木論は、素材から製作・使用・廃棄の状況を順追って検討した数少ない論考であり、基本的な資料検討の方向性がここにある。本稿もこの点を意識して議論を進めたい。

本稿では、人形を模した石製品を一括して論ずることで、これまで呼称されていた器種としての岩偶岩版類を再検討したいと考えている。従って、これまでの岩偶および岩版という器種名は一旦保留し、別の分類名称を用いる。

分析対象資料を一瞥すると、立体的な効果が表現されている一群とそれのない一群とがあり、これを分類基準の基礎とする。両者の区別は側面観および断面形状によって行ない、平面側(表面・裏面の両面、あるいはいずれか一面)の全体が平坦であるものを板状、平面側の全体および一部でも立体的構造を有するものを非板状とする。

板状は、平面形状および沈線(線刻)など、人形の表現方法から次の A～D の 4 群に分類できる(図 1)。

**板状 A 類:**側面の抉りで表現されているもの。頭部のみならず手・足の表現が顕著な一群(板状 A-1 類)、頭部のみが顕著に認められる一群(板状 A-2 類)、側面周囲に連続した刻みが認められる一群(板状 A-3 類)に、さらに分類できる。

**板状 B 類:**平面の沈線(線刻)で表現されており、正中線といわれる、平面の長軸方向に沈線(線刻)が施されているもの。平面形態が楕円形状を呈し、外反する 2 弧線が描かれているもの(板状 B-1 類)、同じく台形状を呈し、外反する 2 弧線が描かれているもの(板状 B-2 類)、同じく分銅形を呈し、器面中央に向って斜行する直線で文様が構成されているもの(板状 B-3 類)、平面形態が楕円形状を呈し、横方向に直交する短沈線が認められるもの(板状 B-4 類)に分けられる。

**板状 C 類:**平面の沈線(線刻)で表現されており、正中線といわれる、長軸方向の沈線(線刻)が施されていないもの。平面形態が楕円形および隅丸形状を呈するもの(板状 C-1 類)、横方向の沈線に三叉文状の線刻あるいは彫去が認められるもの(板状 C-2 類)、平面形状ヒサゴ形を呈し、直線・弧線で文様が構成されているもの(板状 C-3 類)、平面形状が長胴な楕円



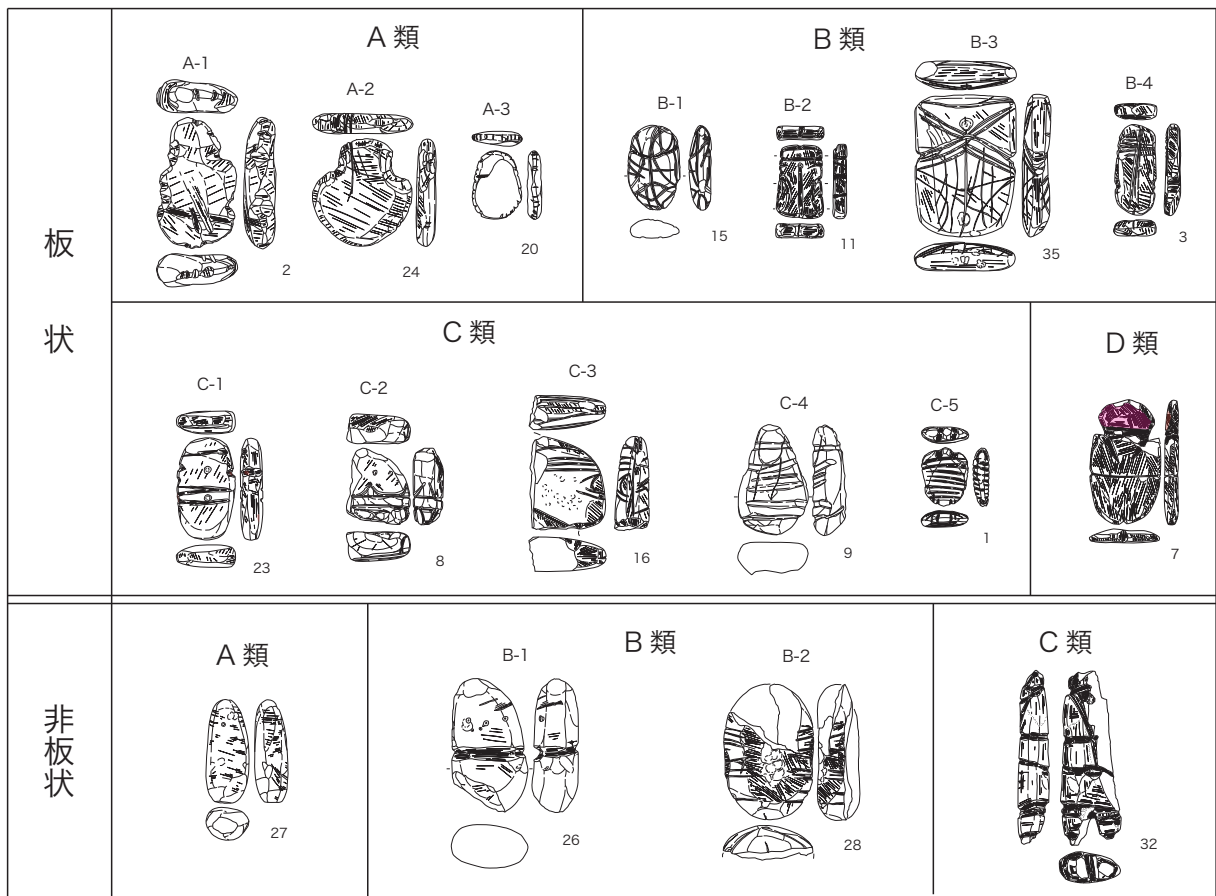


図1 東海・関西地域における岩偶岩版類分類図

表1 東海・関西地域における岩偶岩版類出土数一覧表（遺跡番号は図2に一致）

番号	遺跡名	所在地	時期	板状											非板状				不明	文献など	備考	
				A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	B-4	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D	A	B-1				B-2
1	前山遺跡	静岡県浜松市	晩期前半												1						鈴木編1992	
2	中村遺跡	岐阜県中津川市	後期～晩期	1																	中田・篠原・住田1979	
3	久須田遺跡	岐阜県中津川市	後期中葉～晩期前半				1														河野ほか1991	
4	尾崎遺跡	岐阜県美濃加茂市	後期～晩期								1										齋藤・藤村ほか2002	
5	北裏遺跡	岐阜県可見市	晩期											2						大江・紅村1973		
6	牛牧遺跡	名古屋市守山区	後期末～晩期後葉												1					川添編2001		
7	大坪遺跡	愛知県瀬戸市	後期中葉～後葉																1	宮石1957	大型石版1	
8	中条貝塚	愛知県刈谷市	後期中葉～晩期?								1									齋藤ほか1968		
9	真宮遺跡	愛知県岡崎市	晩期前葉～後葉									1								齋藤2001		
10	東光寺遺跡	愛知県額田郡幸田町	晩期中葉											1						加藤編1993		
11	麻生田大橋遺跡	愛知県豊川市	晩期中葉～					1												安井編1991		
		愛知県豊川市	晩期中葉～							1			2							前田編1993		
12	伊川津貝塚	愛知県田原市	後期末～晩期末																1	久永ほか1972	破片	
13	保美貝塚	愛知県田原市	晩期～				1													小林ほか1966		
		愛知県田原市	晩期～									1	1							瀬美町郷土資料館1997		
14	天白遺跡	三重県松阪市	後期中葉～晩期初頭	2	2	1		1			2									森川編1995		
15	下沖遺跡	三重県松阪市	後期中葉～晩期初頭								2									和氣2000		
16	片野殿垣内遺跡	三重県多気郡多気町	後期～晩期				1													田村・大下2001		
17	佐八藤波遺跡	三重県伊勢市	後期～晩期								1								1	岩中1991	豆谷・田村表採品	
18	穴太遺跡	滋賀県大津市	後期後半								1									仲川編1997		
19	桑飼下遺跡	京都府舞鶴市	後期中葉								1									渡辺編1975		

形および水滴状を呈するもの（板状C-4類）、  
 上部に長軸方向に短沈線が施されているもの  
 （板状C-5類）に分類できる。

板状D類：側面の抉りと平面の沈線（線刻）  
 で表現されているもの。

また、非板状については、A～Cの三群に

分類する。

非板状A類：断面形状が円形を呈し、横方  
 向に沈線（線刻）が認められるもの。

非板状B類：断面形状が楕円形を呈し、横  
 方向に沈線（線刻）が認められるもの。

非板状C類：断面形状がやや角張った楕円

形を呈し、横方向と斜方向に沈線（線刻）が認められるもの。

### 出土状況（時期・地域）

今回、東海・関西地域では21遺跡、35点を集成し、33点の資料を確認した（図2・表1）。静岡県で1遺跡1点、岐阜県で4遺跡5点、愛知県で8遺跡13点、三重県で4遺跡17点、滋賀県で1遺跡1点、京都府で1遺跡1点となっており、愛知県・三重県域で多く確認できている。特に天白遺跡の12点は今回の対象地域内では1遺跡内での出土点数が最も多い。岩偶岩版類を出土する遺跡形成の時期は、縄文時代晩期が多いものの、中条貝塚・穴太遺跡・桑飼下遺跡のように縄文時代後期中葉が主体の遺跡、天白遺跡・下沖遺跡のように縄文時代後期中葉から後期末が主体の遺跡もある。

次に、分類別に概観する。第1に注目できる点は、板状A類・板状B-3類・板状C-1類・非板状が縄文時代後期後半に属するものが圧倒的に多く、非板状の事例は天白遺跡・佐八藤波遺跡に限られる点である。第2点目は、本稿で16類型に分類したうち、天白遺跡で8の類型が認められる点である。第3点目は、板状B-2類・板状C-4類・板状C-5類・板状D類が縄文時代晩期にのみ認められる点である。

また、出土遺跡の種類について言及する。貝層の形成が認められる遺跡としては、中条貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚が挙げられるが、その他は貝層形成が認められない遺跡からの出土である。天白遺跡・下沖遺跡は、配石遺構が検出されている遺跡である。北裏遺跡・牛牧遺跡・真宮遺跡・麻生田大橋遺跡は、多量の遺物を包含する遺物包含層を有する遺跡であり、土器棺墓などの遺構が目立つが、遺跡内からは竪穴建物跡の検出も認められる場合もある。穴太遺跡では、河道には貯蔵穴、脇には竪穴建物跡・配石遺構が確認されており、打製石斧集積遺構も検出されている。桑飼下遺跡では建物に由来するとした炉跡48基が検出されており、集積状態をも含めて多量の打製石斧が出土している。

### 資料の分析

#### a. 石材

ここでは、石材<sup>\*</sup>と色調について言及する。使用石材は、大きく、砂岩・凝灰岩・結晶片岩などの片岩系の3種が認められる。最も多いのは砂岩である。凝灰岩製やその可能性のあるものは、6・11・12・17<sup>\*\*</sup>で、片岩系は9・10・13・14・32である。麻生田大橋遺跡では、砂岩製のものが確認できず、凝灰岩と片岩系の資料のみが確認できるのは注目できよう。

石材の色調については、黄白色・灰白色が圧倒的に多く、4・7のようにやや黒みの強い灰色も事例もある。このことから、白色を基調として石材の選択が行なわれた状況が窺われる。また、13・14のように深緑色を呈する事例もあるが、これは稀で、麻生田大橋遺跡でしか確認できない。

今回の集成では、一遺跡から複数点出土している事例として、北裏遺跡・麻生田大橋遺跡・保美貝塚・下沖遺跡・佐八藤波遺跡がある。北裏遺跡例（5・6）は同一類型のなかで、使用石材が異なる事例である。麻生田大橋遺跡例（11～14）は、緑色片岩製については同一類型に属するものである。天白遺跡例（18～28）は異なる類型のすべてが黄白色を呈した砂岩で同一石材が使用されているものである。下沖遺跡例（29・30）は同一類型で使用石材も同一のものである。保美貝塚例（15～17）と佐八藤波遺跡例（32・33）では、同一遺跡内の資料ではあるがそれぞれ類型が異なり使用石材も異なっている点が注目できる。

#### b. 法量

最大厚に関しては、幅に対する板状と非板状の二分類を行なっていることから、分類別に長さ・幅を分析することで法量を概観する（図7）。岩偶岩版類全体で見た場合、長さ2.5～14cm、幅0.8～8cmの範囲におさまっている

<sup>\*</sup> 石材名は、各報告書の記載や、堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）の分析によるものもあるが、最終的な記載の責任は筆者にある。

<sup>\*\*</sup> 番号は、図3～6の遺物の番号を示す。

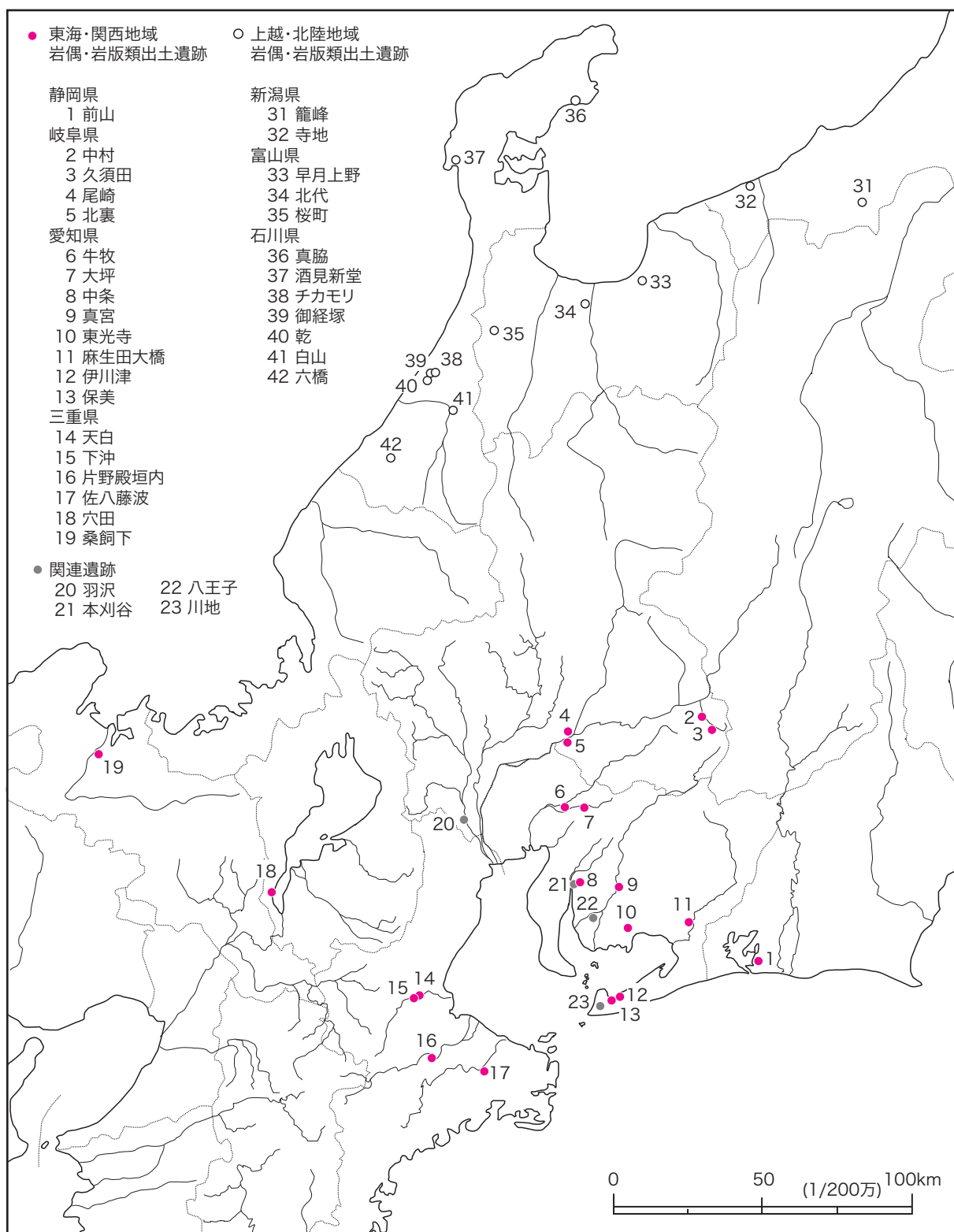
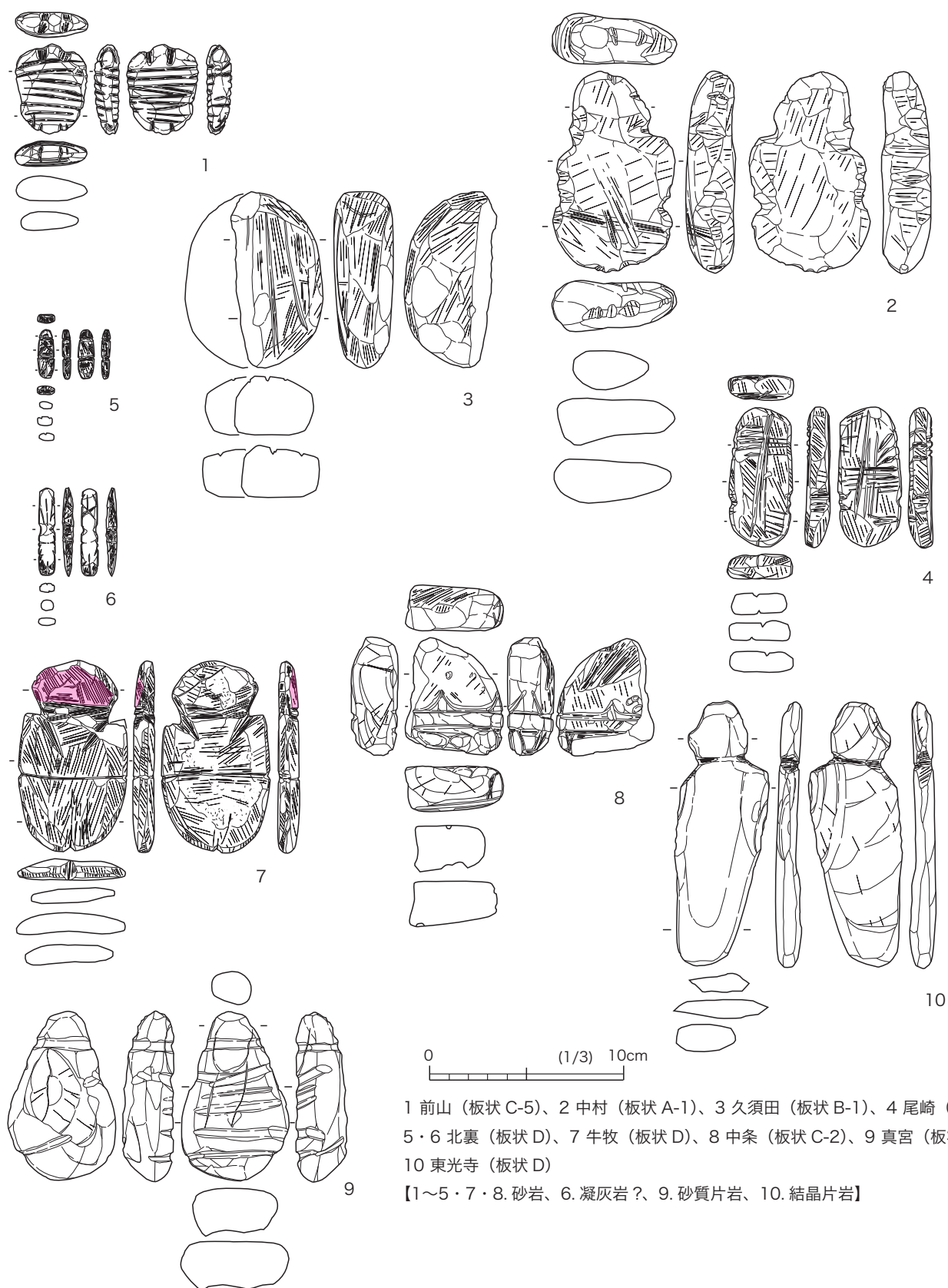


図2 東海・関西地域における岩偶岩版類出土遺跡位置図（上越・北陸地域は大野 2007 を参照）

が、類型別で見た場合、法量による群が認められるようである。板状A類・同B類は長さ8cm以上・幅6cm以上の一群と、長さ8cm

以下・幅5cm以下の一群に分けられ、いわば法量に大・小が存在しているようである。板状B類の長さ8cm以下・幅5cm以下の法量の小





1 前山 (板状 C-5)、2 中村 (板状 A-1)、3 久須田 (板状 B-1)、4 尾崎 (材  
5・6 北裏 (板状 D)、7 牛牧 (板状 D)、8 中条 (板状 C-2)、9 真宮 (板状  
10 東光寺 (板状 D)

【1~5・7・8. 砂岩、6. 凝灰岩？、9. 砂質片岩、10. 結晶片岩】

図3 東海・関西地域出土 岩偶岩版類1

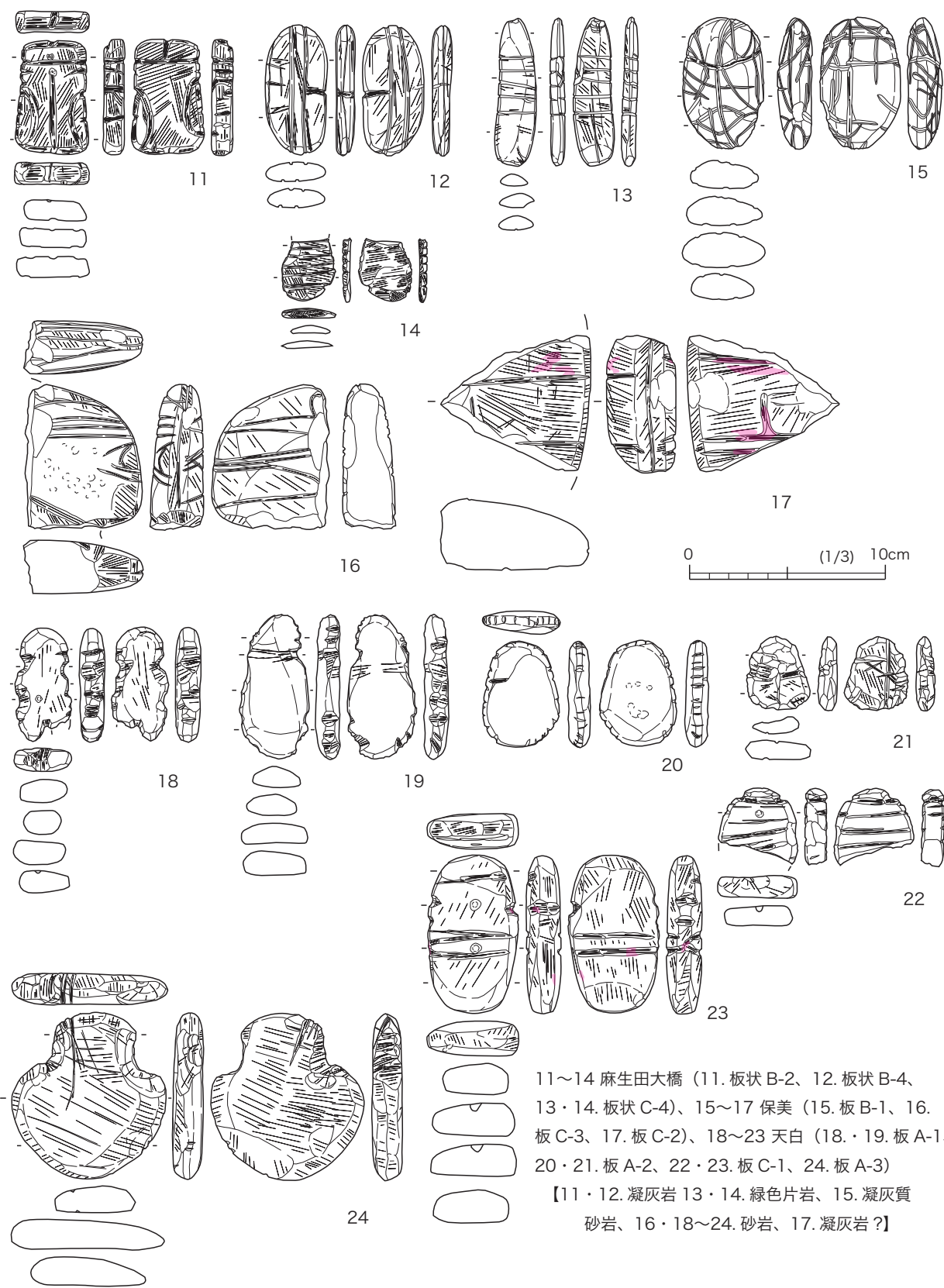
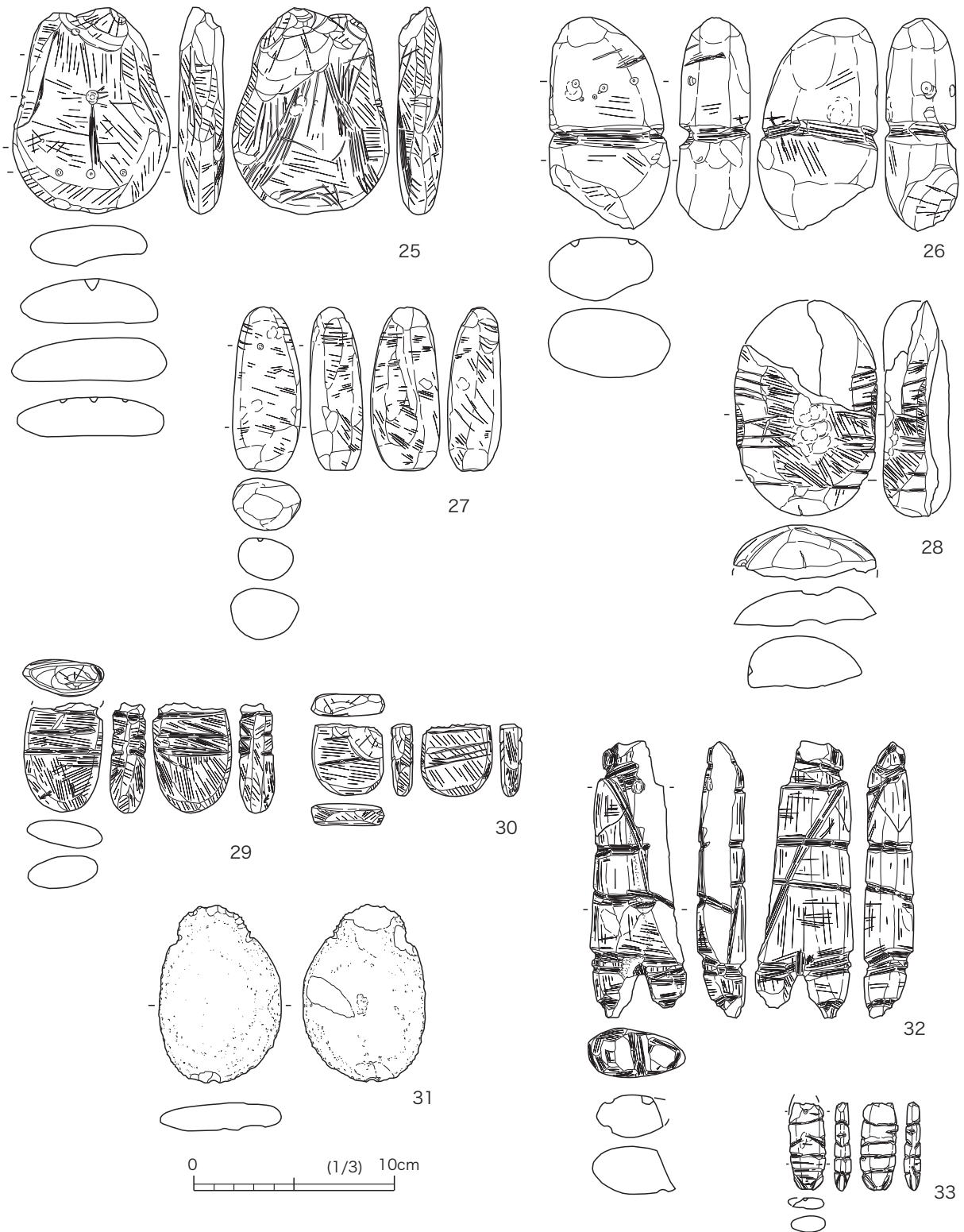


図4 東海・関西地域出土 岩偶岩版類2



25~28 天白 (25. 板 B-2、26. 非板 B-1、27. 非板 A、28. 非板 B-2)、29・30 下沖 (板 C-1)、31 片野殿垣内 (板 A-3)、  
 32・33 佐八藤波 (32. 非板 C、33. 板 C-1)  
 【25~31・33. 砂岩、32. 結晶片岩】

図5 東海・関西地域出土 岩偶岩版類3 (31のみ田村・大下 2001より引用)



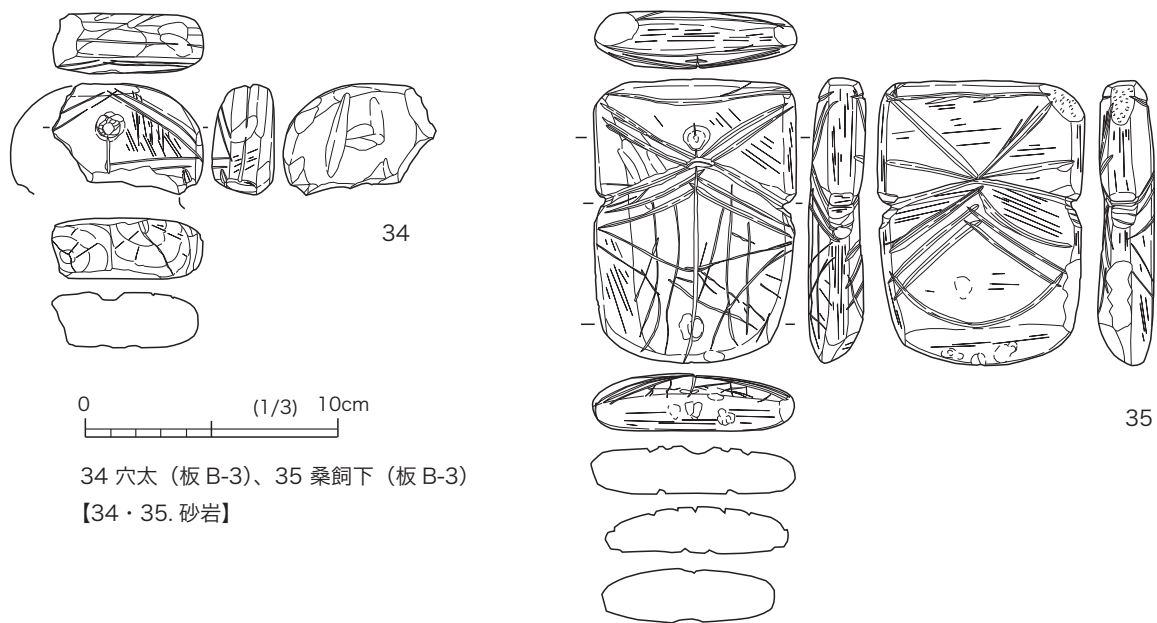


図6 東海・関西地域出土 岩偶岩版類4

さい一群は、いずれも縄文時代晩期の資料である。板材C類は長さ7cm以上で幅5cm程度の一類と幅3cm程度の一類、長さ5cm以下の一群の、計3群に分けられるか。板状D類は長さ5cm以下の一群と、10cm程度の一類、14cm程度の一類と3群に分けられる。これはそれぞれ、北裏遺跡(5・6)、牛牧遺跡(7)、東光寺遺跡(10)出土事例に対応する。非板状についても、長さ8.5cm・幅3.5cm程度のもの、長さ11cm・幅5cm以上のもの、長さ14cm以上で幅5cm程度のものの3群に分かれ、それぞれがA類・B類・C類に対応する。

以上のように、各類型で法量により、2あるいは3群に分類できようであり、B類のようにそれが帰属時期に対応していると考えられるものもある。上述した石材同様に、一遺跡から複数点出土している事例を概観する。下沖遺跡の事例は一端が欠損しており全体の法量は計り知れないものの、幅や形状からは29・30はそれほど法量に差はないと考えられる。従って、北裏遺跡の事例(5・6)と同様に、同一類型で同様の法量を有しているものが複数存在しているものと考えられる。麻生田大橋遺跡事例は、板状B-2類(11)・板状B-4類(12)・板状C-4類(13・14)と異なる類型のものが存在しているものの、長さが5～7.5cm程度と

法量が近似する傾向がある。一方、保美貝塚・天白遺跡・佐八藤波遺跡の事例は、異なる類型が認められ、かつ法量に著しい差が認められるものが存在するようである。

### c. 器形調整から変形まで

岩偶岩版類は、製作後に変形が加えられている事例が多い事情があり、製作痕のみを抽出することが難しいと考えられる。ここでは、各類型別に、器形自体を整える段階から、遺物として廃棄されるまでの、現状の器面に認められる製作・変形痕について、その種類と前後関係係数を検討する。

製作・変形の痕跡については、a. 研磨・磨痕、b. 擦込・擦切、c. 敲打・打割、d. 打込、e. 回転穿孔・盲孔、f. 被熱、g. 赤彩に整理できる。aからeについてのみ換言すれば、a. 研磨・磨痕は全面あるいは一部分が面的に方向をもって磨られている作用、b. 擦込・擦切は線状を呈する局所的に凹にする作用、c. 敲打・打割は打撃行為による作用、d. 器面に打撃などして凹みを形成する作用、e. 穿孔・盲孔は回転運動などによって点的に凹にする作用、である。沈線および線刻は、身体動作としてはb. 擦込・擦切と同じだと考えられるが、特に文様としての意図が認められるものについて、この名称で

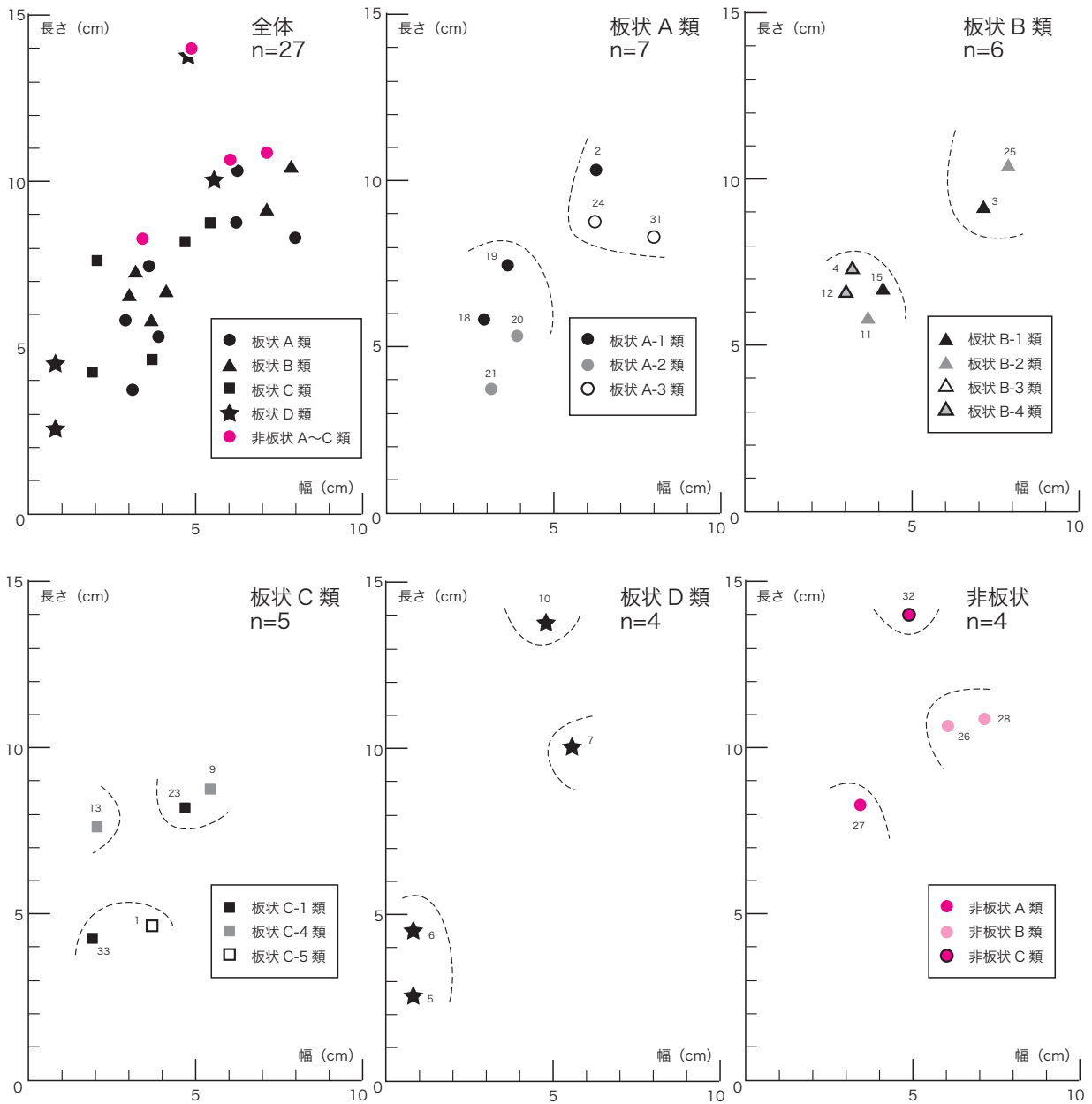


図7 東海・関西地域出土 岩偶岩版類 法量散布図

指摘するものとする。また、沈線は幅太く明瞭なもの、線刻は幅細く時には不明瞭なものを示すこととする。

**板状 A-1 類 (2・18・19)** 器形全体には全面研磨が施されているが、器形自体は、側辺部の擦込によって頭部・腕部・脚部の作り出しを行なっている。2は下部に横方向に幅広いが極浅い擦込が認められ、さらに長軸方向にも2条観察できる。被熱の可能性があると考えられる。18はヘソを表したと考えられる下腹部付近に盲孔が施されている。19にも同様の幅広

いが極浅い擦込が、上部横方向、頭部と胴部との境付近に観察できる。

**板状 A-2 類 (20・21)** 器形全体には全面研磨が施され、器形には側辺部の擦込が認められるものである。20は片面には横方向に沈線が施されていたようであるが、表面剥離のため詳細は不明である。赤色化しており、剥離も被熱による可能性が考えられる。21は縦方向あるいは横方向に沈線あるいは線刻が施されているが、端部の擦切を起点にして施されているようである。

板状 A-3 類 (24・31) 31 は実見できなかった資料であるため、24 のみについて言及する。24 は最終的には表面研磨により扁平カマボコ状の器形自体が形成されているが、敲打調整によってある程度の形状を作り出したようである。また、上端部の作り出しは、最終段階で敲打によって形成されており、部分的に研磨が施されている。上端部を中心に縦方向あるいは横方向に短沈線・線刻が施されている。また、下半部端部にも短線刻が2ヶ所施されている。これらもいずれも側辺の凹みや抉り入れを起点としている。

板状 B-1 類 (3・15) 器形自体の形成は最終的には全面研磨によると考えられる。3 はその後に沈線・線刻が表裏に施されている。表面には弧線が三条認められるが、欠損状況から本来は四条で、二条一単位で外反する弧線を形成したものとも考えられる。裏面にも短線刻が認められる。また最後に打割行為が行なわれたものと考えられる。15 はやや上部に短軸方向に沈線が施され、それに直交する形で長軸方向にも沈線が、さらには外反する弧線も施されている。この四条のやや明瞭な沈線が施される間に、多くの線刻が施されているが、下端部にも外反する小さい弧線が施されており、33 と同様に脚部の表現かもしれない。

板状 B-2 類 (11・25) 11 は器形自体には最終調整として研磨が行なわれており、器面は平滑で、断面形状は扁平な長形状である。平面上部には2ヶ所の盲孔があり、縦方向の太い沈線が下の盲孔を起点として垂下している。外反する弧線は下半に施されており、また側辺には短沈線が認められ、平面側にまで伸びている部分がある。沈線は幅広くかつ深く明瞭なものである。25 は上端・器面中央および下端に盲孔が施されており、中央部分には盲孔を起点・終点として集合線刻が認められる。また、外反する弧線が表面には一条・裏面には集合線刻があり、表面には中央部に短軸方向に短線刻があり、裏面には下端には弧状の集合線刻がある。また、側辺にも短線刻が2条確認できる。その後、25 は上端部を連続敲打により裏面を中心に表面の剥落が認められる。

板状 B-3 類 (34・35) 器形自体の調整と

してはいずれも最終調整の研磨が認められるもので、ほぼ器形が出来上がった状態で側面に擦込を入れている。34 は表面に施されている沈線は細く斜方向および短軸方向については二条一単位となっている。打込によると考えられる盲孔が上端に施されており、ここを起点に一条の沈線が垂下している。また、上端部上面および側辺に長軸方向への沈線が認められる。裏面を中心に極浅い幅広ではあるが線状に擦込が認められ、その後器面に対して垂直方向に打割が行なわれている。35 は側面の擦込を起点に斜方向の太沈線を入れ、並行あるいは対向する形で直線的な集合沈線が認められる。打込によると考えられる盲孔は上下2ヶ所あり、これを結んで沈線が一条垂下する。その後、下半には線刻により縦横方向に集合沈線が施されており、下端には対向する弧線が認められる。また、左上端には敲打によると考えられるアバタ状の痕跡が認められる。

板状 B-4 類 (4・12) 器面調整は最終調整の研磨が認められる。4 は側面を擦込みが施され、それを起点に横方向に沈線が施されている。縦方向の沈線は、複数ある横方向の沈線の前後に施されている。一方、12 は縦方向の2条の沈線が先に施され、その後に横方向の短沈線が施されたようである。12 にはさらに格子目状の線刻が認められる。二破片の接合資料であるが、被熱による剥落の可能性もある。

板状 C-1 類 (22・23・29・30・33) 器面調整はいずれも最終調整の研磨のみが認められる。22 は上端部溝状の深い凹みを形成することによって作り出しになっている。表裏および側面に横方向の沈線があり、上端に盲孔が一ヶ所認められる。その後、器形自体は打割により切断されている。23 も器面調整後に側面には擦込を入れ、表裏面ともに横方向の沈線が施されている。側面の擦込と横方向の沈線は重ならない。その後、赤色顔料の塗布があったものと考えられ、沈線に内に顔料の残存が認められる。29 は側面の擦込から平面に横方向の沈線が施されている部分と、平面のみに沈線が施されているものがある。特に一面では横方向の沈線の後に、斜方向にごく浅い並行沈線が施されたようである。また、器形自体は打割に



より切断されている。30は表裏面に横方向の沈線が認められ、その後に器形自体が打割により切断されている。33は平面側を中心に横方向に沈線が認められるものである。下端には脚部を表したと考えられる斜行する沈線が認められる。上端には盲孔が一ヶ所認められる。上端の欠失はその後を受けたものと考えられる。

**板状C-2類(8・17)** 8は研磨による器面調整後に沈線および彫去による三叉文および瘤状の装飾が認められるものである。表裏には細い盲孔が認められる。図面上端部には幅1cm弱の磨痕が同方向に連続して認められる。最後に器形自体を打割により切断しており、現資料は四分一程度の残存と考えられる。17は研磨による器面調整後に沈線が施されている。沈線は横方向の沈線に縦方向の短沈線を結合させ、三叉文風の効果を表しているか。また、側面にも縦方向に沈線が認められるのが大きな特徴である。沈線施文後に器面全体に赤色顔料の塗布がある。これも最終的には打割による改変を受けており、部分のみの残存である。

**板状C-3(16)** 側面への擦込による挟り入れがあることで、器形全体がヒサゴ形を呈するものである。器面研磨後に平面には横方向を中心に複数条の沈線があり、側面の挟り入れから斜方向に伸びる沈線もある。また、側面および上面には縦方向にも沈線が認められる。これも打割による部分のみの残存である。色調の変化があり、被熱の可能性が考えられる。

**板状C-4(9・13・14)** 9は器面の研磨調整痕は著しくない。上端部の沈線は一周し、作り出しの形成を行なったものと考えられる。器面には横方向に沈線が施されている。表面には剥落部分があり、敲打による作用かもしれない。13は器面調整の研磨痕が認められる。横方向の沈線は五条並行して一周する。その後下半には長軸方向に線刻が施されている。14も器面調整の研磨痕のあとに、横方向の沈線が少なくとも五条並行して認められる。

**板状C-5類(1)** 1は器面の研磨調整痕は著しくない。沈線は横方向と縦方向があるが横方向が先行するようである。横方向の沈線は平面全体に伸びているが、表・裏各面で横方向に沈線が施されているが、やや斜方向を呈する並

行沈線が施されたあとに水平方向に近い並行沈線が施されている。縦方向の沈線は短沈線で上端・下端で表裏を跨ぐように施されている。

**板状D類(5～7・10)** 5～7は器面調整の研磨痕が顕著に残されている。5は横方向に一周する形で沈線が2条施され、その間には×字状の文様が刻まれている。6は中央に挟りがある形状で、上下両端ともに扁平に薄くなる形状である。側面から平面にかけて斜方向に沈線が伸びており、中央で×字状の文様となる。また、中心に縦方向の短沈線が認められる。7は扁平楕円形から一端部に幅広い擦込を行ない頭部の作り出しを行なっている。擦込によってできた挟り部分から表裏面ともに斜方向に幅広い沈線が入る。下端には短い擦込が入り、その上に擦痕が確認できる。中央には横方向に細い沈線が一周する。また、赤色顔料が表面頭部一帯にあり、蛍光X線分析の結果、ベンガラであることが明らかとなっている(川添編2001)。10は器面調整痕が不明瞭である。一端部に擦込を行ない頭部の作り出しを行なっている。D類に関しては、打割による切断が認められないことが大きな特徴である。

**非板状A類(27)** 器面調整の研磨痕が顕著に残されている。その後、上部に回転穿孔と考えられる盲孔が一ヶ所施され、それを挟み側面側には短沈線あるいは線刻が集合した状態で施されている。

**非板状B類(26・28)** 26は報告では独鉗状としているものである。器面研磨調整後に、器面中央に一周する形で幅広の沈線が施されている。また回転穿孔による盲孔が5ヶ所に認められ、横方向の沈線付近には十字状の短沈線あるいは線刻が認められる。その後、一端には打割が認められ、若干の被熱による色調の変化がある。28は平面形状楕円形状を呈するもので、側面には浅く・幅広の擦込が行なわれ、若干の面が形成されている。横方向の集合沈線が施されており、側面を含めて一周するものと考えられる。端部側面には回転穿孔による盲孔が一ヶ所認められる。器面中央には擦痕による平坦面の形成があり、さらに敲打などによる凹みの形成が認められる。全体に被熱が認められ、欠失もそれに伴うものかもしれない。

非板状C類(32) 器形の大まかな形成後、上部端の溝状の擦込による作り出しと下端部擦込により脚部が形成され、さらに上端部の作り出しには側面を溝状にした凸状の作り出しが認められる。横方向に一周する沈線が胴部と胴部と脚部との境にあり、肩部と考えられる作り出しの一端から斜方向に同様な沈線が一周すると考えられる。肩部と考えられる部分には、表裏両面につながり囲むような線刻が確認できる。また、作り出し根元部分には回転穿孔による盲孔の形成が認められる。器形全体は斜め方向に剥落が見られるが、その原因となる敲打痕などの痕跡は明瞭ではなかった。

その他 実見し得なかった伊川津貝塚例は、連弧文のような文様が彫られているとの報告がある(久永1972:139頁)。

以上のことから、大まかには全体の器面調整として研磨調整をし、沈線・線刻・穿孔・打ち込みなどが施されたようである。その後の様相には、敲打・擦痕のあとに最終的には打割のち廃棄されたものと、打割を経ることなく廃棄されたものがある。打割による大きな変形事例としては3・8・16・17・22・29・30と、以外に多くはない。28は被熱による割れと考えられ、32は打割によるかは不明である。また、沈線・線刻は一括して行なわれたものもある一方で、様相の異なる沈線・線刻が複数段階にわたって行なわれているものも認められる。

#### g. 廃棄(埋納)について

今回扱っている資料の中で、出土状況について報告があるものは限られており、多くは遺物包含層中からの出土と考えられ、他遺物とともに出土していた状況のようである。敲打などによる破片資料について、接合関係が認められる事例は現在までのところ確認されていない。

特筆すべき事例のみを以下に記載する。牛牧遺跡例(7)は土器棺墓などを含む遺物包含層中から横位状態で出土したもので、この地点は石鏃が最も集中して出土した地点に当たる(川添2010b)。真宮遺跡例(9)はJ1住居跡床面から、大型の石皿2点とともに出土したと報告されている(斎藤2001:17頁)。桑飼下遺跡

例(35)は、包含層中にやや傾斜しているものの倒立した状況で出土した(渡辺編1975:384頁)。

### 関連資料について

#### a. 線刻礫

人形を形成していることは窺えられないものの、器面には線刻が描かれている資料に線刻礫がある。今回扱った遺跡では、天白遺跡で10例の出土が報告されているが、岩偶岩版類が出土していない遺跡では、滋賀県甲良町北落遺跡、奈良県五條市上鳥野遺跡<sup>\*</sup>がある。東海地域では、線刻礫のみが出土している遺跡は現在までのところ知られていない。

天白遺跡の事例(図8)で概観するならば、岩偶岩版類と同様の砂岩製で、平面形状が楕円形あるいは隅丸台形状を呈する扁平な板状の礫素材を用いているものが多く、一例のみ非板状を呈するものが認められる。器面の片面あるいは両面に認められ、単一線による線刻の場合と、幅1cmから2cmの間に複数条の擦痕状のものが集合している場合とがあり、同一器面に両者が共存している事例もある。円を描くものも一例のみある(37)。いずれの線刻も極めて細いものや浅いものである。これが、岩偶岩版類と同様の祭祀行為に伴う改変痕であるとするならば、岩偶岩版類に認められる同様の痕跡がある程度の形状を整えた後の変形行為痕として抽出できるものと考えられる。

#### b. 土版類

東北・関東地域では、岩版と関連づけて考えられている土版が知られているが、東海地域ではこの土版とは形状の異なる資料が知られている(図9)。本刈谷貝塚出土例(42)は、2分の1程度が残存しているもので、形状から岩偶岩版類の板状C類に相当するものと考えられる。当該時期の半截竹管文系条痕土器とは異なり、胎土の粒子が細かく、焼き締まりのある資料である。

下方側辺には2ヶ所に抉り入れが認められ、

<sup>\*</sup> 中村健二のご教示による。

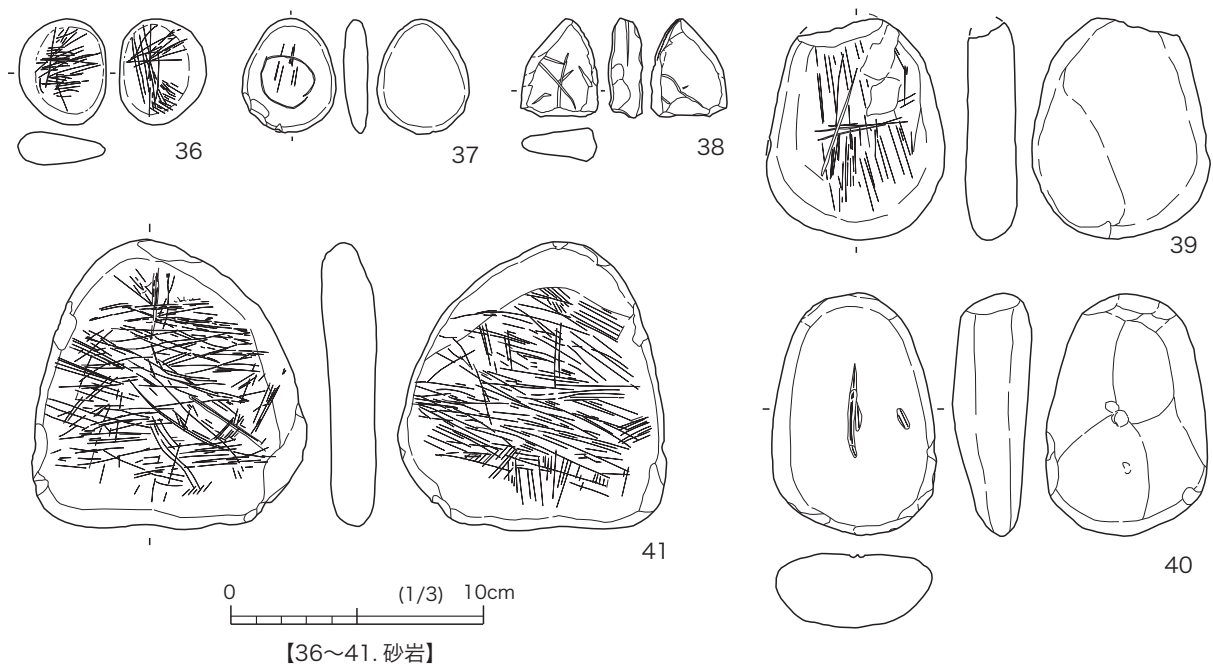


図8 天白遺跡出土線刻礫

いずれも焼成前に施されている。しかし、表面には縦・横・外反弧状の線刻が認められるが、これらはいずれも焼成後に施されている。横方向の線刻は、側辺の抉り入れを起点にしているようである。また、裏面には擦痕が各方向に認められ、これも焼成後に施されていると考えられる。最後に、一方向からの打割による切断が行なわれ、廃棄されたと考えられる。

この事例は、焼成前の製作状況と、焼成後に加えられた改変行為が別の段階として明瞭に区別できる点が重要である。この資料に関していえば、器形の成形と側面の刻みのみが焼成前に行なわれ、焼成後の改変行為により、線刻と磨痕とが残されたといえよう。

### c. 土偶

土偶との関連性については、後期分銅形土偶と岩版類との関連性が中村健二によって既に指摘されている（中村 2000）。中村は、時期的併行関係および部分的文様の共通性などから、分銅形土偶の有文化には岩版類が影響を与えた可能性を指摘した（同：186 頁）。一方大野淳也は、西日本域で出土している岩版類について、長田友也の論を受けて（長田 2004）東日本地域の後期岩版類と西日本域の分銅形土偶との折衷したものとした（大野 2007：253 頁）。分銅形土偶に対して、後期中葉から後葉にかけて石素材への転換があり、かつ土偶とは異なる岩偶岩版類としての特徴を有する道具になったことは、言えるであろう。今回の集成で、この分銅形土偶に関連して注目できる新たな資料として、保美貝塚例がある。16 は平面形状がヒサゴ形を呈し、より分銅形土偶との関連性が指摘できるものである。上面端部および側面には長軸方向に沈線が認められるなど、この点も分銅形土偶にしばしば認められるものに近い。但し、16 は文様自体が弧線を中心に形成されており、文様の構成が大きく異なるものである。帰属時期がやや不明瞭なところがあるが、保美貝塚の形成時期の盛行が後期後葉以降からが主体となる

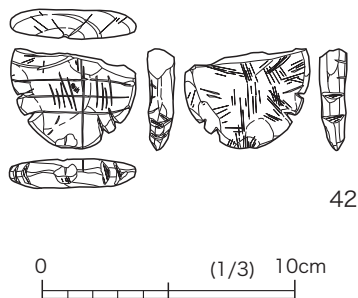
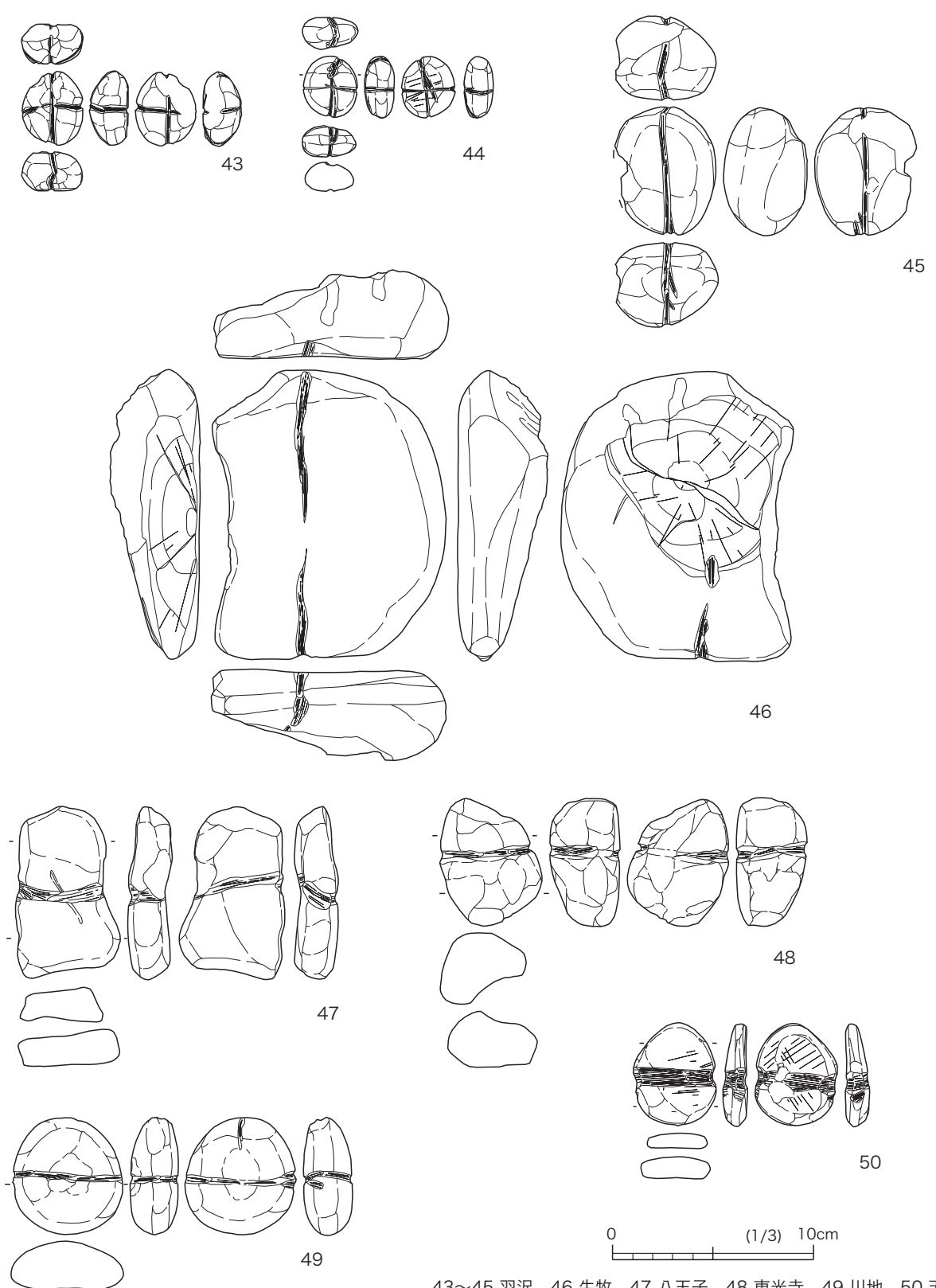


図9 元刈谷遺跡出土土版





43~45 羽沢、46 牛牧、47 八王子、48 東光寺、49 川地、50 天白  
 【43~45・47・49・50. 砂岩、46. 凝灰質砂岩、48. 軽石】

図10 有溝石錘など

ことを勘案すると、穴太遺跡例や桑飼下遺跡事例よりも後出する段階のものとも考えられ、伊勢湾岸西岸地域に岩偶岩版類が入ってきたときの様相を示しているとも考えられよう。

一方、縄文時代晩期に関して言えば、土偶と岩偶・岩版類との関連性は、後期と比べて顕著ではない。

#### d. いわゆる石錘類

縄文時代の石錘類には、打欠石錘・切目石錘・有溝石錘が知られている。最近、石錘類について言及するなかで、東海地域の縄文時代後・晩期の切目石錘・有溝石錘と報告などで言われている資料を整理し、切目・有溝1類から8類までの八群に分け、実際は多様な性格を有している遺物の集合体であるところを指摘した(川添2010a)。この中で、平面形態が円形あるいは隅丸形状を呈するもので溝が十字状に施されているものとした切目・有溝7類と、大型で溝が巡るものを一括した切目・有溝8類の一部に、今回取り上げている岩偶岩版類に類似するものがあると考えている(図9)。43・44が切目・有溝7類、45から50は切目・有溝8類に該当する。

43・44は羽沢貝塚出土例である。43は球形を呈しているものではなく、側面観に現れているように、一平面には平坦面が形成されており、断面形状はカマボコ形を呈するものである。44も同様で、一平面に平坦面が形成されており、研磨痕あるいは磨痕が認められる。沈線内には不明瞭であるが、浅い盲孔が二つ施されているようである。石材は両者とも砂岩で色調は黄褐色を呈する。また、天白遺跡で球状石製品という名称で報告されている資料もこれと同様のものであろう(森川編1995:224頁)。

切目・有溝8類と考えられる事例についても概観する。45・46は長軸方向に沈線あるいは線刻が認められるものである。45は羽沢貝塚出土例で、断面形状が円状を呈する。46は牛牧遺跡出土例で、一平面が平坦状を呈しているものである。47・48は短軸方向に沈線あるいは線刻が認められるものである。47は八王子貝塚出土例で、断面形状が扁平な長方形状を呈するもので、縦方向に短沈線が施されているも

のである。48は断面形状がやや不安定ではあるが厚手のものである。49・50は平面形状が正円に近いものである。49は一平面に平坦部分が認められ、断面形状がカマボコ状を呈するものである。一周巡る沈線に対して垂直方向で端部に短沈線が認められる。50は片面に平坦面を有する扁平な形状を呈するものである。石材は、45・47・49・50が砂岩、46が凝灰質砂岩、48が軽石である。

43・44の回転穿孔と、47・49の短沈線以外は、明瞭な沈線のみで遺跡に廃棄されているといえよう。この遺物群は、岩偶岩版類と有機的関係を有しているながら、細い線刻のみで廃棄されている、線刻礫とは相対する関係の資料と位置づけることができよう。

### 東海地域以外の岩偶岩版類について

#### a. 東北地域

これまでの研究主体の地域であり、岩偶・岩版といえば、東北・関東地域の、縄文時代晩期の事例を示す場合が圧倒的多数であったといえる。資料の様相およびこれまでの研究の概略は上述した研究史の方に譲るとして、ここでは、岩偶および岩版の関係、およびヴァリエーションについて、ごく簡単に触れる。

東北・関東地域は広く、様相は一つではないようである。まずは特徴的な地域として馬淵川流域がある。ここでは岩版に対して、形状が明瞭に異なる岩偶(馬淵川型岩偶)が存在する(51)。立体的な像に形成されているものであり、女性を表現しているのは明らかである<sup>\*</sup>。一方、その他の地域の岩偶といわれる資料は、形状が多様化しているようであるが、秋田県湯出野遺跡例や山形県宮の前遺跡例では、細長くかつ柱状の形状を呈した先端に、人面の装飾が施されているものもある。

小杉康が呼称したタブレットBの内容のように、関東・東北地域の岩版・土版には複数系統のものが存在しているようである(小杉1986)。同様に、稲野彰子が論じた、宮城県沼津貝塚・宮城県里浜貝塚・新潟県元屋敷遺跡・

<sup>\*</sup> 45の詳細な観察・分析結果については、別稿に掲載予定である。

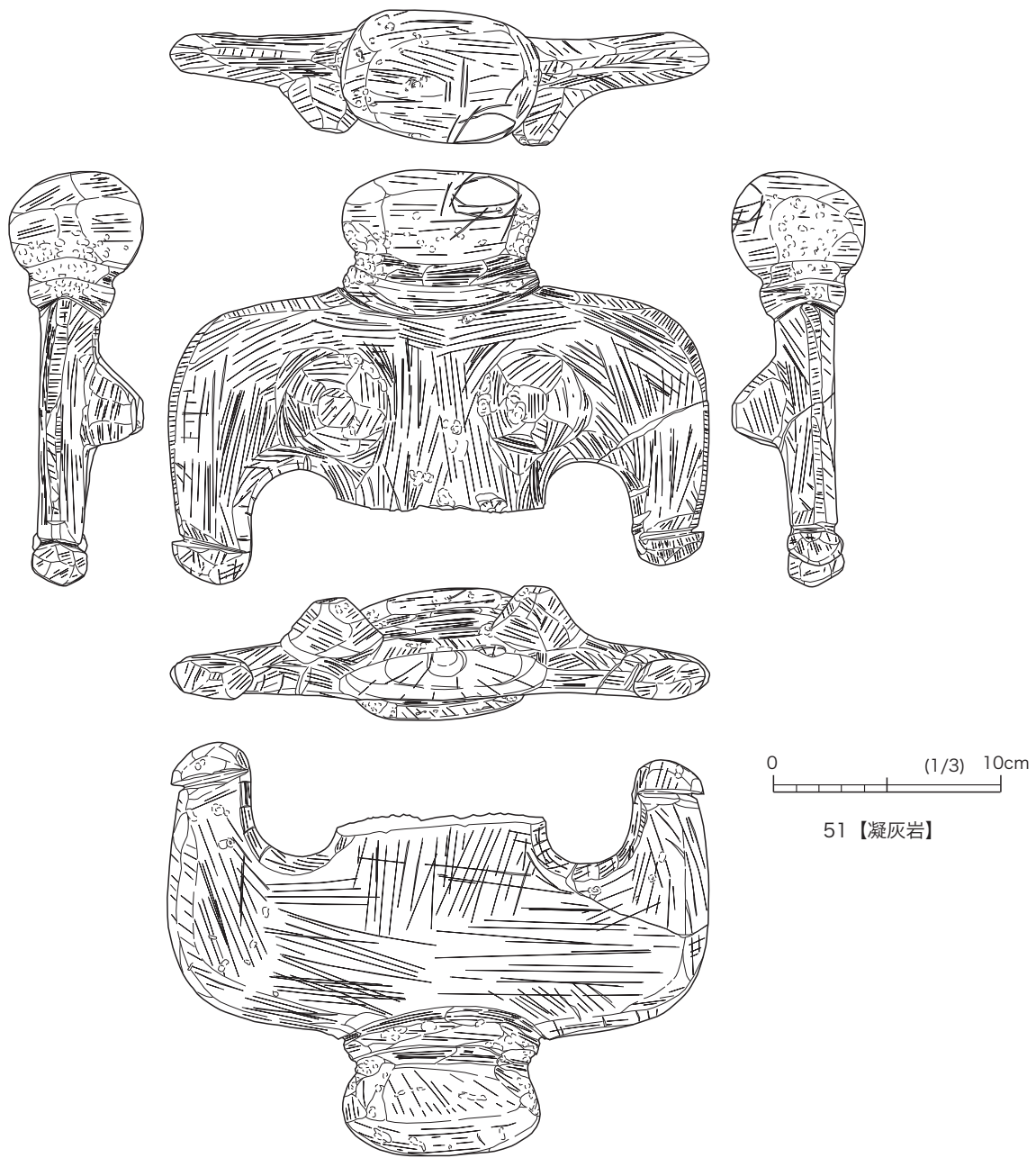


図11 鱒沢遺跡出土岩偶

富山県桜町遺跡の事例のなかで、厚みをもち、身体的意匠があり打割を除いて著しい変形行為は認められない一群の存在が注目できる（稲野彰 2004）。

タブレットB類として報告された、福島県薄磯貝塚の事例の中には、パンツ形文様などを特徴とする沈線・線刻を有する事例が多数存在する（小杉 1988）。パンツ形文様自体は、馬淵型岩偶や土偶にも付されているもので、これら

との有機的関係を示すものと考えられよう。しかし、多くは器面の形状としては素材礫に近い形状のものが使用されているようで、側面から挟り入れをして人形を呈するようにしているものは若干である。また、正中線は連続した円文様に貫くものなどに認められ、パンツ形文様に付されているものにはほとんど認められないようである。

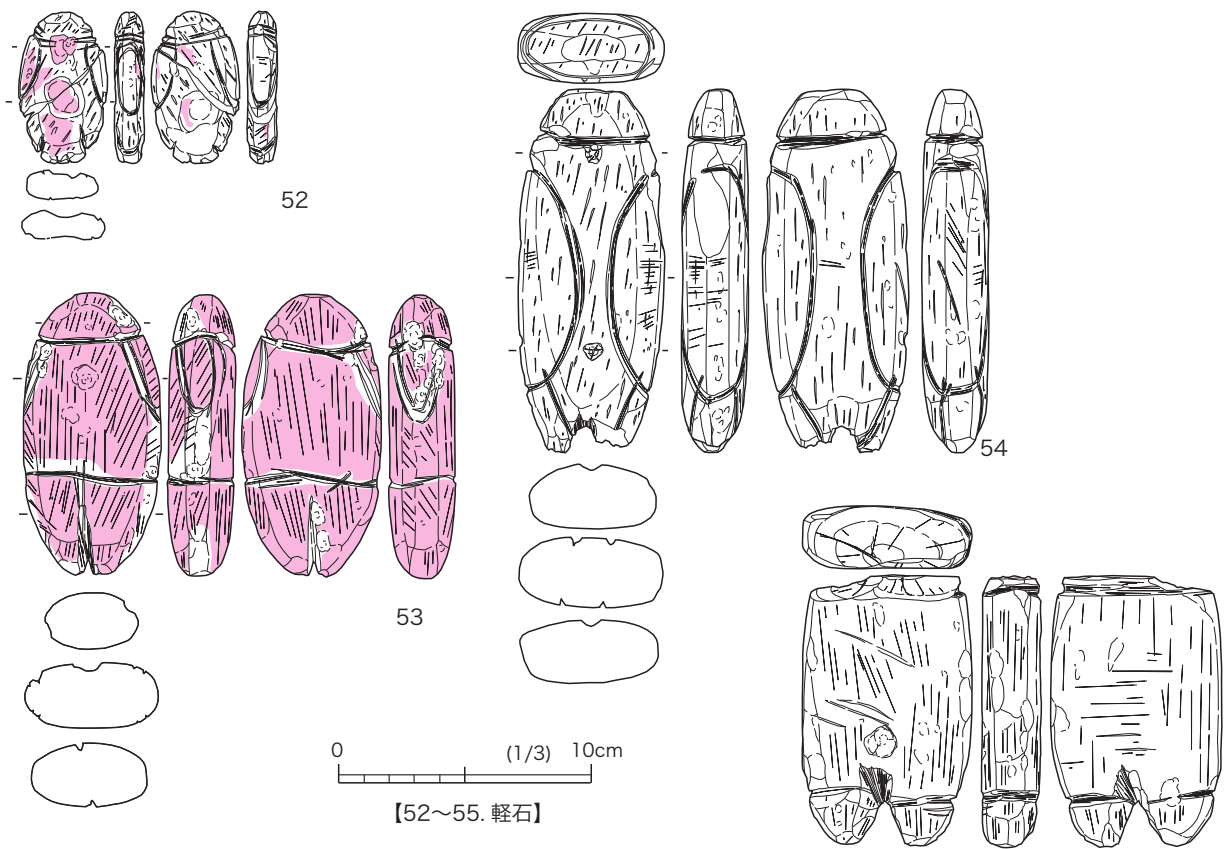


図12 柘原遺跡出土 岩偶岩版類

### b. 上越・北陸地域

この地域の資料については、上述した大野淳也の論考を参考に概観する（大野 2007）。富山県桜町遺跡では、近年 14 点もの岩偶・岩版類が出土しており、その報告と分析が行なわれた。この一群の資料の特徴は、盲孔は 14 点中 8 点と広く認められるものの、盲孔のある面での正中線の認められるものが 1 点と少ないばかりか、対向する弧線はいずれにも確認できない。また、板状のものばかりではなく、厚みのある卵形の断面形状を有する資料が 1 点確認できている。この資料は、頭部に横方向の沈線が集中して認められ、表裏の上部と頭頂部に背反する弧線の内部を彫去した連結三叉文が施されているものである。

他の遺跡事例では、平面形状楕円形の器形に、盲孔や直線的な沈線あるいは線刻が施されている事例が多いようである。その中で、平面形状がヒサゴ形を呈する、石川県酒見新堂遺跡の事例と新潟県寺地遺跡の事例は、東海地域の

板状 C-3 類との関連で注目すべき資料と考えられる。いずれも横方向に展開する三叉状の沈線・線刻があり、それが重層化して存在している。上面端部にも文様が認められる点も共通するようである。

### c. 南九州地域

南九州地域では、軽石製の岩偶が存在していることが知られている（図 12）。上加世田遺跡例に加え、近年の鹿児島県垂水市柘原貝塚では多量の軽石製品が出土しており、その中に岩偶が 64 点含まれている。柘原貝塚の岩偶といわれている資料は、器形全体の平面形状が長楕円形を、断面形状が長楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、本稿でいうところの板状を呈するものが主体で、断面形状が円形に近い楕円形状を呈する、非板状のものはごく若干である。沈線は、上端部には横方向および器形上部あるいは中央部付近には対向する弧線および斜沈線が認められるものが多数を占め、器面中央上部ある



いは上部と下部に敲打などによる盲孔が認められる。さらに赤彩が施されている事例が多見でき、52については理科学的分析の結果、ベンガラであることが報告されている（鶴飼・羽生1999）<sup>\*</sup>。53では、さらに側面部を中心にアバタ状の敲打痕が認められる。岩偶には完存していない資料も多くはないものの存在しており、小型で薄手のものでは破損状況が不明瞭であるが、55など大型で肉厚のものについては打割などの行為が行なわれた可能性も考えられる。

これら岩偶とする資料については、近年、寒川朋枝による分析がある（寒川2002など）。岩偶と石棒との区別が難しいものの存在など、これまでの成果を確認しつつ、表裏面の沈線の存在とサイズなどから、手にもって使用する岩偶の存在を指摘した（同：174頁）。もし上述した敲打痕の観察が適正であるならば、この手にもつ行為の延長に敲打による改変行為があったものとも考えられる。

## まとめ

以上、東海地域の岩偶岩版類について検討をし、加えて関連資料についても簡単に触れた。ここで再度、東海地域の岩偶岩版類に戻って、その意義について私見を述べる（図13）。

岩偶岩版類を検討する上で、同時に検討すべき資料に線刻礫と石錘類の一部がある。線刻礫は、この線刻自体で人形の表現を行なっているものと、表現対象物は不詳なものがあるが、特に後者の場合に線刻礫と呼称される場合が多い。また、石錘類はいわゆる有溝石錘といわれているものの一部に、岩偶岩版類と有機的関係を有していると考えられるものがある。これら三者をまとめて広義の岩偶岩版類とした場合、ここでこれまで取り上げてきた岩偶岩版類を、狭義の岩偶岩版類とすることができる。但し、線刻礫および関連のある有溝石錘は、東海地域の中では若干数であるため、以下の文では狭義の岩偶岩版類を、単に岩偶岩版類と呼称する。

<sup>\*</sup> 47の赤彩については、鉄分の付着とも考えられるものの、可能性を重視して赤彩表現を行なった。報告では、局所的な残存と記録されている。

岩偶岩版類は資料数33点に対して、提示した分類は、計17類型にも及び、形状のヴァリエーションは多様であるといえる。また、出土している19遺跡中、15遺跡では一遺跡から1点のみの出土と、単発的な出土傾向を示す場合が多いのも特徴として挙げられる。

当地域に、石製の人形としての岩偶岩版類が認められるのは、縄文時代後期中葉以降と考えられ、縄文時代後期の事例としては、天白遺跡・下沖遺跡・佐八藤波遺跡・片野殿垣内遺跡・穴太遺跡・桑飼下遺跡の事例が該当し、中村遺跡・久須田遺跡の事例もその可能性が考えられるもので、伊勢湾岸西部以西に多く認められる。板状A類が多く、非板状もこの時期である。

本分類の板状B-3類は、東北地域などからの後期岩版類の影響があったとはいえ、形状的な由来は分銅形土偶からの素材転化が契機かもしれない。但し、35の下半線刻のような線刻は分銅形土偶には認められないものであり、単なる土偶の代わりではなく、石製品ならではの役割が存在していたものと考えられる。

佐八藤波遺跡の非板状C-3類（32）は、現状では東海地域の資料には類例が見当たらないといえる。但し、部分的な要素をつなぎ合わせると、既に大野が指摘しているように南九州域の岩偶といわれる一群に最も近い。頭部・胴部との境に沈線を配置し、また脚部付根部分に沈線を配置するのは49に類似するものであり、かつ頭部の側面側に飛び出す凸状の形成は、鹿児島県上加世田遺跡の動物岩偶といわれている資料に類似する。また、肩部からの斜方向の沈線が表裏面に展開することも、南九州域の資料と大いに共通する点である。しかし、南九州域の資料は軽石製であり、佐八藤波遺跡での結晶片岩製と使用石材が異なることと、斜方向に太い沈線が施されているという点からも、南九州域の岩偶岩版類そのものが直接持ち込まれた訳ではない。

一方、縄文時代晩期の事例は、伊勢湾岸東部に多く認められる。後期との関連で注目できる事例としては、板状C-2類・C-3類の存在で、板状B-3類の系譜を引くものと考えられる。このような変遷が、分銅形土偶との極めて有機的関係を示しながらも、石川県酒見新堂遺跡や新

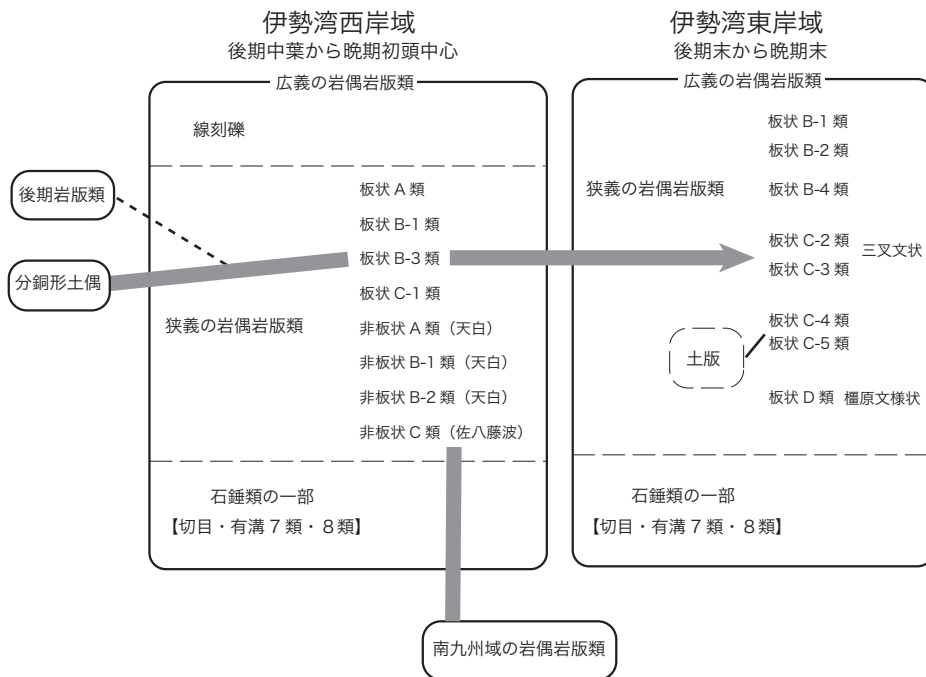


図 13 東海地域における岩偶岩版類の変遷

瀧県寺地遺跡の事例と同様に、後期後半から晩期にかけて石製の人形として独自の展開を果たした様子を窺うことができるかもしれない。また、板状 B-1 類・板状 B-2 類のような正中線・対向する弧線を有する資料が存在する一方で、板状 C-2 類・C-3 類のように板状 B-3 類の系統を引くと考えられる資料の存在と、横沈線を主体とする板状 C-4・C-5 類の存在・さらに板状 D 類という、いわば東日本域には見られない様相を呈するものが多く認められる。1・7・9 などの平面形状・沈線の多条化・正中線の不存在など、当地域の岩偶岩版類の特徴として挙げる事ができよう。これらも広い視点では南九州域の岩偶岩版類に個別部分的に類似する要素を挙げる事ができるものの、最大の相違点としては盲孔の不存在である。32 の佐八藤波遺跡事例の段階から、5・6 に認められる X 字状の文様の存在など、東海地域の特徴が表出した状態とも説明できるかもしれない。

また、これらの遺物が祭祀行為に使用されたとするならば、最終的に打割状態で出土する資料と、完存状態で出土する資料との差異が大きな視点となるとも考えられる。板状 B-1 類・B-3 類・C-1 類・C-2 類・C-3 類が打割状態での廃棄行為が確認できたものであるが、この類

型の全資料に打割が行われた訳ではないことにも注意すべきであろう。

## 今後の課題

今回、岩偶岩版類に関して、東海地域の資料紹介を行ない、若干の考察を行なった。しかし、具体的に行なわれた祭祀行為についての言及を行なう状況にはまだ至っていないので、これに関しては大きな課題としたい。これには、各類型の岩偶岩版類が表出している人形の性格を特定する必要がある。大きくは、(1) 女性、(2) 男性、(3) 両性、(4) 性の区別なし、の四種が考えられるが、列島内の類例を概観するだけでも、すべての資料が同一の性格を有していないと考えられることは明らかである。

本稿では、これまで研究の主体であった東北地域・関東地域の岩偶岩版類との関係が不明瞭なままに検討を終えざるを得なかった。これは、筆者が特に岩版やその類例資料について調査が不十分であったことに起因する。この点はきわめて反省すべき点であり、今後、早急に善処したい。

また、遠隔地地域との関係については、佐八藤波遺跡事例のように南九州域との関係について

もさらなる検討が必要である。柘原貝塚で多量に出土している軽石製品の中の、船形と円盤形と言われているものに類似する資料が、1点ずつではあるが天白遺跡でも報告されている。天白遺跡の事例は、当遺跡の岩偶岩版類に使われたのと同様な砂岩である。伊勢地域と南九州地域を直接結ぶというものかもしれないし、西日本一帯に点在する資料なのかもしれない。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方、および機関からご教示および便宜を図って頂いた。ここに感謝の意を表する次第である。

石黒立人・鶴飼堅証・大塚達朗・大野淳也・長田友也・田村陽一・永井宏幸・中村健二・羽生文彦・豆谷和之・山崎純男

愛知県教育委員会・伊勢市教育委員会・岡崎市教育委員会・海津市教育委員会・可児市教育委員会・刈谷市教育委員会・滋賀県教育委員会・田原市教育委員会・垂水市教育委員会・豊川市教育委員会・中津川市教育委員会・南山大学人類学博物館・西尾市教育委員会・浜松市教育委員会・舞鶴市教育委員会・松坂市教育委員会・三重県教育委員会・美濃加茂市教育委員会

## 参考文献

- 天羽利夫,1964「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」『史学』37-4.77～96頁。三田史学会。
- 池上啓介,1933「土版岩版の研究「特に土版岩版の形式及び分布状態に就て」」『上代文化』10.42～54頁。上代文化研究会。
- 磯前順一・斎藤和子,1999「遺物研究 岩版・土版—形式・意味・構造—」『縄文時代』10(第4分冊).147～155頁。縄文時代文化研究会。
- 稲野彰子,1982「関東地方における岩版・土版の文様」『史学』52-2.159～170頁。三田史学会。
- 稲野彰子,1983a「岩版」『縄文文化の研究』9.102～113頁。東京 雄山閣。
- 稲野彰子,1983b「岩版・土版出土遺跡—東北・関東地方—」『考古遺跡遺物地名表』408～414頁。東京 柏書房。
- 稲野彰子,2004「岩版の周辺」『時空をこえた対話—三田の考古学—』103～108頁。慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室。
- 稲野彰子,2005「馬淵川流域における岩版・土版第1類と第2類—身体意匠に注目して—」『北上市立博物館研究報告』15.1～8頁。北上市立博物館。
- 稲野裕介,1983「岩偶」『縄文文化の研究』9.86～94頁。東京 雄山閣。
- 稲野裕介,1998「亀ヶ岡文化における岩偶(1)」『列島の考古学』69～78頁。渡辺誠先生選集記念論集刊行会。
- 稲野裕介,1999「亀ヶ岡文化における岩偶(2)」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』3.389～400頁。東京 勉誠出版。
- 稲野裕介,1999「遺物研究 岩偶」『縄文時代』10(第4分冊).139～146頁。縄文時代文化研究会。
- 稲野裕介,2004「岩版と岩偶の「岩」の用字について」『時空をこえた対話—三田の考古学—』97～102頁。慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室。
- 稲野裕介,2007「岩偶(晩期)」『縄文時代の考古学』11.55～60頁。東京 同成社。
- 江坂輝彌,1960『土偶』東京 校倉書房。
- 大野淳也,2007「北陸地方における岩版類について—桜町遺跡出土品を中心として—」『桜町遺跡発掘調査報告書 縄文時代総括編』219～264頁。小矢部市教育委員会。
- 大野延太郎,1897「土版と土偶の関係」『東京人類学会雑誌』12-131.201～204頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1898「岩盤も土偶に関係あり」『東京人類学会雑誌』13-144.235～236頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1900「石製人形及び石製模造品」『東京人類学会雑誌』15-171.351～355頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1901「石器時代土偶系統品と模様の変化に就て」『東京人類学会雑誌』16-184.411～413頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1918「土版・石版の形式分類」『人性』14-9.489～496頁。裳華房。
- 長田友也,2004「新潟県アチャ平遺跡出土の線刻礫(岩版)についての考察」『三面川流域の考古学』3.1～34頁。

## 資料の所在

1. 浜松市教育委員会、2・3. 中津川市教育委員会、4. 美濃加茂市教育委員会、5・6. 可児市教育委員会、7・10・11・46・48. 愛知県教育委員会、8・42. 刈谷市教育委員会、9. 岡崎市教育委員会、12～14. 豊川市教育委員会、15・51. 南山大学人類学博物館、16・17・49. 田原市教育委員会、18～28・36～40・50. 三重県教育委員会、29・30. 松坂市教育委員会、31. 田村・大下 2001より引用、32・33. 伊勢市教育委員会、34. 滋賀県教育委員会、35. 舞鶴市教育委員会、43～45. 海津市教育委員会、47. 西尾市教育委員会、52～55. 垂水市教育委員会

## 追記

脱稿後に、名古屋市玉ノ井遺跡出土資料を実見した。白色を呈する砂岩製で、断面形状は厚みのある方形状である。両側辺には切目状の加工が施されているもので、これも岩偶岩版類に関連する資料と位置づけられよう(瀬瀬 2003:96頁32)。晩期前半の資料である。

- 長田友也,2007「後期岩版類」『縄文時代の考古学』11.126～131頁。東京 同成社。
- 金子昭彦,2001『遮光器土偶と縄文社会』東京 同成社。
- 河口貞徳,1973「上加世田遺跡第6次」『鹿兒島考古』7。
- 川添和暁,2010a「縄文時代の石錘類について—豊田市今朝平遺跡出土資料の分析を中心に—」『豊田市史研究』1.103～130頁。豊田市。
- 川添和暁,2010b「貝層形成の見られない遺跡における形成過程について—東海地域の縄文時代晩期を中心に—」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター2009年次報告書付編研究会・シンポジウム資料』南山大学人類学博物館。
- 綿編 茂編,2003『埋蔵文化財調査報告書 44 玉ノ井遺跡 (第3・4次)』名古屋市教育委員会。
- 小杉 康,1986「千葉県江原台遺跡及び岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品—所謂亀形土製品、土版、岩版の型式学的研究と用途問題—」『明治大学考古学博物館館報』2.51～71頁。明治大学考古学博物館。
- 小杉 康,1988「石製タブレットB群」『薄磯貝塚』232～287頁。いわき市教育委員会。
- 小林達雄,1967「縄文晩期における土版・岩版—研究の前提」『物質文化』10.1～8頁。物質文化研究会。
- 斎藤和子,2001「岩版・土版の身体表現について—土偶との関わりから—」『人類学雑誌』108.2.61～79頁。日本人類学会。
- 佐藤伝蔵,1897「共同備忘録 (五)」『東京人類学会雑誌』12.138.487頁。東京人類学会。
- 寒川朋枝,2001「南九州の軽石製岩偶」『縄文・弥生移行期の石製呪術具』3.29～47頁。国立歴史民俗博物館春成秀爾研究室。
- 寒川朋枝,2002「祭祀行為についての検討」『人類史研究』13.163～175頁。人類史研究会。
- 鈴木克彦,1980「岩版・土版の研究序説—風韻堂コレクション資料編—」『調査研究年報 (1979年度)』5.67～128頁。青森県立郷土館。
- 鈴木克彦,2005「石偶に関する研究」『北奥の考古学』。葛西勲先生還暦記念論文集刊行会。
- 須藤 隆,1974「青森県二枚橋遺跡出土の打製石偶について」『日本考古学・古代史論集』89～118頁。伊東信男教授還暦記念会。
- 芹沢長介,1960『石器時代の日本』東京 築地書館。
- 鷹野光行,1977「関東地方の土版の分類について」『古代文化』29.10.43～49頁。財団法人 古代学協会。
- 鳥居龍藏,1922「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学雑誌』37.11.371～383頁。東京人類学会。
- 鳥居龍藏・内山九三郎,1893「武蔵国荏原郡調布田下沼部貝塚」『東京人類学会雑誌』8.86.299～308頁。東京人類学会。
- 中村健二,2000「近畿地方における縄文時代後期土偶の成立と展開」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』4.169～194頁。東京 勉誠出版。
- 中谷治宇二郎,1943『日本石器時代提要』東京 甲鳥書店。
- 山崎五十磨,1920「大關国福山村石器時代遺跡より発見したる石偶に就て」『考古学雑誌』106.334～338頁。考古学会。
- 横山勝栄,1980「新潟北部における土版・岩版の存在とその意義—地域性考察ひとつの視点—」『考古風土記』5.167～176頁。青森 (鈴木克彦)。
- 米田耕之助,1983「土版—研究動向」『縄文文化の研究』9.95～101頁。東京 雄山閣。
- 渡辺 誠編,1997『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』財団法人 古代学協会。
- Edward S. Morse,1879 SHELL MOUNDS OF OMORI

## 報告書など

- 渥美町郷土資料館,1997『渥美半島の縄文文化』
- 岩中淳之,1991『佐八藤波遺跡発掘調査報告』伊勢市教育委員会。
- 大江まさる・紅村 弘,1973『北裏遺跡』可児町北裏遺跡発掘調査団。
- 加藤安信編,1993『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 加藤岩藏・齋藤嘉彦ほか,1972『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会。
- 川添和暁編,2001『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 河野典夫ほか,1991『久須田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会。
- 小林知生ほか,1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。
- 齋藤基生・藤村 俊,2002『尾崎遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会。
- 齋藤嘉彦ほか,1968『中条貝塚』刈谷市教員委員会。
- 齋藤嘉彦,2001『国指定遺跡 真宮遺跡』岡崎市教育委員会。
- 鈴木敏則編,1992『佐鳴湖西岸遺跡 (本文編 II)』財団法人浜松市文化協会。
- 田村陽一・大下 明,2001『片野殿垣内遺跡発掘調査報告書』勢和村教育委員会。
- 仲川 靖編,1997『穴太遺跡発掘調査報告書 II』滋賀県教育委員会。
- 中田良三・篠原英政・住田誠行,1979『中村遺跡』中津川市教育委員会。
- 久永春男ほか,1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。
- 前田清彦編,1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会。
- 森川幸雄,1995『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター。
- 宮石宗弘,1957『大坪遺跡』山口遺跡調査保存会。
- 安井俊則編,1991『麻生田大橋』愛知県埋蔵文化財センター。
- 和氣清章,2000『下沖遺跡発掘調査報告』娯野町教育委員会。
- 渡辺 誠編,1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館。



# 金剛坂式土器の系譜

## ～紅村弘の学説を振り返る～

● 永井宏幸

紅村弘が提唱した金剛坂式土器の系譜を検討する。まず紅村による半世紀におよぶ研究から、紅村の言説を振り返り、現状での定義を再考する。ついで、遠賀川系土器から派生したのではなく、縄文晩期土器からの系譜を主張する紅村の考え方に導かれながら、近年の新出資料に型式学的検討を加える。ところで、伊勢湾西岸以東の地域型突帯紋系土器は馬見塚式土器の無紋・条痕紋土器（増子2類）を含まない。一方、西岸域における突帯紋系土器様式の終焉と遠賀川系土器の交流の一端が金剛坂式土器を成立させた。その過程を西岸域および琵琶湖周辺を含めた環伊勢湾岸域に求め、検討した。その結果、突帯紋系土器様式と遠賀川系土器様式の折衷形として在地型遠賀川系土器、すなわち金剛坂式土器が成立したことを提示した。

### はじめに

金剛坂式土器は伊勢湾周辺地域で生成した地域型遠賀川系土器である。紅村弘による半世紀にわたる研究の蓄積がある。本稿では紅村の貝殻山式と西志賀式2類に充てられ、亜流の遠賀川、赤焼遠賀川、そしてこれらのうち、新しい部分を金剛坂式土器と呼称された土器群について、その系譜を検討する。紅村の議論は金剛坂式土器のみを取り上げては完結しない。そこで、「煮沸形態係論」と「条痕顕示論」、そして縄文文化終末と弥生開始の「関係問題」へ、紅村による最近の見解（紅村2005）を素描する。その上で紅村による金剛坂式土器の研究を基軸に据え、研究史を振り返ってみたい。紅村の見解を時系列として、新知見による修正と呼称の変化を示してみたい。

特に、1970年代前半に相次いで調査成果をもたらした金剛坂遺跡をはじめとする三重県下の研究者らによる見解、これらに対する反駁はさらなる軌道修正を余儀なくされる。

新たな展開は、山中遺跡の調査報告による新出資料である（服部ほか1992）。すなわち、地域型突帯紋系土器である「天保型変容壺（佐藤1999）」から金剛坂式壺への変遷過程を提示し、具体例によって紅村の想定が繋がった（紅村1995）。この変遷過程については、さらなる新出資料が滋賀県烏丸崎遺跡などの調査により補

強でき、小竹森直子（小竹森2007・2008）や拙稿（永井2007）を含めて議論の本題とする。

近年の新出資料は三重県と滋賀県に偏り、愛知県では麻生田大橋遺跡の報告以降ほとんど知られていない。さらに増子康真による馬見塚式の定義が尾張平野より西側に適用しないことも判明しつつある。そこで、以前検討した拙稿（永井2008）とこれに対する増子の反論（増子2009）を受け、伊勢湾西岸域の変遷を再論する。西岸域と濃尾平野から三河地域が別型式とすれば、増子2類を指標とする馬見塚式の適応範囲と適応しない別型式を示さねばならない。そうすると、西岸域から琵琶湖沿岸に展開する増子1類を指標とする型式名を提示する必要性が浮上し、さらに継続する檜王式併行期についても俎上にあがる。つまり、遠賀川系土器が西岸域で出現する時期の突帯紋系土器様式最終末の型式を示す必要がある。前稿で「馬見塚式終末期新相の可能性のある土器群」が相当する。馬見塚式から檜王式に相当する西岸域の編年を整備することにより、金剛坂式土器の成立が明確になる。換言すると、紅村の意図する変遷過程を補強する結果となる。ただし、紅村の金剛坂式土器に関する評価、遠賀川集団に対する「自主協調」という評価に直結はしない。

縄文時代晩期後葉の地域型突帯紋系土器を基盤とする土器型式から遠賀川系土器様式の影響を受けて新たに派生した地域型遠賀川系土器の系譜を検討することが、本稿の目的である。そ

こでまず金剛坂式土器の成立過程について、紅村の研究を振り返り、議論の出発点としたい。

## 研究史

### (1) 紅村弘の研究視座

「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容」は、自身の着眼点を整理し、自ら解説を加えた「紅村自叙伝」と言えよう(紅村 2005)。紅村は「縄文と弥生の関係」を論ずる場合、土器のみ俎上にあげることが多い。現在もっとも支持されている「日本で食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」を弥生時代とする佐原眞の定義(佐原 1975)は一切受け入れない。主張する定点は土器に現れた「人」の問題である。「抽象的な言葉の一般論を幾ら並べても具体的な解決にはならない」議論を紅村は無意味とする。考古資料を使い「固有名詞不在による人の示現」を説明することが必要であると紅村は主張する。つまり、縄文と弥生の「関係問題」は「遺物という品物の分類・編年・比較の研究」から「人の行動・習慣・觀念の研究」への転換だという(紅村 2003a)。「人」を議論の主眼に置く紅村の出発点は「愛知県における前期彌生式土器と終末期縄文式土器との関係(以下関係論文)」(紅村 1956)である。のちに紅村の二枚看板となる「煮沸形態関係論(以下関係論)」と「条痕顕示論(以下顕示論)」の着想も「関係論文」である。ここでは「関係論」と「顕示論」の2点を取り上げておきたい。

「関係論」について、紅村は「変化の少ない煮沸形態の型式的つながり」から、社会的な集団意識としての「人」による直接的関係を説明する。つまり、流行に流されない基層としての変化を煮沸形態に見出し、新来文化による「文化変容」の現象として捉える。直接的関係とは血縁的関係とし、新来の進出者と区別する。ここで確認しておきたいことがある。紅村の議論に示現する「人」や「血縁」は生物学的な用語ではない。「政治」にいたっては国家・民族としてだけでなく、社会集団および集団間の概念として適用できる場合もあることに留意しておかねばならない。私

はここに紅村の考古学的手法のひとつをみる。「関係論」の題材として取り上げられる「削痕遠賀川式」の担い手である「縄文晩期人」は「進出遠賀川式」集団によって「アイデンティティを喪失」したと紅村は解した。表層(紅村の言う「奢侈的」)の変化と基層(日常的な「生活用具」)の変化の時間差について、前者に「外来人の入植文化」、後者に「在地人の従属・模倣の文化変容」をそれぞれ帰属させる。つまり基層と表層に従属的關係を付し、社会的階層性を導いている。従属的關係は「顕示論」にもつながる。

「顕示論」は「バーバリズム的表現によるアイデンティティの発露」と説明する。紅村は「美麗を誇示する」遠賀川の壺に対して「粗い条痕」の条痕系の壺に「対立觀念の顕示」を見出す。「条痕系土器の条痕とは装飾でも器面調整でもなく、共同体としての象徴的意義を持つ「表現・標徴」であり、彼らのシンボルであったと解釈する(紅村 1980)」ことによって「顕示論」は着想された。さらに遠賀川の「東限論」(紅村 1979)を唱えるなか、自然的・地理的要因説などを批判し、遠賀川東漸停止の理由を「条痕系土器の表現・標徴」が社会的要因によるとし、新たな問題定義をした(紅村 1981)。

系統区分された土器の分布も実際は混成している。西部東海地方(濃尾平野)はグレー・ゾーンである。紅村は在地勢力の「対立」を条痕系土器、「従属」を削痕遠賀川、「自主路線」を金剛坂式と捉え、「遠賀川系人」の成員移動に「政治的活動を成し遂げる」ことが「考古学による新たな歴史的認識の開拓を可能とする」。

吉田富夫が説いた文化複合と動態(吉田 1941)を端緒とする紅村の学説は、2つの集団間の社会的従属關係を土器により導き出し、政治的活動と結びつけている。紅村の研究戦略は、西日本一帯に拡散した「遠賀川人」と「晩期縄文人」の政治的活動を各地域で証明し、歴史的説明することによって自説の法則を補強しているようにもみえる。一方、大陸に目を向けると「渡来人と衛氏朝鮮の成立」に「立屋敷系渡来人」との關係を重視する。直接考

古学的に証明できる材料はまだない。遠賀川の彩文技法を端緒に関連性を探るが、大陸側に材料が整っていない。土井ヶ浜人骨など形質人類学的検証もひとつの課題であろうが、まず「関係論」と「顕示論」の法則性を検証すべきであろうと私は思う。

## (2) 金剛坂式土器の研究

紅村は1956年発表した論考に金剛坂式土器の枠組みを示している(紅村1956)。当初は紅村前期分類<sup>\*</sup>のうち第2類とした「貝殻山式」と「西志賀式」を含み、前期をとおした特徴で示し、壺について型式差を加えた。ここで注目しておきたいのは、第2類の位置付けである。貝殻山式第2類の説明は基本的な形では第1類に類似する壺と甕とし、さらに西志賀式第1類の説明に正統的な遠賀川式土器とする。つまり、第2類を正統的な遠賀川式土器に類似するとしながらも赤褐色焼成に着目し区分している。ただし、この時点では大きく2つの系統として示している。縄文式土器より弥生式中期土器へ到る系統と、遠賀川式から弥生式中期土器へ到る系統が並び存し、相互に主体性を保ちつつ関連して近接してゆき弥生式文化を形成したと結論づけていることから、第1類と第2類は遠賀川式から弥生式中期土器へ到る系統として同一系統で捉えていたと判断できる。

2年後に刊行された吉田富夫との共著では、前期第2類に初めて「垂流の遠賀川式土器」を使用している(紅村・吉田1958)。この「垂流」は「正統的」遠賀川式土器に対して使用している。30頁の注1で「貝殻山式第2類の壺は、その発生系統が明らかでないが、強いて近似例を求めれば、五貫森式から終末期Ⅱ式(樫王式)の間に現れる壺のあるものに類似する。」とし、具体的な提示はないものの、問題設定当初から在来の要素に系譜を求めている点に注目したい。25頁では「第2類の特殊な遠賀川系土器」について、この種の赤焼の遠賀川式土器が三重県方面より、他の地方へ拡がるとし、三重県域で製作された遠賀川式土器で

<sup>\*</sup> 紅村は遠賀川式土器を主体とする時期(前期弥生式土器)を5類に分けた。この分類は現在まで変更ない。ただし、分類の内容については加筆と修正が繰り返されている。

あることを強調している<sup>\*\*</sup>。

『東海の先史遺跡綜括編』(紅村1963)では、第5類以外を東海地方には前期弥生文化に4つの集団がみられることを明らかにした。その第4グループに三重県方面に本拠をもつらしい特殊な遠賀川式土器をもつグループを指摘する。

久永春男は二反地貝塚(朝日遺跡の一部)の調査成果をもとに、前期を3期区分した(久永1966)。このうち一番新しい時期、二反地3式の甕を提示するなかで「半割竹管で2段または3段に横線をひき、したがって横線が4条・6条となっているもの」として金剛坂式甕をとりあげている。ただし壺についての記載がない。

一宮市内の発掘調査をもとに「縄文式土器から弥生式土器へ」を発表した大参義一は、馬見塚遺跡の地点別資料、下り松遺跡、そして大口町西浦遺跡を丹念に既出資料と比較検討した(大参1972)。なかでも西浦資料は「八剣式」を訂正するものとなり、新しく型式名は付けなかったが、樫王式に比定する尾張地域の好資料であった。ただし今日的には前後型式を含む評価がある。天保型変容壺や遠賀川系壺などを含めて金剛坂式土器の成立以前の資料群として再検討すべきである。

「金剛坂式土器」の初出は『東海先史文化の諸段階本文編』である(紅村1975a)。「垂流の遠賀川式とは正統的なタイプの遠賀川式土器に対し、異質な要素をもつが、しかし基本的には遠賀川式土器とよび得るタイプの土器と言う意味」と弁明する。古い部分は貝殻山式に「並行」し、壺は部分的にみると馬見塚式の一部に著しく類似するとし、(紅村1958)で指摘した系譜問題に壺を想定した。

この新しい部分(西志賀式に「並行」する)に金剛坂式と言う型式名を(暫定的に)冠してよび、改めて金剛坂式の系譜はその源流を東海地方の晩期縄文文化のいずれかに求める

<sup>\*\*</sup> なお、第6図では尾張平野の朝日・西志賀・熱田(高蔵)の3遺跡に求心的な矢印が向けられ、2類をはじめ3から5類まで各類が流入することが示されている。その後5回変更し、遺跡分布図に型式圏を重ねて提示している(紅村1976・1983・1984・2003b・2004)。



外ないであろうと再言する。さらに濃尾平野の中央から西部地域、渥美半島方面にも注意と関連性を想定し、三重県域の一元論を保留する。この頃調査報告のあった金剛坂遺跡、中ノ庄遺跡、永井遺跡の諸報告への牽制ともいえる。

一方、これら三重県の遺跡を調査担当者が中心となって研究会が発足した。三重考古学研究会は『三重考古』創刊号（三重考古研1975）によると、1974年3月から月1回の例会が始まっている。ちょうど納所遺跡の調査中で前出の3遺跡を含めて弥生時代が例会の中心テーマであったようだ。その第12回例会は「シンポジウム—三重県における弥生文化について—」として開催された。シンポジウムの記録は創刊号の記録として掲載されている。なかでも注目しておきたいのは、金剛坂式土器<sup>\*</sup>の名称である。討論の記録によると、紅村の発言も含めて「亜式土器」として統一した用語で進めている。ここでの留意点は、紅村自身がシンポジウム後も含めて一切「亜式」と使用していないことである<sup>\*\*</sup>。

『東海先史文化の諸段階本文編』の補足改訂版では、「第6章弥生時代成立論の展開」として新たに章立てし、「亜流の遠賀川式土器論の発展」の項で、「赤焼遠賀川式」と仮称して議論を進めている（紅村1981）。この論考ではじめて具体的な変遷を提示した。特に馬見塚式の口縁のやや狭くなる一種の甕と垂直の口縁をもつ薄手大形の斜条痕深鉢をそれぞれ金剛坂式の壺と甕の系譜とし、型式序列を説明する。終焉については、赤焼遠賀川から櫛目式に移ると言うのは三重だけの事であるとし、「正統遠賀川式土器」主体の西志賀式から「櫛目式土器」主体の朝日式に移行する過程で「赤焼遠賀川」は関与しないと強調する。遺跡の立地については、赤焼遠賀川を主体とする「赤焼遠賀川式系集落」が小規模な集落であると指摘し、同様の傾向を「水神平式系集落」と「共通した事情」で説明するが具体的な提示はな

<sup>\*</sup> 当時の紅村は亜流の遠賀川式土器と呼んでいた。

<sup>\*\*</sup> 当時調査中の納所遺跡と前出の3遺跡を含め、『三重考古』第2号で伊藤久嗣が編年の位置付けと立地について三重県の研究者を代表して紅村と異なる見解を唱える。これを受けて、紅村（1981）で改めて反論を提出した経過がある。

い。

赤焼遠賀川式土器は正統の遠賀川式土器と併行して推移することを両型式によって示される人間集団は異なった系譜において成立したものと理解する。この理解の上に立ち、小規模の集落である赤焼遠賀川式系集落と上箕田・納所・中ノ庄など「まとまりのある」正統遠賀川式系集落は「双互に密接な関係」をもっていたと想定する。ただし、納所遺跡上層資料に赤焼遠賀川式土器が主体をなすと言う現象については、納所における特殊な事情として、別項において考慮すべきとし、納所の土器変遷について「特殊な事例」を強調する。

「遠賀川系文化成立の構想」では、赤褐色焼成以外の事例も認める（紅村1982）。第1図の説明文に次のように補足する。「正統でも赤焼や、赤焼の型でも必ずしも赤くない例もあるが、全体として両者の違いは明白である。」これは、納所遺跡など金剛坂式土器の編年あるいは系列（系統）的位置づけについて、「正統」から「亜流」への変遷を否定する見解を「必ずしも赤くない例」と縄文（馬見塚式）系譜の要素、あるいは金剛坂式土器の技法と紋様の特徴から「正統」とは明らかに異なると図示する。

ところで、赤褐色の焼成にこだわっていた論調になぜ「必ずしも赤くない例」も含めたのか。刊行年月日は後出であるが、中村友博の見解が影響しているかもしれない（中村1982）。中村は「第3系列—亜流の遠賀川式土器の系列」を示すにあたり、紅村との相違点を2つあげる。ひとつは伊勢地域特有ではなく、一宮市河田遺跡を例として尾張地域にも「比較的純粋な第3系列の資料」が存在する。もうひとつは黒褐色焼成で亜流の遠賀川式土器が存在する、つまり「赤褐色焼成」が必ずしも亜流の遠賀川式土器の特徴ではないと第3系列は第2類と異なる定義だとする。その後紅村は「赤焼遠賀川」、「赤焼特殊施文」など「赤褐色焼成」を積極的に特色としてあげる<sup>\*\*\*</sup>。中村の論考前後に、石川日出志による

<sup>\*\*\*</sup> その後、もう一度亜流の遠賀川式土器（第2類）の焼成について、「赤褐色が多いが黒褐色もあり、これが特徴の一つである（但し、少数例外は正統派・亜流双方にある）」と再言している（紅村2005a）。

水神平式を基軸とした土器編年（石川 1981）と設楽博己による浮線紋系土器を基軸とした土器編年が相次いで発表された。これらの論文は、東西日本列島の交錯点における広域土器編年を整備する目的で進められている。そのため、金剛坂式土器に言及した議論はない。石川は亜流の遠賀川式土器を壺CⅢ類として取り上げ、設楽は壺Y・甕Yとして広く遠賀川式土器のなかで取り上げている。両氏の議論は条痕紋系土器の成立、特に壺形土器の出現に注目している点を確認しておきたい。

1985年11月にシンポジウム〈条痕紋系土器〉文化をめぐる諸問題が愛知考古学談話会によって開催された。伊勢湾周辺を中心に東日本を含めた広域におよぶ集成が行われ、あわせて資料集などが発行された（愛知考古学談話会 1985）。シンポジウムの直前に遠賀川系土器の特集号が発行された（談話会 1985）。これらのうち、金剛坂式土器をとりあげた論考はない。ただし、尾張平野における前期遺跡の土器分析をおこなった高橋信明は、煮沸具の問題点として、尾張平野部の小地域差を言及した。「ハケ調整B型」と分類した金剛坂式甕について、正統の遠賀川式甕「ハケ調整A型」との対比で詳細な特徴を示した（高橋 1985）。高橋の指摘した2点の着眼点に注目しておこう。ひとつは口縁端部の右下がりの刻み目、もう一つは粘土紐接合法が内傾接合となる点である。前者は後に鈴木克彦によって統計的に検証される（鈴木 1990b）。

『西日本・中部日本における弥生時代成立論』では、いくつかの型式を概論する項目に「金剛坂式土器」としてあげている（紅村 1987）。2類に分類し、第1類が従来の西志賀式第2類、第2類は条痕系土器を想定する。第3類とはしていないが、正統型（津島型）をとりあげている。

第1類の壺は胴の張りだしの大きい形と、並のものとの区別があると指摘する。この視点を馬見塚式・島貫式（樫王式併行）に遡ると天保型変容壺（紅村のいう「並のもの」とこれから派生した烏丸崎型変容壺（紅村のいう「胴の張りだしの大きい形」）に相当できよう。

「弥生時代形成新論」は最初の脱稿時（1986年12月10日）に「亜流の遠賀川式土器」・「金剛坂式土器」を文中に使用していない（紅村 1988）。「進出型の遠賀川式文化」に対して「縄文晩期転換型の遠賀川式文化」の評価を示し、「主体の遠賀川式土器に混在して独自の赤焼と文様をみる地方型の遠賀川式土器」と表現した。ただし、追記（1987年12月11日）では「遠賀川系文化の末端では、金剛坂式土器という独特の遠賀川式土器を作る文化が形成され」とし、「金剛坂式土器」を使用する。

1990年に2つの論考を提出した鈴木は、凸帯文深鉢と亜流遠賀川式土器の両側面から検討した（鈴木 1990a・b）。鈴木（1990a）は凸帯文深鉢を8類に分類した。そのうち8類とした深鉢について、樫王式＝弥生時代前期中段階（鈴木IV期）に比定し、伊勢地域の突帯紋系土器は「条痕紋系土器の母体にならない馬見塚式」と評した。さらにIV期深鉢の分布について、「主要な分布範囲は、伊勢地方から近江湖北地方・美濃地方西部にかけてであり、渥美半島もこれに含まれる」と指摘した。鈴木が指摘した深鉢は突帯上の連続押圧（刻目）に二枚貝を使用する馬見塚式の指標とされてきた増子1類aであることに注意しておきたい。鈴木（1990b）は中村（1982）の第3系列「亜流の遠賀川式土器の系列」を視座に議論を進める。前出の突帯紋系土器（鈴木IV期）と第3系列の分布がほぼ重複する点から突帯紋系土器消滅直後に第3系列が出現すると想定した。ただし、鈴木が縄文的要素として列挙した貝殻押引文・押圧文、半截竹管文などの要素から具体的な変遷過程を示していない。

「平井遺跡をめぐる縄文文化の終末と弥生文化成立の諸問題」は、それまでの論調の方向転換を図る（紅村 1992）。第2類の認定と金剛坂式の編年の位置付けを変更する。金剛坂遺跡資料と西志賀・貝殻山資料（第2類・赤焼遠賀川）は「別物」で、「三重県から直接、尾張の遠賀川系にこの種類の土器が持ち込まれたという説は、再検討する必要があるらしい」とする。具体的な事例で説明がないので意図するところは不明である。しかし、もう

ひとつの金剛坂式土器が馬見塚式に接点を持つ可能性については、「伊勢か美濃で創始されるという現象があるかもしれない」と想定し、貝殻山式の空白を埋めることにつながるので、何かこの段階で新たな新知見を踏まえての言説であったのかもしれない。

山中遺跡の報告書（服部ほか1992）が刊行されたのは前出（紅村1992）の1ヶ月後である。馬見塚式前後を検討する資料としては、西浦遺跡・古沢町遺跡以来の新出資料となり、注目された。東三河では白石遺跡の報告書（贄1993）が刊行され、その中で贄元洋は「伊勢湾沿岸地域に遠賀川集団が進出して以後、早い時期に分派した最小の集団単位である」と評した。白石遺跡の前期を通じて「伊勢平野の集団」との関係が強いとし、その後半に亜流遠賀川が確認されるという。

さて、これら新出資料を紅村はどのように捉えたか。次に「利根川論争<sup>\*</sup>」の牽引となった紅村（1995）からみていこう。山中遺跡の新出資料を受けて、馬見塚式から金剛坂式にいたる壺の変遷を図で具体的に示した。以前、紅村（1981）では馬見塚式「並行」として阿弥陀堂式の天保型変容壺を発端に第2類の壺へと示していた。天保型変容壺の口縁部素紋突帯が多段化<sup>\*\*</sup>傾向を図示することで、金剛坂式の壺頸部直線紋の系譜が明確になった。この考え方は、滋賀県烏丸崎・小津浜の両遺跡出土の変容壺から変遷過程を考える重要なヒントとなった（永井2008）。甕については斜線条痕深鉢+環状口縁=金剛坂式類似甕を想定する。ここで注意しておきたいのは、紅村（1992）で指摘したはいづめ遺跡の合口土器棺に用いられた金剛坂式甕である<sup>\*\*\*</sup>。金剛坂遺跡の甕より山中遺跡→はいづめ遺跡の変遷の方が理解しやすい。つまりタテハケ甕への変遷より斜位ハケ甕の方が型式学的に優先する。

紅村（1996）による白石遺跡の評価は「津

<sup>\*</sup> 鈴木（1993）の小林行雄批判から始まる利根川論争は紅村（2000）で自身が命名し、その解説を紅村（2001）と（2006）で扱い、10年を超える論争を帰結させた。表面的な言葉で示せば小林行雄 VS 山内清男の代理論争である。

<sup>\*\*</sup> 紅村の言う「突凹線文」を指す。

<sup>\*\*\*</sup> 特に報告書第55図281に注目。

島系・金剛坂系・元屋敷系のいずれとも異なる独特の特徴を示す遠賀川型の土器（鉢）が制作されている。私はこの白石遺跡を、東三河のいずれかの縄文晩期集落が、独自の行き方により遠賀川型の土器文化に転換した直後の集落と推定している。」と贄の解釈と正反対の論を示した。その後、白石遺跡の遠賀川系土器を再検討した佐藤は遠賀川系土器の口辺部と頸部の施紋に注目し贄の評価を後押しした（佐藤2004）。条痕紋系土器の強いヨコナデによる口縁端部処理が観察できると指摘した。つまり白石遺跡の遠賀川系土器は条痕紋系土器を製作する集団が創出した折衷土器である。佐藤は白石遺跡の遠賀川系土器を用いる「小規な移住集団」を在来集団が水稻農耕文化の習得のために「招聘」したと考えた（佐藤2004）。

紅村の言説にもどろう。「利根川論争」のなかでも金剛坂式土器について付記されることが多い。紅村（2000a）は進出者の土器型式構成として第2類を説明する。西志賀貝塚上層で第1類90%を超えるのに対して5%くらい出土するとし、具体的に出土比率を提示した。ついで、縄文晩期に系譜をひくと再言し、さらに金剛坂式のなかで型式差（地域色）を認める。

紅村（2000b）では「関係論文」の解説と展開のなかで、第2類と第4類を例に第1類「進出型」との関係を示す。第2類の金剛坂式は自主独立型遠賀川系土器系文化、第4類の削痕遠賀川系土器文化は従属型遠賀川系土器と位置づけた。

紅村（2003a）は西志賀貝塚の山内清男発掘資料報告（石黒ほか2002）を受けて所見をまとめる。山中遺跡の見解と「亜流の遠賀川系土器」の特徴について触れている。いずれも後述する際に詳しく触れる。

「利根川論争」の後半は、新たな見解を示すことより総括的な言説が多い。例えば紅村（2003b）は、2類：自主協調（金剛坂式）、3類：対峙・拮抗（条痕系）、4類：従属組（削痕遠賀川式）、と対照する。紅村（2004）は第1図「遠賀川系の東端と西端の相似現象」の解説で、「相似現象」として3つの系列を示す。第



1に渡来進出と成員移動、第2に在地変容と在地従属、第3に独自変容と自主変容がある。愛知に関しては第4の対峙・対抗現象があり、九州に関しては協調・同化したとする。紅村(2005 a)は「金剛坂式」と仮称している様式の系列を「金剛坂式では壺・甕共に遠賀川土器の特徴を取り入れているが、土器の特異な文様と製作(赤褐色・黒褐色の焼成)に独自性を保持している事から、進出遠賀川文化の人々に強く影響されながらも独自性・主体性を維持し、協調と共に独自のイデオロギーを堅持しつつ新時代にアプローチし、文化変容を遂行した人々によるもの」とする。

いずれも「人」から「事」への視点に向かう言説が多い。前記したように、紅村の論説を一部分切り取って議論の俎上にあげようとする。関係論文の主張とここから派生した「連係論」、「顕示論」、そして「状況様式」にいたるまで、首尾一貫した論調と細やかな軌道修正と大胆な展開はいつも感服する。

ここ数年で三重県と滋賀県を中心に突帯紋系土器の新出資料が増加した。とくに馬見塚式終末期に比定できる資料が目ざされる。紅村の想定から示現まで、金剛坂式土器の系譜に関する言説は山中遺跡の資料でほぼ結実しているようだ。私は山中遺跡の資料群を系譜のひとつとして金剛坂式土器の成立を捉えることに否定しない。いや、むしろ多条素紋突帯の天保型変容壺(図1-1)は、烏丸崎型変容壺につながる重要な資料と評価できる。ただ、山中遺跡資料群と貝殻山式第2類のつながりに疑問を持つ。つまり型式組列が途切れているのではないか。これが本稿執筆のきっかけである。

### 烏丸崎型変容壺の特徴

烏丸崎型変容壺<sup>\*</sup>とは、滋賀県烏丸崎遺跡出土例を典型とする突帯紋系土器系列の深鉢形

<sup>\*</sup> 鈴木(1993)の小林行雄批判から始まる利根川論争は紅村(烏丸崎型変容壺と最初に使用したのは永井(2007))である。しかし、ここで示した具体的な特徴や変遷の指摘は小竹森(2007)が前で、私は三重県資料を含めてその後追認したに過ぎない。したがって、内容のオリジナルは小竹森(2007・2008)にある。

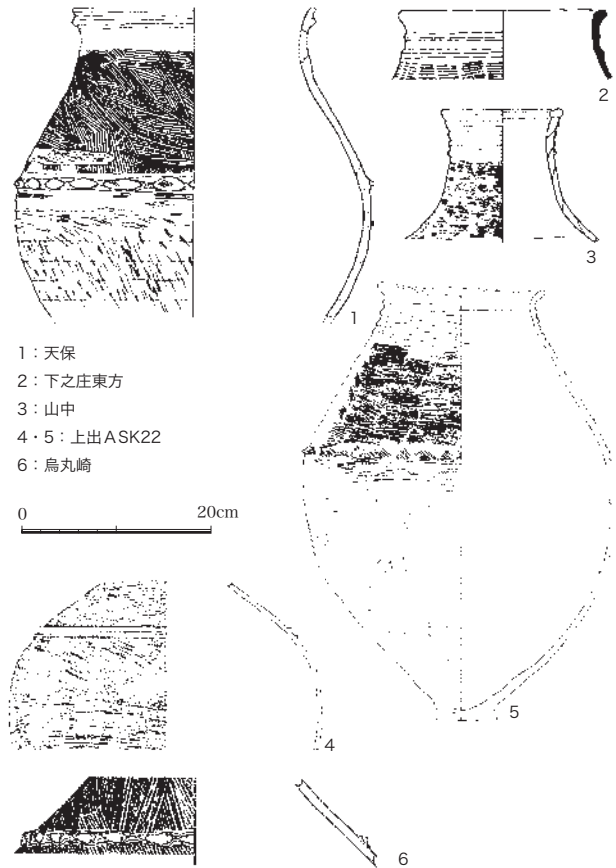


図1 天保型変容壺の口縁部素紋突帯単条から複数条へ(1:8)

変容壺を指す(図2-1)。小竹森による指摘(小竹森2007・2008)につづき、私もその変遷過程に触れている(永井2007)。ここでは小竹森の基礎作業を参考に、烏丸崎型変容壺の成立過程を再言する。その上で、金剛坂式壺形土器の2種につながる理由を提示する。

小竹森は烏丸崎出土の深鉢形変容壺に注目して、現状の整理と展望を示した。基礎作業としては、滋賀県内出土および周辺地域の深鉢形変容壺を概観し、大きく3つに分類した。すなわち口酒井式から長原式へと変遷する「畿内突帯紋系」、伊勢湾西岸を主体とする「天保型」、「その他」として1条突帯系・条痕無紋系・条痕加飾系を用意した。前二者については、細部にわたる特徴を示し、烏丸崎・小津浜・上出A資料との対比に備えた。その結果、個々の資料に変異の幅が存在することを認識した上で、さきに示した変容壺の個別要素を併せ持ちながらいずれにも該当しないことを明らかにした。そして新たな変容壺の枠組みの必

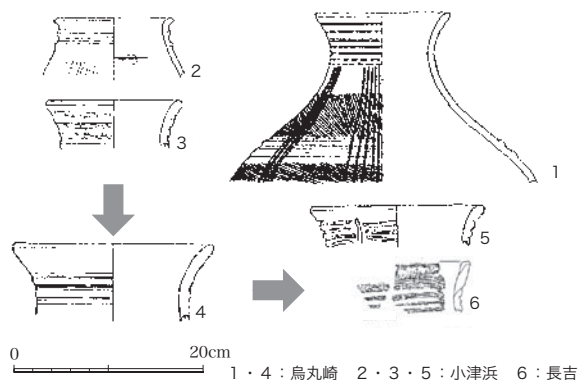


図2 烏丸崎型変容壺と素紋突帯紋から沈線紋への変遷(1:8)

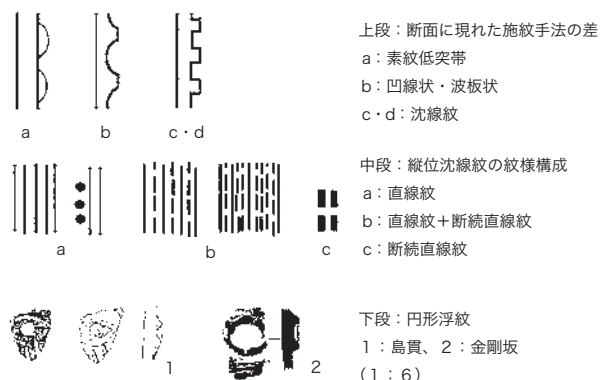


図3 烏丸崎型変容壺の施紋3種

要性に触れている。小竹森の詳細に示した要素と奥義次(2007)の指摘した2種の特徴を参考に、特徴を4つ示したい。

第1に口縁部直下の突帯から沈線への変遷を取り上げる\* (図2参照)。図2-2は天保型の口縁部である。天保型の素紋突帯は当初1条であったものが、馬見塚式後半併行期に複数条へとなる。上出A資料(図1-5)は口縁直下に素紋突帯が4条あり、頸胴部界に貝殻背面押圧突帯紋がめぐる。素紋突帯の複数条は新相を示す要素、一方貝殻背面押圧突帯は馬見塚式1類a(増子1985)の特徴である。したがって、本資料は馬見塚式併行期の最末資料として位置付けらる。貝殻背面押圧突帯の有無を馬見塚式併行期の指標とする私は、烏丸崎例(図1-6)は貝殻背面による押圧ではないから新しい要素と考える。

小竹森の提示した「断面に現れた施紋手法の差」の分類(図3上段)に拠れば、素紋低突帯a類→凹線状・波板状b類→沈線紋c・d類への変遷が追認できる。したがって、この変遷が重要な意味を持つ。紅村の指摘した阿弥陀堂・山中資料から金剛坂式壺へと変遷する過程(紅村1995など)が隣接する遺跡資料でようやく明らかになった。

第2に小竹森(2007)の「縦位沈線紋」あるいは奥(2007)がB類とした「沈線と短沈線の組み合わせ」について触れる(図3中段)。口縁部直下から頸胴部界を結ぶ縦位直線紋様帯で、円周4分割以上の単位で施される。破

\* 小竹森(2007)「烏丸崎遺跡・小津浜遺跡・上出A遺跡出土変容壺関係モデル図」をもとに(永井2007)で作成した変遷図。

片資料でも認識できる特徴的な紋様であるが、全形が不明である。この縦位沈線紋帯は烏丸崎遺跡出土の遠賀川系壺と類似する。ただし、遠賀川系土器に断続直線紋あるいは短沈線と呼ばれる紋様は含まない。

第3に円形浮紋をあげる(図3下段)。奥はA類「変容壺の肩部に施されるボタン状突起ないし浮紋」とB類「沈線と短沈線の組み合わせ」(小竹森の指摘した図3中段の紋様)に注目し、特にB類を金剛坂式のプロトタイプ紋様と想定した(奥2007)。さらに奥に拠ると上記2つに代表される紋様は三重県域、伊勢湾西岸に散見するという。石黒立人も指摘するように円形浮紋は岐阜県長吉遺跡からも出土しており、もう少し広範囲に広がる。現状では琵琶湖周辺の確認例はない。

第4に頸胴部界の突帯について示す。断面三角形の突帯が頸胴部界に2条めぐる。これは1条ずつ貼付けるものと2条がつながる、断面がM字状となるものがある。型式学的には前者から後者への移行が想定できるが、新旧の確認まではいたらない。なお、第3とした円形浮紋はこの突帯上に付く。

## 金剛坂式土器の成立過程

### (1) 金剛坂式土器の特徴

金剛坂式土器の特徴について、紅村の示した最新の所見\*\*をあげておく(紅村2003a)。

\*\* 紅村は、石黒ほか(2002)の報告を受けて、自身の西志賀貝塚調査と山内清男調査を振り返った記述である(紅村2003a)。このなかで石黒ほか(2002)の壺Dと壺Cとした金剛坂式土器について説明があり、簡潔に整理されているのでここで取り上げ、議論の発端としたい。

1. 壺も甕も基本的には遠賀川式土器の特徴を示している。
2. 焼成は赤褐色が多いが、黒褐色もあり、これが特徴の一つである。
3. 壺には口縁内面や頸・腹部に「突凹文」（太い研磨凹線紋）と幅広圧痕突帯とか半裁竹管文等があり、正統派にはこれ等の文様は無い。
4. 甕は、口縁は強く屈曲して開き、その断面が厚く膨らみを持つもので、甕としての腹部の張り出しは殆ど無いか、或いは微弱である。刷毛目は細く斜めである。
5. 「亜流」のこれらの土器は、現物を見ると誰もが「なるほど」と納得して貰える程に特徴的である。
6. 2類に属する「蓋」が無い事は不思議である。
7. 三重県にはこの亜流の類を主体とする遺跡が分布し、特に津市より南に多い。この種類の遠賀川式土器文化を創った人々の本体が三重県地域に関係を持つ事を伺わせる。

私は以前、朝日遺跡の遠賀川系土器を整理する中で、貝殻山A類と貝殻山B類に分けて説明した（永井2000）。そのうち貝殻山B類が本稿の金剛坂式土器である。前記した紅村（2003a）を受けて、改めて特徴を整理しておく。

第1に、施紋具は半裁竹管状工具（平行沈線）を多用する。壺・甕を通じて共通する施紋具である。西志賀式あるいは貝殻山式のなかにも半裁竹管状工具を使用するところがあるが、頻度は低い。頸部・胴部などに多用する沈線紋は1条ずつ施すのに対して、金剛坂式は2条1単位あるいは竹管状の背、丸い部分を利用して太描沈線で施す。

第2に、遠賀川系土器の紋様を基本とし、東日本縄文晩期の精製土器群に多用される工字紋系統の紋様を取り入れた独自の紋様構成をなす。例えば、胴部の沈線紋帯や壺の口縁部に施す沈線帯は、全周しない工字紋を意識した施紋となる。貼付突帯紋上の刻み目は、指を利用した押圧手法を多用する。伊勢湾周辺の遠賀川系土器の地域色であるが、馬見塚式の押圧手法に系譜をもつ、押圧のピッチが長く、あたかも工字紋系統のレンズ状紋を意

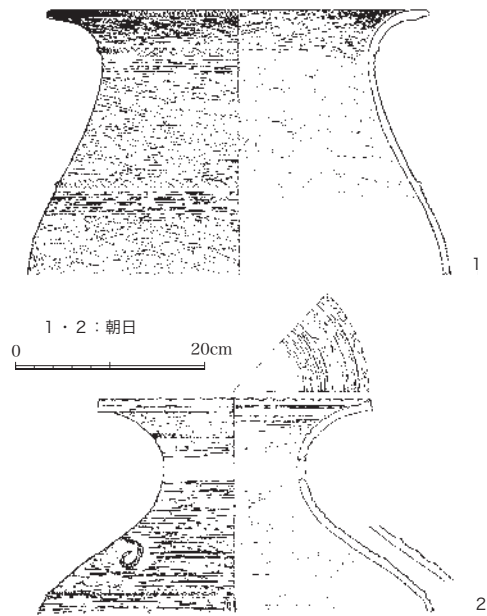


図4 金剛坂式壺形土器の二者（1：8）

識したようにも見て取れる。さらに、烏丸崎型変容壺の特徴としてあげた円形浮紋は、胴部紋様に採用されることに注目しておきたい。したがって、紋様の構成要素のいくつかは突帯紋系変容壺に系譜をもつと言えよう。

第3に器種構成は、壺と甕を中心に鉢が少量伴う。蓋と高杯がない。壺は中小型品より大型品が多い。これは突帯紋系の変容壺に系譜をもつ壺であることに由来すると考えられる。広口壺のなかに口縁部周辺に焼成前穿孔をもつ例がある。遠隔地で出土する例に多い。例えば神奈川県平沢同明遺跡、和歌山県堅田遺跡がある。

第4に焼成は、器壁が薄く比較的堅く焼き締まっている。色調は赤褐色が多く、灰褐色から褐色系の色調は少ない。かつて中村（1982）が指摘した黒褐色焼成の資料はその後類例が増加しない。赤褐色焼成を指向する程度で捉えておこう。

第5に、1から4の特徴を合わせもつ土器に共通する胎土が認められる。金剛坂式土器は雲母が多くに含まれている。ちょうど近畿地方で知られる生駒西南麓産の胎土、チョコレート色の角閃石が多量に含まれ、一見にして識別できるような特徴がある。

最後に、雲母を含まない、赤褐色焼成では



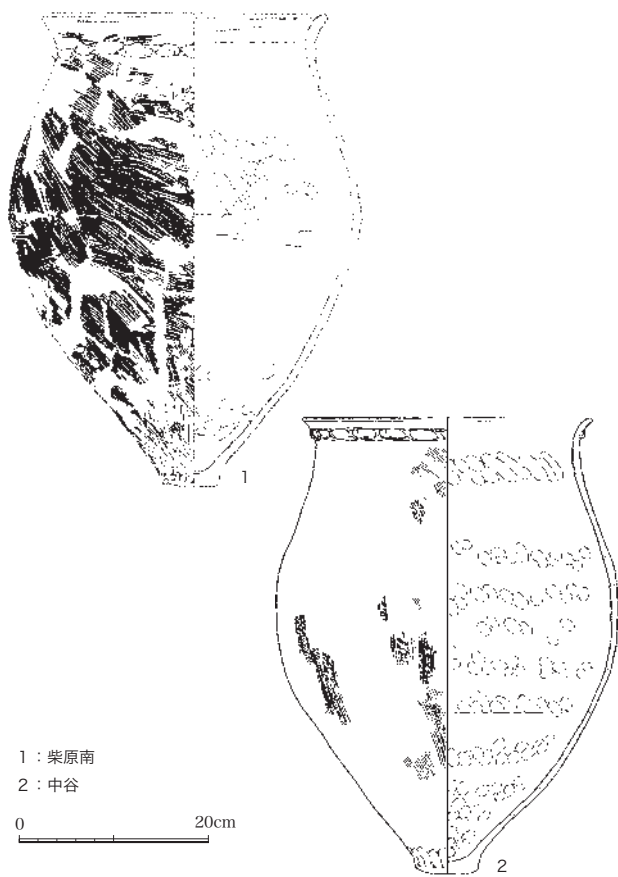


図5 馬見塚式終末期新相に比定される  
伊勢湾西岸と琵琶湖周辺資料の類似例(1:8)

ない、この2つ以外は上記特徴を有する土器もある。紅村は尾張西北部一宮市周辺の資料に留意する。おそらく伊勢湾西岸の北部から中部、尾張平野西南部も含んで想定した方がよい。

以上、大きく5つの特徴を示した。再三にわたって議論される焼成と胎土の問題は、「一見して識別できるもの」を含むことが、逆に解決できない原因となっているようだ。要するに土器焼成坑の発見および焼成方法と製作地の特定が確定されないのであれば、第1から3の特徴で大きく括り、さらに第4と5の特徴で絞り込んで捉える。つまり前者を広義、後者を狭義の金剛坂式土器の特徴としたい。

## (2) 金剛坂式土器の成立過程

次に系譜の問題を再度整理して、金剛坂式土器の成立過程を考える。金剛坂式土器は突帯紋系土器様式の在来型式である馬見塚式および長原式に比定される時期に生成した深鉢変容壺を基軸に成立する。天保型変容壺と天

保型変容壺を基盤に遠賀川系土器の影響を受けて派生した烏丸崎型変容壺、この両者を系譜に持つ壺形土器が金剛坂式土器の成立基盤である。そしてこれら二者の深鉢変容壺を系譜に持つことを裏付ける類例として金剛坂式壺の2例を示しておきたい。ひとつは、天保型に由来する太頸で胴部が樽形の壺(図4-1)、もうひとつは烏丸崎型に由来する細頸で胴部が扁平の壺(図4-2)である。

ところで、伊勢湾周辺の土器型式は、突帯紋系土器様式終末期に馬見塚式が設定されていた。近年の調査事例の増加により、増子(1985)の指標であった突帯上に貝殻背面押圧を施す一群の土器、1類aが尾張平野より西側である伊勢湾西岸と琵琶湖周辺に主体となって分布することがわかってきた。型式設定者である増子自身も、馬見塚式の主体は2類、突帯を持たない土器群であると再言する(増子2009)。一方私は増子1類aを馬見塚式の指標とした場合、尾張平野の馬見塚式細分を保留した。理由は尾張平野の1類aを用いた変遷過程を捉えるには資料的制約が大きいからである。換言すると1類aは客体的存在であるために型式変遷が追えないからである。

そこで、議論を再び突帯を持つ土器群、増子1類にもどして伊勢湾西岸および琵琶湖周辺におよぶ突帯紋系土器様式の在来型式を再確認しておきたい。増子2類は伊勢湾西岸および琵琶湖周辺に分布しないことである。境界線は美濃西部の木曾三川付近である。遺跡で示すと1類のみで構成する桑名市志知南浦遺跡、1類主体で2類の条痕調整深鉢を含む海津市羽沢貝塚となる。時期比定を示すと、伊勢湾西岸域の山田(2006)伊勢Ⅲ期および中村(2008)凸帯文系土器様式第4期にほぼ相当する。なお、中村の示した第5期は一部従来の馬見塚式に該当する。一方山田(2006)のⅢ期はaとbに細分している。Ⅲb期の一部は従来の馬見塚式から外れる。つまり新相を含む。このことはすでに永井(2007)で指摘した。伊勢湾西岸の代表的な資料群で示せば、蛇亀橋→野々田→筋違→宮山と変遷する。

宮山の段階前後に相当する、以前馬見塚式終末期新相と位置づけた土器群がある(永井

2008)。櫛王式土器とは明らかに異なる条痕を有する土器群で、突帯紋系土器に系譜を示唆した。器種構成は、口縁部直下に素紋の低位突帯がめぐる深鉢、増子1類aを系譜にもつ頸胴部界の押圧突帯紋は欠落するものの器形を継承する深鉢、そして烏丸崎型変容壺がこれら深鉢に加わるであろう。

琵琶湖周辺では、ユビ押圧の2条突帯に縦方向の条線が施した松原型深鉢が馬見塚式終末期に相当する時期と考えている。松原内湖では北陸系と思われる変容壺、さらにこれに伴う条痕紋系土器が共存している。松原型深鉢はいまだ類例が少なく、時期比定の資料としては確定的ではない。しかし、2条突帯深鉢のひとつの変遷過程を示す材料として有効であると思う。柴原南の土器棺資料は、三重県中谷例と類似する資料である(図5)。伊勢湾西岸域と琵琶湖周辺で直接対比できる資料が増えつつある。金剛坂式土器との間を埋める資料群が充実すれば、変容壺以外の器種からも追検証できる。

## おわりに

このように見ていくと、増子1類に含まれる天保型と烏丸崎型の変容壺が生成した基盤は、伊勢湾西岸から琵琶湖周辺にあると指摘できる。そしてこれら変容壺の諸要素が金剛坂式土器に継承されることから、伊勢湾周辺のうち西岸域および琵琶湖周辺も含めて金剛坂式土器の成立過程を検証していく必要がある。

本稿において議論が中途半端になってしまった馬見塚式に比定される未命名型式の存在は、永井(2007)からの課題である。増子(2009)によって指摘された馬見塚式土器の枠組みから外れる増子1類が主体となる地域の検証は未だ確認がない。それは増子2類が美濃西部を境に以西に分布しないことと連関する。馬見塚式の後続型式の櫛王式は、美濃西部から尾張地域の実態は極めて不明瞭である。もちろん貝殻山式や近年設定された三ツ井式(石黒ほか2007)が主体となる地域だけに、条痕紋系土器様式の櫛王式は客体的存在である。

豊川流域を中心とした東三河地域は麻生田大橋遺跡の調査によって比較的明らかになったが、矢作川流域の西三河地域はいまだ資料が整わない。今後の資料増加を待ちたい。ただし、遠賀川系土器と条痕紋系土器の対時関係は紅村の半世紀にわたる研究成果を踏まえて議論をすべきである。特に「物から人へ」そして事への議論展開は学ぶべきことが多い。

本稿は金剛坂式土器の再提唱にむけて課題の抽出を主眼に進めた。もちろん今後の課題は山積している。金剛坂式土器の特徴は提示したが、具体的な変遷や分布など、基礎的な作業を示していない。成立過程について、いくつか指摘してきたが、終焉については全く触れていない。稲沢市須ヶ谷遺跡の報告で石黒が前期末葉から中期にかけて粗製土器の視点から甕の分析を行っている。そこで金剛坂式甕の終焉から朝日形甕への移行過程を示している(石黒2008)。そしてもうひとつ、琵琶湖周辺の金剛坂式に共存する地域型遠賀川系土器の存在(小竹森2008)と検証。伊庭功による小津浜周辺で抽出可能な条痕紋系土器の位置付けも伊勢湾東岸を中心とする条痕紋系土器と比較検討していく必要がある。小竹森が気に留めた「深い条線を残すハケ状工具によって器面全面の調整及び施文を行う甕形土器」は、まさに石黒が「ハケメ紋系土器」と呼んだ祖形にあたる(小竹森2008)。

伊勢湾周辺、特に愛知県では紅村が異系統の土器群を系統整理して共存関係を明らかにした。視覚的に認識しやすい点を差し引いても、必ずしも他地域で同様の研究が進展しているとは思えない。せめて条痕紋系土器のおよぶ範囲において視点を変えてみてもよいと私は思う。まだまだ残した課題は多い。

## 図版出典一覧

- 図1-1 田村陽一1991『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊6-』三重県教育委員会
- 図1-2 三重県教育委員会1987『下之庄東方遺跡(高畑地区)』三重県教育委員会
- 図1-3 服部信博ほか1992『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 図1-4・5 北原治ほか2001『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書16-2上出A遺跡』滋賀県教育委員会ほか
- 図1-6 小竹森直子ほか『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書9烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』滋賀県教育委員会ほか
- 図2-1・4 同上

図2-3・3・5 伊庭功ほか2002『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書6小津浜遺跡』滋賀県教育委員会ほか  
 図2-6 財団法人岐阜県文化財保護センター1994『長吉遺跡・普賢寺遺跡』  
 図3上・中段 小竹森直子2007「近江における縄文弥生移行期変容壺研究ノート」『紀要』20号、財団法人滋賀県文化財保護協会 改変して引用  
 図3下段-1 伊藤裕偉2001『嶋坂Ⅲ』、三重県埋蔵文化財センター  
 図3下段-2 谷本鋭次ほか1974『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会

図4 宮腰健司ほか2000『朝日遺跡Ⅵ』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集)  
 図5-1 中村健二ほか2002『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書29-1 柴原南遺跡・大森陣屋遺跡』滋賀県教育委員会ほか  
 図5-2 森川常厚ほか2003『丸野・中谷遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター

参考文献 (刊行年順)

吉田富夫 1941 「尾張國西志賀に於ける初期彌生式文化の複合」『古代文化』第12巻第9號、日本古代文化學會、9-27頁。  
 紅村 弘 1956 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代學研究』第13号、古代學研究会、1-9頁。  
 紅村 弘 1958 「名古屋西志賀貝塚」(文化財叢書第19号)名古屋市文化財調査保存委員会、40頁。  
 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡総括編』(東海叢書第13巻)名古屋鉄道株式会社、澄田正一校閲、278頁。  
 久永春男 1966 「弥生文化の発展と地域性 中部 3東海」『日本の考古学』Ⅲ、河出書房新社、162-184頁。  
 谷本鋭次 1971 「結語」『金剛坂遺跡』明和町教育委員会、18-19頁。  
 谷本鋭次 1972 「結語」『中ノ庄遺跡』三重県教育委員会、17頁。  
 大参義一 1972 「縄文式土器から弥生式土器へ」『名古屋大学文学部研究論集』LVI 史学19、名古屋大学文学部、159-192頁。  
 伊藤 洋 1973 「補論 弥生時代前期の土器について」『永井遺跡』四日市市教育委員会、51-62頁。  
 紅村 弘 1975 「第4章 弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階』私家版、69-82頁。  
 伊藤久嗣ほか 1975 「シンポジウム-三重県における弥生文化について-」『三重考古』創刊号、三重考古学研究会、18-25頁。  
 紅村 弘 1975 「入門講座 弥生土器 中部 東海西部1」『考古学ジャーナル』No.112、ニュー・サイエンス社20-25、31頁。  
 紅村 弘 1976 「入門講座 弥生土器 中部 東海西部4」『考古学ジャーナル』No.125、ニュー・サイエンス社、16-18頁。  
 伊藤久嗣 1978 「三重県における弥生時代の諸問題」『三重考古』第2号、三重考古学研究会22-32頁。  
 伊藤久嗣 1980 「遺物・遺構の考察 土器について 弥生時代前期」『納所遺跡』三重県教育委員会、75-78頁。  
 紅村 弘 1981 「第4章 東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版 私家版、98-113頁。  
 紅村 弘 1981 「第6章 弥生時代成立論の展開」『東海先史文化の諸段階』本文編・補足改訂版 私家版、123-145頁。  
 石川日出志 1981 「三河・尾張における弥生文化の成立-水神平式土器の成立過程-」『駿台史学』第52号、駿台史学会、39-72頁。  
 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号、信濃史学会、87-129頁。  
 中村友博 1982 「土器様式変化の一研究 伊勢湾第I様式から伊勢湾第II様式へ」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、平凡社、159-188頁。  
 紅村 弘 1982 「遠賀川系文化成立の構想」『考古学研究』第29巻1号、考古学研究会、67-82頁。  
 紅村 弘 1983 「遠賀川系文化の東漸」『弥生時代成立の研究』私家版、54-58頁。  
 紅村 弘 1983 「東海西部」『弥生土器』I、ニュー・サイエンス社、275-314頁、補記306~309頁。  
 紅村 弘 1984 「東海の先史遺跡総括編」刊行以降に於ける調査と研究の進展」『東海の先史遺跡』総括復刻編 私家版、279-320頁。  
 紅村 弘 1984 「知多半島における弥生時代の開始」『知多古文化研究』1、知多古文化研究会、49-55頁。  
 高橋信明 1985 「各地の様相 尾張東北部及び南西部」『マージナル』No.5、愛知考古学談話会、1-8頁。  
 紅村 弘 1986 「縄文土器と弥生土器 中部日本」『弥生文化の研究』3、雄山閣、126-135頁。  
 紅村 弘 1987 「金剛坂式土器」『西日本・中部日本における弥生時代成立論』私家版、87頁。  
 紅村 弘 1988 「弥生時代形成新論」『考古学叢考』下巻(齊藤忠先生頌寿記念論文集)吉川弘文館、304-349頁。  
 鈴木克彦 1990 「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相」『三重県史研究』第6号、三重県、45-78頁。  
 鈴木克彦 1990 「亜流遠賀川式土器 再考」『Mie history』vol.2、三重歴史文化研究会、23-32頁。  
 紅村 弘 1992 「平井遺跡をめぐる縄文文化の終末と弥生文化成立の諸問題」『平井稲荷山遺跡』小坂井町教育委員会、68-90頁。  
 服部信博ほか 1992 「考察A期の遺構と遺物の変遷」『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター、72-85頁。  
 費 元洋 1993 「白石遺跡の遠賀川集団」『白石遺跡』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集)豊橋市教育委員会、64-67頁。  
 紅村 弘 1995 「様式・型式における状況の理論と弥生文化成立の新課題」『王朝の考古学』(大川清博士古稀記念論集)雄山閣、32-55頁。  
 紅村 弘 1996 「弥生文化成立論に於ける「成員移動」と「文化変容」」『知多古文化研究』10、知多古文化研究会、71-90頁。  
 佐藤由紀男 1999 『縄文弥生移行期の土器と石器』(考古学選書)雄山閣、278頁。  
 永井宏幸 1999 「弥生時代前期の諸問題-三ツ井遺跡からの検討-」『三ツ井遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集)(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、170-185頁。  
 紅村 弘 2000a 「縄文と弥生関係論に於ける関西と愛知県の比較」『古代人』60名古屋考古学会、1-39頁。  
 紅村 弘 2000b 「付載愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係「関係論文」の解説と展開」『古代人』60、名古屋考古学会、89-105頁。  
 永井宏幸 2000 「弥生時代前期「遠賀川系土器」をめぐる諸問題~朝日遺跡I期をめぐる~」『朝日遺跡Ⅵ』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集)(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、577-596頁。  
 石黒立人ほか 2002 「愛知県西志賀貝塚資料」『山内清男考古資料13』(奈良文化財研究所史料第58冊)奈良文化財研究所、1-39頁。  
 紅村 弘 2003a 「西志賀貝塚の山内清男発掘資料についての所見」『伊勢湾考古』17、知多古文化研究会、83-95頁。  
 紅村 弘 2003b 「鈴木正博の「条痕顕示論批判」への回答」『伊勢湾考古』17、知多古文化研究会、97-120頁。  
 紅村 弘 2004 「山内清男の土器型式研究に於ける問題点」『伊勢湾考古』18、知多古文化研究会、71-90頁。  
 紅村 弘 2005 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(1)」『考古学ジャーナル』No.529、ニュー・サイエンス社35-38頁。  
 山田 猛 2006 「伊勢の突帯文土器」『いちのみや考古』終刊号(No.20)、一宮考古学会、83-98頁。  
 小竹森直子 2007 「近江における縄文弥生移行期変容壺研究ノート」『紀要』20、財団法人滋賀県文化財保護協会、9-18頁。  
 石黒立人 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古稀記念考古学論文集』同刊行会、129-189頁、宮腰健司と共著。  
 奥 義次 2007 「三重県における突帯文期の諸相」『関西の突帯文土器』発表要旨集、関西縄文文化研究会、97-100頁。  
 永井宏幸 2007 「伊勢湾周辺からみた突帯紋系土器様式の終焉」『関西の突帯文土器』発表要旨集、関西縄文文化研究会、101-110頁。  
 小竹森直子 2008 「鳥丸崎遺跡・津田江湖底遺跡の総括 遺物編 弥生時代前期~中期の土器様相について」『鳥丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』(琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書9)財団法人滋賀県文化財保護協会、225-236頁。  
 石黒立人 2008 「須ヶ谷遺跡の弥生土器をめぐる予察」『須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第156集)財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター、109-111頁。  
 中村健二 2008 「凸帯文系土器(中四国・近畿・東海地方)」『総覧縄文土器』(株)アム・プロモーション、798-805頁。  
 中村健二 2008 「近畿地方の様相」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、107-117頁。  
 永井宏幸 2008 「東海地方の様相」『古代文化』第60巻第3号、古代学協会、118-128頁。  
 中村健二ほか 2009 『赤野井浜遺跡』第1分冊本文編1(琵琶湖(赤野井浜)補助河川環境事業に伴う発掘調査報告書)滋賀県教育委員会、458頁。  
 増子康真 2009 「伊勢湾沿岸の縄文晩期末土器の研究」『縄文時代』20、縄文時代文化研究会、181-200頁。



# 「貝田町式土器」生成論

● 石黒立人

貝田町式は、西の「櫛描紋」、東の「条痕紋」とは異なる明確な地域性をもって成立し、伊勢湾岸地域の弥生中期中葉を特徴づけている。それを弥生文化の3要素になぞらえれば、東西両系に対する「独自系」となり、型式学的には「折衷型」に重点を置くことになる。今回は紋様に絞って具体的に生成過程を検討した。

濃尾平野の朝日遺跡周辺において、中期前葉の朝日式2期の櫛描紋要素と岩滑式3期の条痕紋要素を中心にして、その他の要素を含めた相互影響と型式学的変異が多産される状況が生まれた。それが再編される過程の中で、直接には条痕紋系に起源をもつ「付加沈線研磨手法」が貝田町式の紋様構成を規定する形制が成立した。「付加沈線研磨手法」によって施される紋様は朝日遺跡では黒色焼成の精製土器群（各種壺と鉢等）に採用され、同時に細頸壺を除いては同種の土器が周辺地域で広く共有されることが無いという特種な状況も生まれた。よって「貝田町式」とは〈斉一性〉とはほど遠い、斑状の濃淡を内実とする型式であることがより鮮明になった。

## 1 はじめに

紅村弘は半世紀前に、遠賀川系土器と条痕紋系土器の並行推移が濃尾平野における弥生土器成立期の要点であると述べ、その他の諸類を含めた多系の共存と相関を型式変遷に導入した。その後、わたしは20年前に阿弥陀寺遺跡の弥生中期土器を材料にして共存・相関を超える技術的な交流を実証するのが折衷型土器であること、次ぎには十数年前に紅村の提言を折衷型土器でなぞったことがある。突帯紋系土器が遠賀川系土器に交代して衰滅すると単純に済ますのではなく、細くはあっても並存して推移する連続の探索を始めた紅村の構想に添うことが、結局は折衷型土器への注目を召還し、対峙を迫るのである。いや、そもそも土器相の微細な変遷の把握とは折衷型土器への注目によって初めて可能になると言うべきかもしれない。

ところで、もともと弥生文化の3要素である大陸系、縄紋系、独自系を読み替えれば外来系、在来系、折衷系となるのであり、弥生土器にも適用できる分類である。したがって、弥生土器の生成・展開において在来系土器・外来系土器2系譜の並存を認めるだけでは不十分であり、折衷型土器への注目も必要である。ただ、折衷

型土器は定型化しない一過性の存在（量的にも不安定）と看做されているために、一部の注目を引きつつも、十分に議論されて来なかったという経緯がある。

折衷型土器は型式組列の過程に微かな“点”として非明示的に存在するのみで、定着・反復しないことから組列における明示的な位置を占めない異端である。“型式”を占めるべく反復しないゆえに、「様式」においてはそれを構成する「型式」と認定されないし、『型式』においても同様である。しかし、よくよく考えれば、一つの表現形が長期にわたって変化しないはずではなく、とりわけ紋様では要素の離合集散による複合・編集、複雑化・簡素化等が進行し、一つの紋様が安定して継続することは無いのではないか。紋様に対してどのような対応をするのか、その違いが折衷型土器の評価にも表れているのだが、必要なのは往々にして吐露される研究者の嗜好に添うことではなく、折衷型土器が生み出される構造の方法的な解明を「型式学」として図ることである。

折衷型土器とは異系統の関係をありのままに示す縦横関係の要である。しかも、強固な系統の間を埋める単なる派生ではなく、両系の距離の遠近を示し、また時間経過の中でも生み出され、かつ回収される動態としての不連続な変遷

を繰り返し、土器環境の全体性を構成するものであることも窺われた。これによってわたしは濃尾平野の弥生中期土器である朝日式→貝田町式→凹線紋系土器への変遷を把握したが、これまでの論述はあくまで年代区分に重点を置いたもので、型式学的な分析は不十分であったし、いまだそれぞれの生成と展開の連鎖を型式学的に明らかにしているという反省点がある。

本稿では長年の宿題に答えるべく、まずは貝田町式に焦点を絞って、どのような経緯から固有の型式学的特徴が生成したのかを考えてみることにしたい。甕についてはすでに示したことがあり、その意味で本稿は壺を軸とする紋様篇となる。

## II 弥生中期前半土器の概要

### 1. 朝日式1期（あるいは貝殻描紋土器）、そして朝日式2期（あるいは櫛描紋土器）

遠賀川系土器から貝殻描紋土器（朝日式）への交替が前期土器と中期土器の境界と考えられている。濃尾平野周辺以東では条痕紋系土器（岩滑式：西部は二枚貝条痕、東部は櫛条痕）が存続する。

朝日式は太頸壺、細頸壺、無頸壺（および台付き無頸壺）、鉢、浅鉢、台付き鉢、高杯等からなる。遠賀川系土器と異なり甕蓋はなく、その状況は凹線紋系土器期まで解消されない。

太頸壺は筒状の頸部に外反する口縁部をもつものと口縁部が外反せず筒状に立ち上がるものを主に、受け口状や袋状もわずかにある。壺は口頸部高と体部高の比率が1期には同比だが、2期には体部が肥大化して貝田町式につながる。細頸壺は出土頻度が少ないが、直線的な口縁部で受け口状をなすことはない。むしろ、受け口状口縁の無いことが貝田町式との差異である。鉢は壺体部成形段階に相当し、浅いものと深いものがある。浅鉢には沈線で幾何学紋が施される精製品があり、系譜が問題になる。台付き器種には無頸壺もあるが、多くは朝日式2期に出現する。

壺を始めとする有紋器種は、貝殻描紋が中心の前半（朝日式1期）と櫛描紋が目立つ後半（朝日式2期）に区分できる。

朝日式1期は、さらに壺に沈線紋を残す前半と喪失する後半に区分できる。朝日式1期の貝殻描紋はほとんどが条痕紋系土器に比べて細密の肋条をもつ二枚貝を原体とし、同時期の条痕紋系土器とは明らかに異なる。壺紋様は頸部と体部の直線複帯2段構成を基本とし、遠賀川系土器の紋様帯を継承している。少ない単帯構成は波状紋との組み合わせが基本となる。施紋は右回りで、弧状の静止痕を残すものは二枚貝腹縁を器面に当てていることを、それより1帯あたりの幅が狭く静止痕の無いものは二枚貝背面を当てていることを示す。

朝日式2期には近畿第II様式に比較可能な櫛描紋が現れるが、波線の組成率も明らかに上昇するなど字義どおりの櫛描紋が成立する。引き続き貝殻描紋も盛行し、単体や破片では時期判定に困る場合があるとはいえ、1期にもまして幅の狭い細密な条線もあり、波線の多様を含めて櫛描紋の影響が色濃い。

朝日式1期以来の直線単独構成は太頸壺や細頸壺に特徴的で、また体部が肥大化して波線を組み合わせるものが現れるが比率は低い。反面、無頸壺、台付き無頸壺、鉢、浅鉢（台付き鉢？）には後者が目立つ（図1）。

三角形刺突紋や横型流水紋、[直線+波線+直線]単位紋はこの時期に明確になる（図2）。[直線+波線+直線]単位紋は、壺・無頸壺・鉢などに施され、日本海側地域の櫛描紋との関係が窺える。頸部直下の段はこの時期にも一定量あり、その形骸化である沈線は少ない。

朝日式に伴う研磨沈線で幾何学紋を施した浅鉢には斜線帯や綾杉紋をもつものがあり、全面研磨の黒色焼成で、大地形土器とも無関係ではないだろう。縄文晩期以来の精製鉢の系列が取り込まれた観もあるが、技術系列上は朝日式の壺系列に含まれる。ただ、出土例が朝日遺跡に限られているとなれば、この部分は金剛坂式と無関係であり、むしろ濃尾平野における土器環境の個性を表現していると考えねばならない。つまり、浅鉢の象徴性を継承する基盤が（おそらく晩期後葉以来）濃尾平野に存在したのであり、それが朝日式成立とも無関係はないということだ。

さて、朝日式の出自は明らかに金剛坂式土器

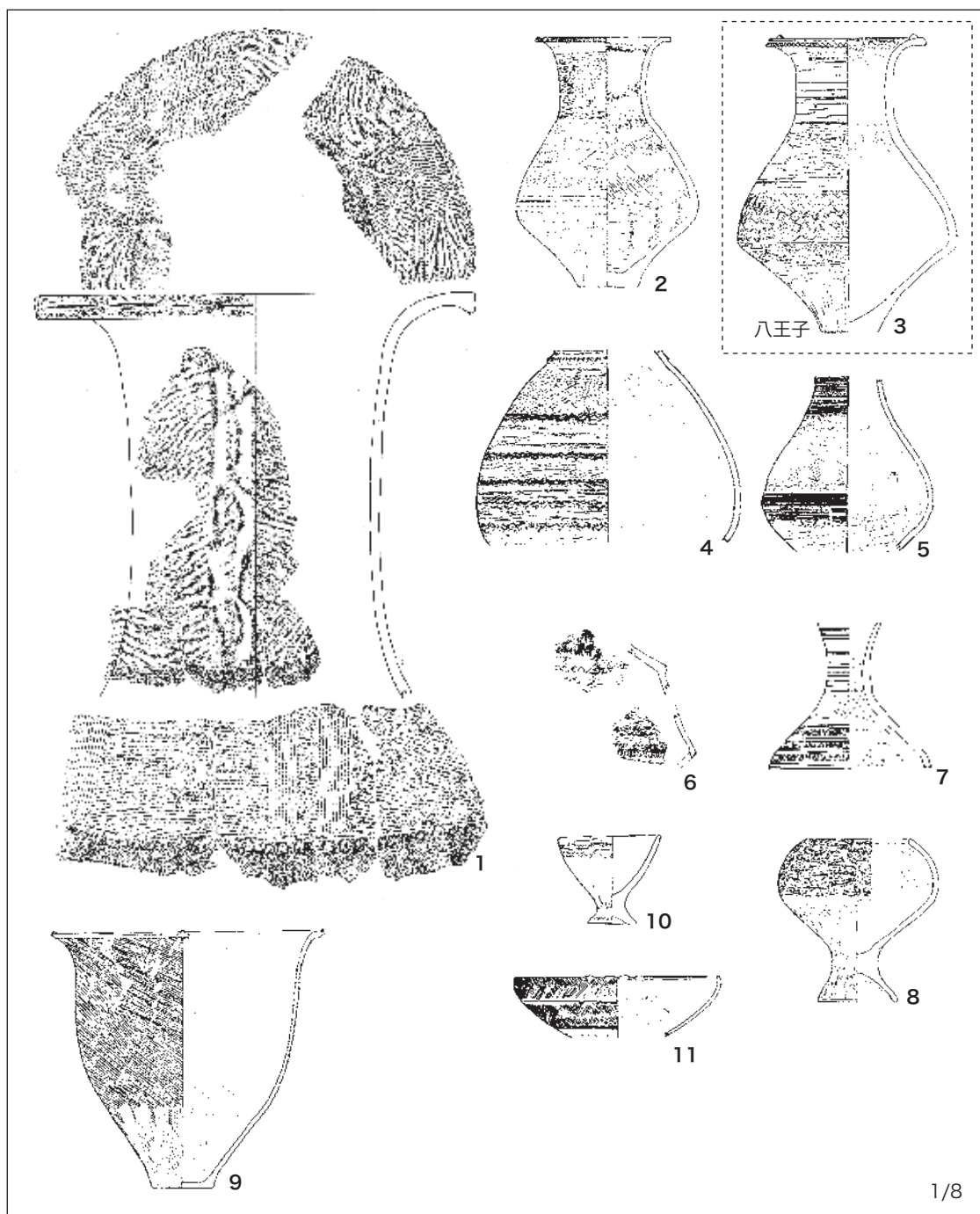


図1 朝日遺跡他の朝日式2期：壺は櫛描紋グループ

にあると考えられているが、残念ながら本拠地であるはずの伊勢湾西岸域でいささかの課題を残す。濃尾平野北部（や、おそらく西部）では金剛坂式甕の最末型式が中期初頭にも存続しているが、西岸域では金剛坂式分布圏の中心である西岸域南部でも不明である。次段階への移行が全域的ではなくかつての分布圏周辺で起きた

のなら、その核心に濃尾平野の朝日遺跡が関与していた可能性も貝殻描紋の盛行からいって高いはずである。

系譜関係をよく示すとされる壺に頸部の突帯はないが、口縁部内面にユビ沈線が施された壺が朝日遺跡から出土しており、また中村友博が注目した壺頸部紋様帯直下の段に加えて、口縁



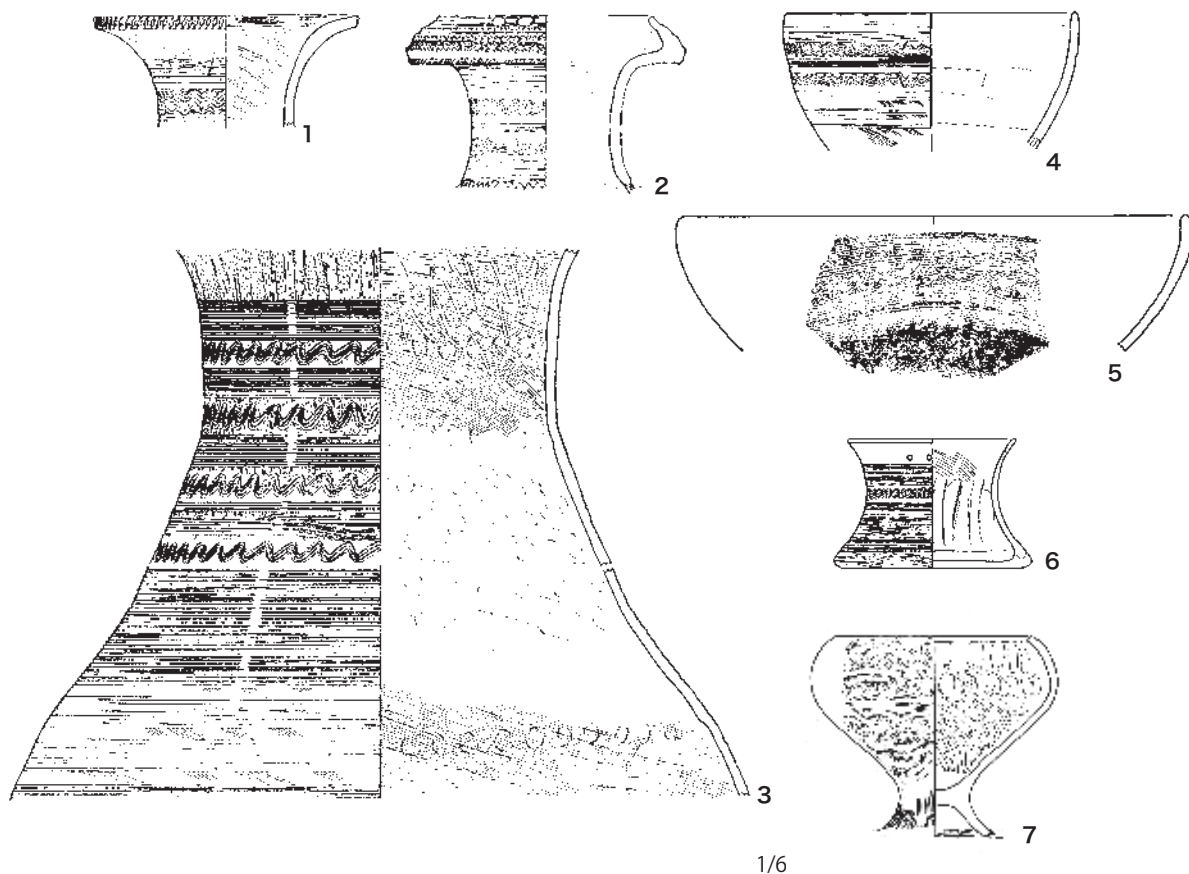


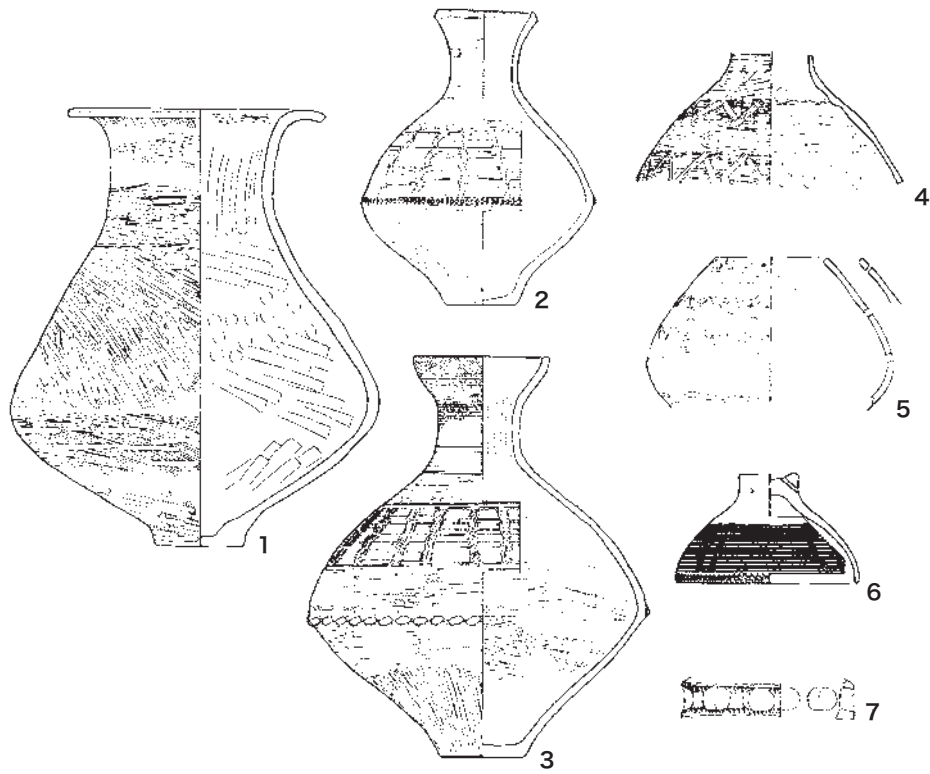
図2 朝日遺跡の朝日式2期：[直線+波線+直線] 単位紋をもつ諸器種

部の連続指押圧などの特徴に金剛坂式からの系譜をみることができる。ところが、甕になると、濃尾平野では強く屈折する口縁部の4ヶ所にユビ圧痕、もしくはユビ摘みを加え、底部外面にミガキを施し、体部を縦ハケメで仕上げる金剛坂系甕と、その後さらに二枚貝による斜位条痕で器面を仕上げる朝日形甕が東部の朝日遺跡周辺に、他方口縁部の外反がゆるく口縁部の4ヶ所にユビ摘み、体部外面に二枚貝縦位羽状条痕を施す須ヶ谷形甕が西部の稲沢市須ヶ谷遺跡周辺に分布しており、西岸域はほぼ全域が「大和形甕」に類似する粗ハケメで占められて、結果、西岸域から濃尾平野にかけては甕によって朝日式圏が3分されるというように、弥生前期末から弥生中期初頭にかけての金剛坂式要素の分布動態は大きな変化をみせている。

伊勢湾岸域を中心において[壺：広分布圏][甕：狭分布圏]という広／狭の関係に置き換えれば、いちおうは西の櫛描紋、東の条痕紋に対する「貝殻（櫛）描紋」圏として朝日式圏は成

立するのだが、しかし粗ハケメ甕が朝日式壺の分布圏西部におさまることなくさらに西や北へ大きく延びている点は、前期末から中期初頭の動態を外部との関係で評価する必要性を示しており、中村友博の構想とも重なる。

粗ハケメ甕は大和盆地では「大和形甕」と呼ばれているが、体部外面に縦ハケメ、口縁部内面に横ハケメを施す甕は、ハケメの粗さの程度を別にすれば京都盆地から琵琶湖周辺、そして伊勢湾西岸域と広域に分布しており、弥生中期中葉：貝田町式期になって京都盆地から琵琶湖周辺域で波状紋などの装飾や波状口縁が、同時に伊勢湾西岸域でも直線紋や波状口縁などの独自性が現れる。当初は壺と甕で分布の重心がずれていたが、後に両者が一体化する基本的な方向を重視すれば、朝日式として括ることに問題はなかろう。中期初頭における土器相とは、非遠賀川系土器の型式学的ネットワークの再編成として現れたものであり、朝日式（や貝田町式）はその一環であった。



1/6

図3 朝日遺跡の貝田町式1a期の主要器種

## 2. 貝田町式

貝田町式は朝日式2期を継承しつつ新たな要素の出現や他系譜の取り込みによって再編成された型式である。最古段階である貝田町式1a期の資料は朝日遺跡周辺を除くと不明確で、その内容も現状では決して安定したものではない。なお、議論が必要である。太頸壺、細頸壺、無頸壺、短頸壺、高杯、甕を主要器種とし、鉢、浅鉢、台付諸器種を伴う(図3)。

高杯は脚端が屈折して高台状に立ち上がるのが基本のようだが、なかには大きく立ち上がり側面に円形透孔をもつものもあるが出土頻度は低い。原型が木製品であることが形態的な変異幅の広さの背景であろう。浅鉢には朝日式以来の幾何学紋をもつ黒色焼成のものや、鉢のうち底部周囲を高台状に突出させて紐穴2ヶ1対を底部側面から底面に向けて斜めに2セットずつ対向して穿ち、浅鉢のように沈線紋を施す黒色焼成の器種も朝日遺跡に顕著である。朝日遺跡で認められた浅鉢→無頸壺(→短頸壺)→細頸壺の系統的器種分化は他の遺跡では不明確

で、しかも丁寧な研磨と黒色焼成によって括ることのできる短頸壺や上記の鉢も朝日遺跡に収斂する傾向をみせる。

指標になる典型的な細頸壺(貝田町式1b期)の諸属性には、

- ① 口縁部上端の刻み、② 口縁部外面の浮紋、③ 口縁部屈曲部の刻み、④ 拓本の取りづらい細密の櫛描紋、⑤ 櫛描紋の体部複帯構成、⑥ 櫛描紋帯の縁取り沈線と無紋部の研磨(付加沈線研磨手法)、⑦ 体部屈曲部の刻み突帯、⑧ 底部の突出の他に、⑨ 黒色焼成に赤彩、⑩ 頸部の刻み突帯、⑪ 体部櫛描紋帯上の浮紋、等がある。

①②③⑧⑪は岩滑式:条痕紋系土器、⑤⑦は朝日式:櫛描紋系土器に辿ることができ、両者の融合が窺われる(が、そもそも貝田町式の基本紋様である④⑥⑨は両者から系譜が引けず、だから独自の要素と考えられたが、以下ではその点を問題にする)。

体部下半の地の調整は、研磨仕上げが丁寧な場合には観察することも難しいが、多少ミガキ

が粗い場合には二枚貝調整が認められる例もある。

貝田町式の主要器種である細頸壺は体部の櫛描紋様が複帯を基本にしている。複帯の中身を見れば、貝田町式1a期には[櫛描紋帯4帯以上:1段]と[櫛描紋帯2帯~3帯:2段]の二つがあり、「付加沈線研磨手法」は後者の基本属性で、その後多段化していく主系列となる。朝日式2期の紋様構成を引き継ぐのは前者だが、流水紋の崩れは早い。後者では貝田町式に特徴的な擬流水紋や黒色焼成が存続するというように、両者は一系列の連続ではないようだ。つまり、貝田町式1a期には朝日型櫛描紋が収束して貝田町型櫛描紋が成立し、貝田町式1b期には主系列の多段化傾向が明確化する。浅鉢を含め複数器種に黒色焼成が及び、貝田町式1a期のうちに浅鉢→無頸壺→細頸壺のラインと黒色焼成が確立したと考えられる。

貝田町式を特徴づける縄紋も貝田町式1b期以降に盛行し、西岸域にも分布する。付加紋に沈線を多用するものは西岸域産であろう。また、櫛描紋に縄紋を組み合わせる紋様構成も西岸域にあり、ハケメ紋土器に繋がる。

壺の広がりや濃尾平野から伊勢湾西岸域に及ぶが、甕が異なる点で、朝日式の精・粗に関わる地域差が引き継がれている。甕は、伊勢湾西岸域中南部では朝日式同様に粗いハケメ仕上げが主であるのに対して、濃尾平野では金剛坂式系のハケメ甕が衰微して朝日形甕の系譜が朝日遺跡を中心にして、濃尾平野西部では須ヶ谷形甕の系列が並行して存続する。さらに、濃尾平野南部には伊勢湾西岸域とは異なり体部の張るハケメ甕に二枚貝条痕を重ねるものがこの時期に明確化して両分布圏に重なる。

このように、濃尾平野では朝日形甕・須ヶ谷形甕が東西に並存して10km圏の分布圏を有し、それぞれ固有の範囲で生産されたことは明らかである。これらに重なる縦ハケメ甕には西岸域北部と共通して搬入品と濃尾平野西部産の両者があり、そして二枚貝仕上げハケメ甕は濃尾平野南部の何処かで製作された。

壺は、細頸壺の共通性が西岸域と濃尾平野で高く、さらに太平洋側や日本海側などの外部地域に搬出される。太頸壺には受口状口縁があり、

口頸部紋様や付加紋に沈線が多用されるなど濃尾平野との差異も認められる。同類は琵琶湖岸域にも分布している。

浅鉢は無紋・有紋を問わず西岸域でほとんど確認できず、生産されていなかった可能性が高い。この点は朝日遺跡を除く濃尾平野の諸遺跡でも同様である。朝日遺跡に浅鉢→無頸壺(→短頸壺)→細頸壺の系列が認められるに過ぎず、そのほかではせいぜい時間的に下って無頸壺→細頸壺の生産が想定できるにすぎない。朝日遺跡や名古屋城三の丸遺跡下層以外では共伴する無頸壺と細頸壺の紋様構成上の不整合が認められる点からも、貝田町式細頸壺系列はある段階まで朝日遺跡に生産が集中していた可能性が高い。

貝田町式は壺群における紋様構成上の共通性や要素の互換性、また甕の分布の重なりによって、近畿諸様式や瓜郷式等と区別される。細頸壺は全域の共有器種であり、受口状口縁太頸壺は伊勢湾西岸域の専有器種、浅鉢や円窓付土器は朝日遺跡の専有器種である。この両者の間を広狭のレベルが重なり合いながら諸器種が分布していることになるが、濃尾平野の貝田町式壺の起源が朝日遺跡あることは間違いない。そして先に朝日遺跡で認められた浅鉢→無頸壺→細頸壺の工程が完全な段階には、それらは朝日遺跡の専有器種になる。であれば、その分布は朝日遺跡産の分布を示しているということになる。この点で、体部内面にツメ痕を残す細頸壺も朝日遺跡産の一つの指標になる可能性がある。一方、伊勢湾西岸域の受口状口縁太頸壺はすでに祖形が朝日式2期にあり、貝田町式段階に分岐したものではない。よって、貝田町式の東西差は前段階を継承したものといえる。

貝田町式細頸壺が共有器種であるのはあくまで消費面においてであり、始まりは専有型式である。共有器種と専有器種の論理的位置づけが難しいのは範疇が動態だからである。この点は在来・外来区分についてもいえる。

### 3. 条痕紋系土器

朝日式に並行する岩滑式は分布圏の東西で樫王式・水神平式同様に条痕原体が異なる(矢作川流域以西:二枚貝、豊川流域:櫛)が、ハネアゲ紋などの紋様構成に大差はなく、以東の丸



子式とは明確に区別される。岩滑式3期には濃尾平野北部から内陸部において新たに櫛条痕系（「野笹類型」）が成立する。

岩滑式太頸壺の型式変化は、太頸壺の口縁部、頸部の紋様構成に明確である。端的に言えば、口縁部直下の条痕が横位→ハネアゲ紋となり、口縁部上端に凸帯が付設されて[低い受け口→高い受け口→上端が内傾]というように受け口状口縁を成長させるとともに、受け口部外面も押し引き→斜条痕→連弧紋施紋というように紋様帯化する。とくに最終段階には、口縁部や頸部の条痕を磨り消して半截竹管紋や二枚貝背面擬縄紋などの紋様を施す「岩滑式B類」が成立して、続条痕紋系土器への端緒となる。

岩滑式には、遺跡によって①大地形土器、②充填縄紋や二枚貝背面による充填擬縄紋が施される壺、③半截竹管などによる平行線紋が施される壺・無頸壺、④工字紋をもつ赤彩鉢など、多様な器種が共伴する。

①は深鉢形から壺形まで幅がある。このうち、綾杉紋系列は北陸の「柴山出村式」に類似

している。いずれも煤が付着し火にかける用法が基本で、内部に固形物を残す資料もある。伊勢湾奥部から北陸にかけて広範囲に分布し、伊勢湾西岸域や愛知県東部・矢作川以東ではほとんど出土しない。

②は受口状口縁壺や袋状口縁壺があり、形態は条痕紋系土器に共通する。体部下半に二枚貝条痕を残し、体部上半は器面をナデで無紋にし、沈線や半截竹管で区画し、縄紋（擬縄紋）施紋部と無文部を配する。コ字状紋や王字状紋もある。体部下半と体部上半から頸部を条痕/無紋で仕分ける手法の始まりで、続条痕紋系土器に継承される。

③は朝日遺跡で特に目立つ。壺は袋状口縁をもち、体部下半に二枚貝条痕、体部上半から頸部は櫛描紋構成と同じように直線紋帯を配して、その間を無紋帯とし半截竹管の平行線による波線で縁取る紋様手法が一定程度認められる。②と同様に、体部下半と体部上半から頸部を条痕/無紋で仕分ける。無頸壺は条痕を消し去り、半截竹管の平行線で流水紋を施すものが

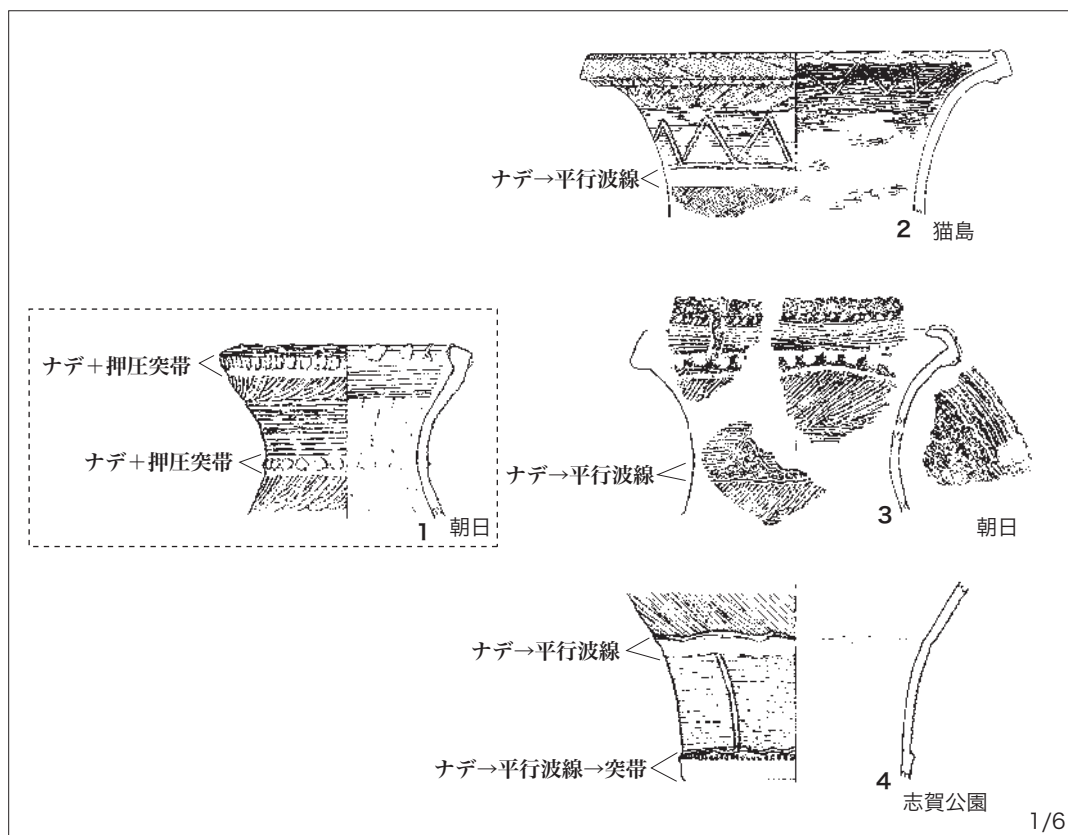


図4 岩滑式3期の変異1

ある。部分的に二枚貝背面擬縄紋が充填されて、②との関係も認められる。

④には鉢というよりは口縁がすぼまって無頸壺といった趣の形態もある。幅広い沈線で工字紋が施されており、赤彩を含めて北陸のユビ沈線と無関係ではないだろう。

上記のうち②は矢作川流域でも認められるが、豊川流域では未確認である。朝日式と岩滑式の接触圏に成立する中間相ともいえる土器群であり、だからそれをわたしは「岩滑式B類」と呼んだ。重要なのは連続性の有無を別にして中期中葉にも擬縄紋系列として続条痕紋系土器内に存在していることである。

### III 岩滑式 3 期の型式変異

#### 1. 全面条痕紋

太頸壺には単純口縁、受け口状口縁、袋状口縁の3種がある。細頸壺や無頸壺は無い。他に厚口鉢がある。単純口縁壺はほとんどが押圧突帯を脱落させているが受け口状口縁には突帯が存続している。袋状口縁はこの時期に現れる器種で、もともと押圧突帯は無い。半截竹管の平行線紋を横位条痕帯に重ねて波状の付加紋とするものが多く、条痕のみの施紋を探すのは難しい。西尾市岡島遺跡には横位条痕帯を平行波線で縁取るものもある(図5-9)が、ハネアゲ

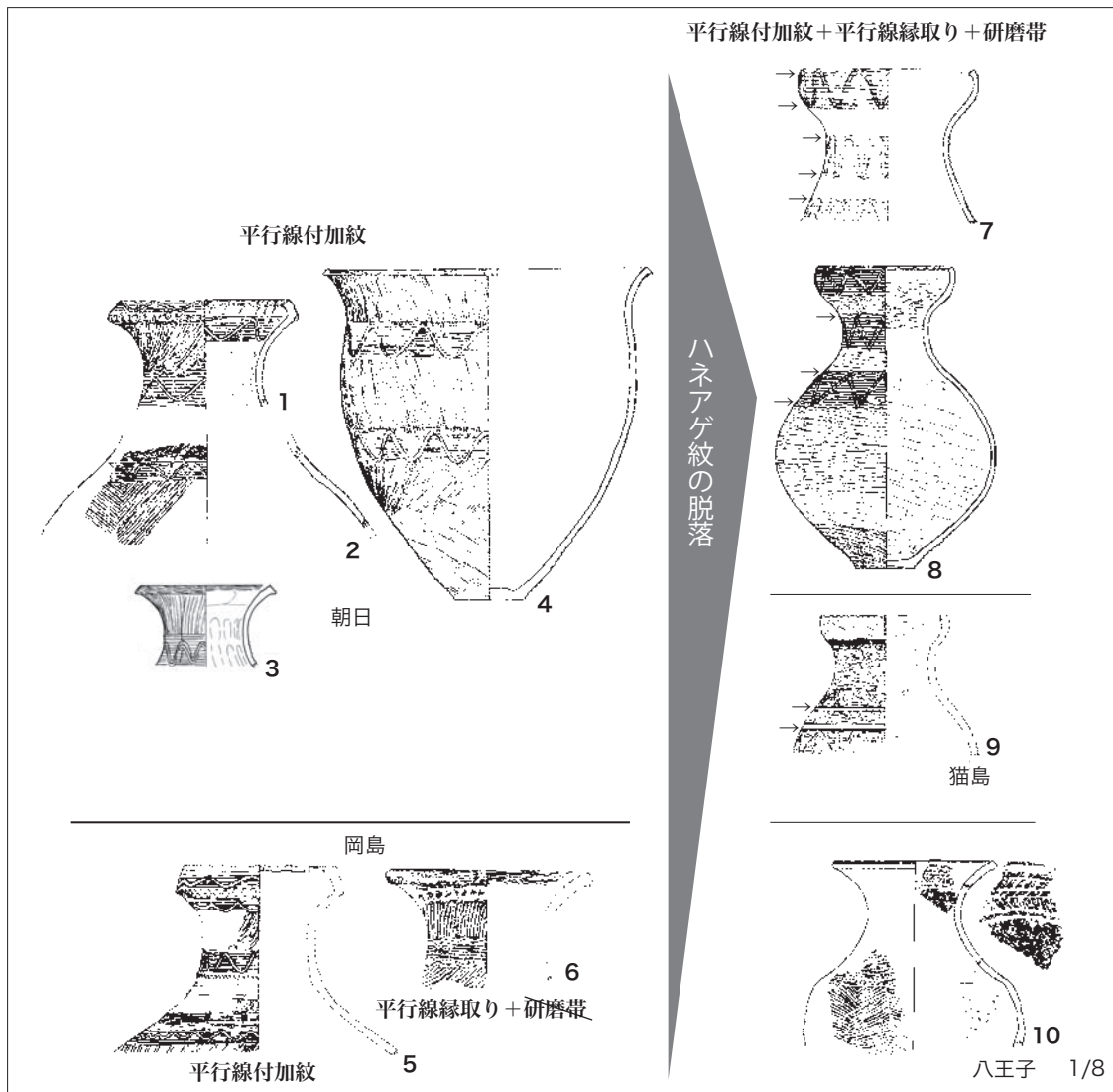


図5 岩滑式3期の変異2

紋を脱落させれば研磨無紋帯グループになる資料である。矢作川流域にハネアゲ紋を脱落させる資料は無いようで、研磨無紋帯の成立は濃尾平野に限定できる。

甕は口縁部に押し引きを施すものが濃尾平野から矢作川流域の内陸部にかけて、条痕を施すものが濃尾平野南部から矢作川流域の湾岸域にかけて微妙に分布圏がずれている。体部の調整は、縦位羽状条痕を施すものは前者、左上がりの斜条痕は後者に組み合わせる。

## 2. 無紋帯

### (1) ナデ無紋帯 (図4)

受け口状口縁太頸壺に限定され、頸部に半截竹管の平行線で縁取られるナデによる無紋帯を1帯挿入するもので、朝日遺跡、一宮市猫島遺跡、名古屋市志賀公園遺跡に類例がある。朝日遺跡出土の図4-1は口縁部の形状が図6-1・5に類似するもので、岩滑式の受け口状口縁とは些か趣が異なる。口縁部と頸部のハネアゲ紋上縁を横ナデして押圧突帯を貼付けている。しか

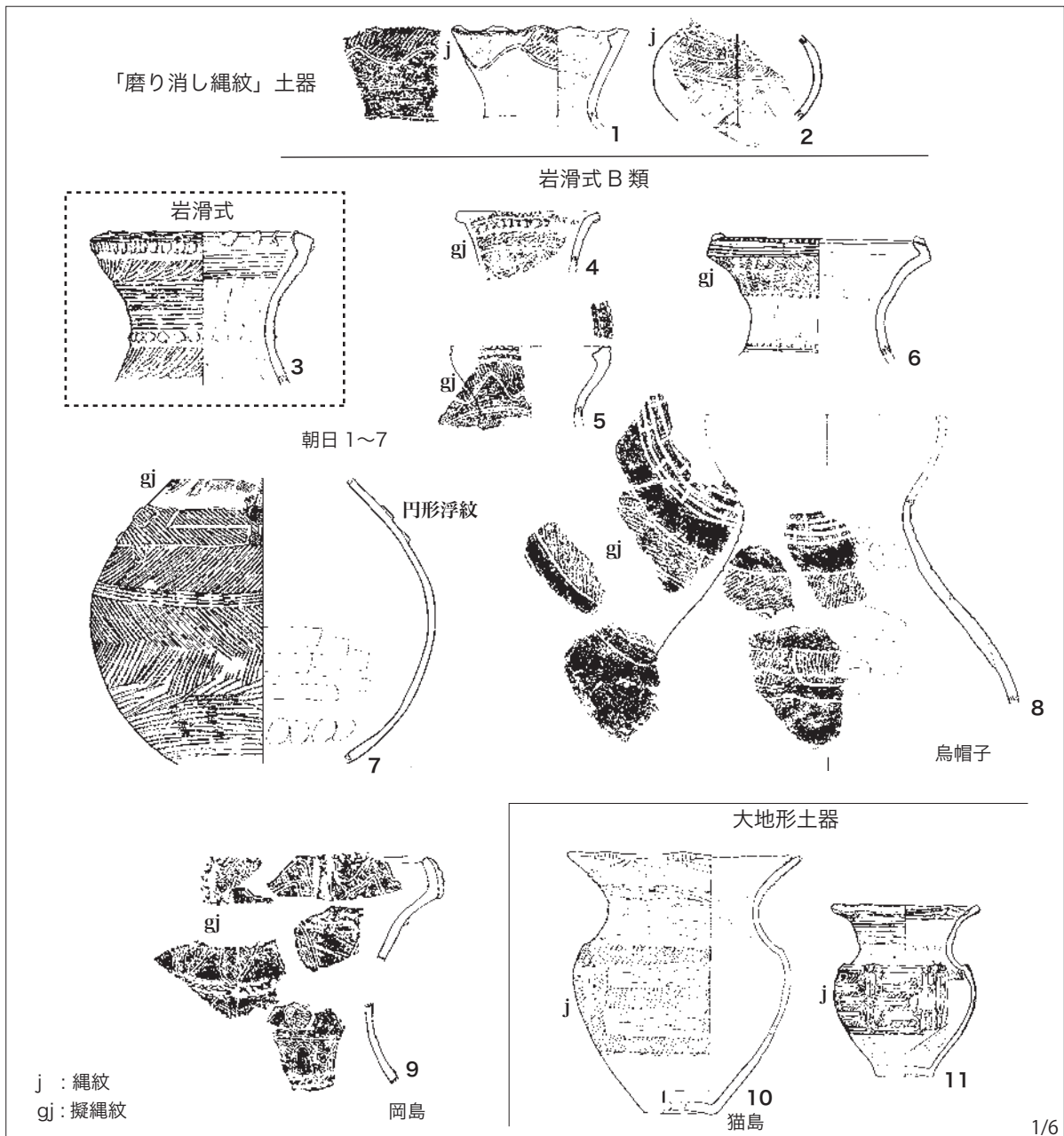


図6 縄紋・擬縄紋をもつ土器の相関



し、ナデ無紋帯はその延長ではない。むしろ、図4-3の無紋部は部分的に拡張されており、図6の磨り消し縄紋・擬縄紋グループとの関係が気になる。

### (2) 研磨無紋帯 (図5)

壺体部上半から頸部に直線紋帯と無紋帯を交互に配置し、紋様界に半截竹管の波線を加えるもので、袋状口縁がほとんどである。上述したように岡島遺跡資料 (図5-9) はハネアゲ紋を無紋帯に変換すれば成立する紋様構成であり、濃尾平野、とりわけ朝日遺跡での出土頻度が高い。縁取りの平行直線は一例だが猫島遺跡から出土している。半截竹管を反転させれば沈線となり、貝田町式の「付加沈線研磨手法」との関連を窺わせる。

なお、一宮市八王子遺跡では体部下半に条痕調整を限定して体部上半から頸部にかけて条痕を脱落させ、半截竹管紋を施す壺 (図5-10) が出土している。口縁部内面にも半截竹管で直線と斜行単線の組み合わせを2段施している。様相としてハネアゲ紋を脱落させた研磨無紋帯グループに近いが、体部を上下に2分する紋

様構成は続条痕紋系土器的で、「磨り消し」縄紋グループ的でもある。体部が縦位羽状条痕とはいえ、貝田町式1a期の並行関係を見ずえるなら帰属に悩む資料である。

### 3. 「磨り消し」縄紋・擬縄紋グループ (図6)

完全な形の資料は少ない。口縁部を含む上半部をナデ仕上げの後に沈線や半截竹管で区画 (王字、コ字、E字等) して部分的に縄紋・擬縄紋を施すもので、正しくは「磨り消し」ではない。体部の下半部は二枚貝条痕を残すものとミガキ仕上げとがあるが、図5-8のように底部付近に条痕が限定される場合があれば、体部片では判別が難しいことになる。口縁部は袋状に内湾するか内面に突帯をめぐらした波状形態が優勢のようで、擬縄紋系は朝日遺跡から知多半島にかけての伊勢湾岸よりに分布して、海産資源と親和的である。

体部の紋様パターンではなく表出手法が大地形土器と共通しており、濃尾平野でも出土するが主系列は矢作川流域の可能性のあることから、条痕紋系土器の壺に大地形土器紋様を取り込まれたものと考えられる。

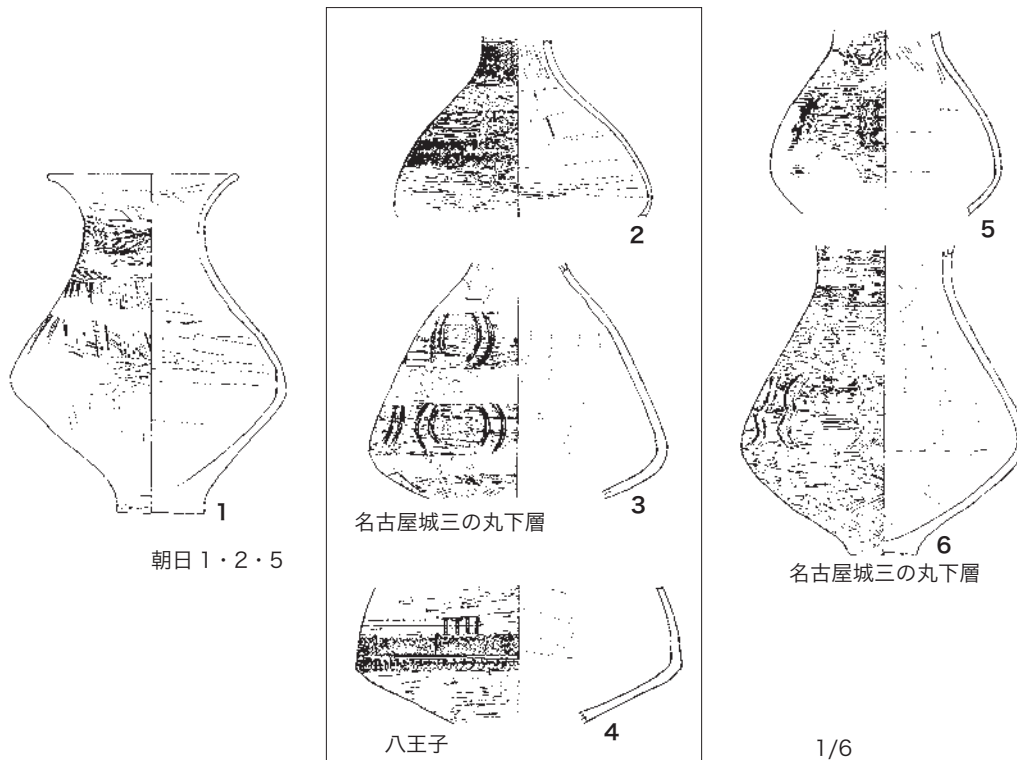


図7 貝田町式1a期の〔直線・波線・直線〕単位紋

## IV 貝田町式紋様の再検討

### (1) 朝日式からの連続と不連続 (図7)

朝日式から貝田町式への移行は従来、連続を基本に考えられていた。器種組成、製作技法、分布において朝日式と断絶するような部分はないからである。朝日式2期を継承しつつ「付加沈線研磨手法」の成立によって貝田町式の成立が窺えるのが貝田町式1a期である。ただし、貝田町式1a期の諸器種のうち、壺類については紋様上も帰属型式は明確だが、甕や浅鉢については単独では朝日式2期との識別は困難である。そこに連続と不連続がある。つまり、複合する要素の連続を基盤に不連続の要素によって両型式は区分されるというわけである。

朝日式は1期の貝殻描紋から2期の櫛描紋に移行しても、壺は頸部部の複帯2段構成と少量の単帯多段構成の2系列が、その他の器種では後者が存続し、そして直線2帯の間に波線を挟む[直線+波線+直線]の単位紋(も櫛描ではなく貝殻描の場合には非常に細密な条線を残す原体の背面が用いられる)が壺他の有紋諸器種に散見される。

貝田町式になると単帯多段構成が鋸歯紋以外は消失してほとんど複帯2段構成に限られるが、貝田町式1a期については確たる資料は無

い。少ない資料からみれば、壺頸部の段は沈線となることで消失し、後に二枚貝刺突紋が出現する。三角形刺突紋は壺の頸部以外でも境界紋様として施されているようだが、1b期には太頸壺の口縁部内面や高杯杯部内面の紋様に転換するということのように、有紋器種の場合には1a期中で紋様構成の再編集が行われている可能性がある。

壺体部櫛描直線紋の複帯2段構成には縁取り沈線の有るものと無いものがあり、前者は貝田町式の指標となるが、後者は朝日式2期を継承していると評価される。貝田町式に継承される[直線+波線+直線]の単位紋はこれまでのところ、伊勢湾西岸域では津市替田遺跡の1例、濃尾平野では朝日遺跡、名古屋城三の丸下層、八王子遺跡の3例と僅かしかないが、いずれも縁取り沈線はない。

そして、朝日式2期に特徴的な、体部櫛描紋帯に半円紋を縦位に連ねる流水紋は貝田町式1a期には連続する縦位弧線、さらには縦位波線となり流水紋構成は逸早く崩れてしまう。その後複帯櫛描紋帯全幅に施される相対弧線が貝田町式壺の典型紋様として擬似流水紋と交替することになる。流水紋・縦位弧線・縦位波線の3者は変異ではなく一連の型式学的変化として現れており、それを加速させたのが朝日式以来の複帯構成であった。もともと流水紋は単

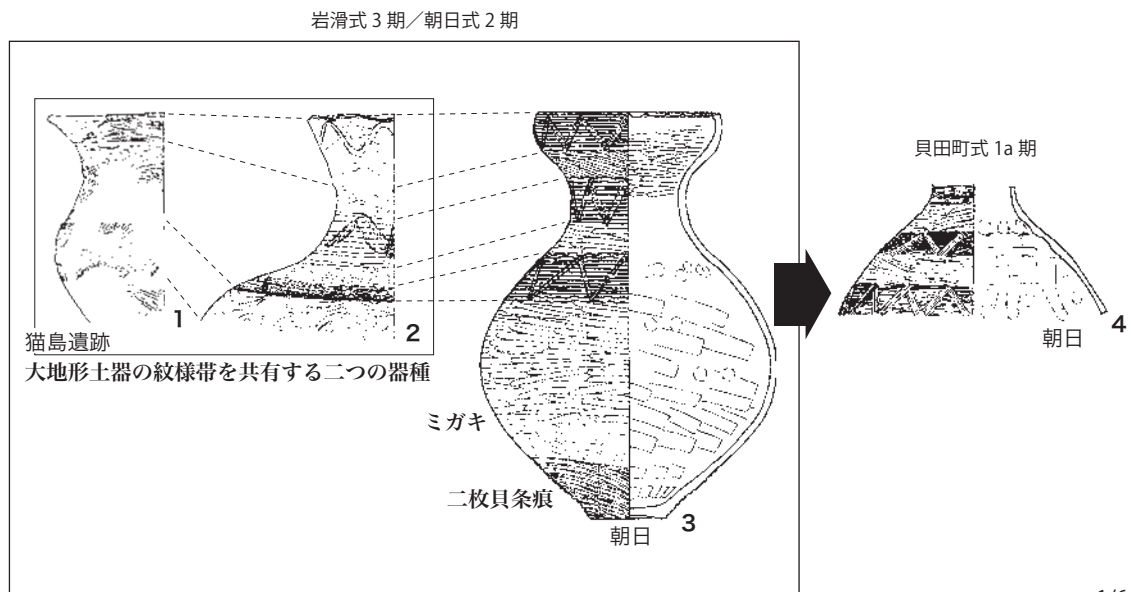


図8 大地形土器からの連続

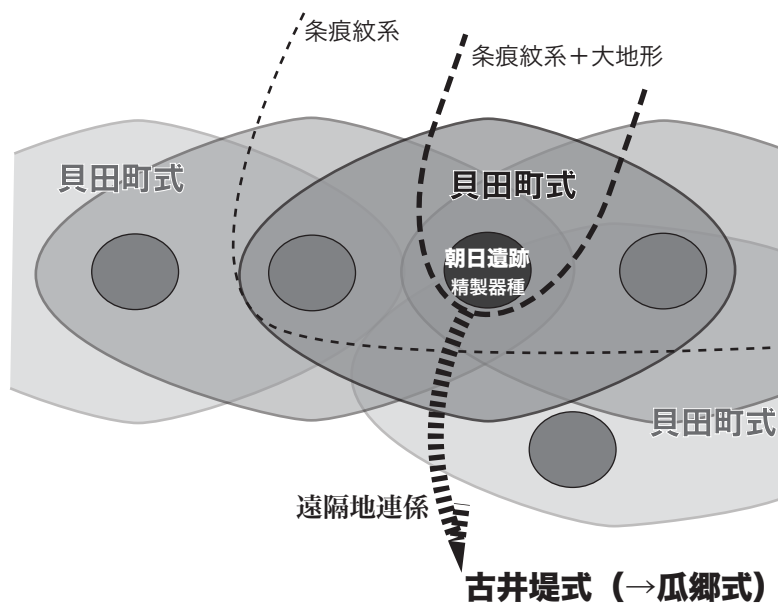


図9 貝田町式1期の型式観

帯を基本とする紋様であり朝日式以降の複帯構成には不適合な紋様であったことがそうした変化を生み、ゆえに外来紋様の在来化とはすなわち折衷型の形成であったといえる。

有紋器種群は朝日式2期になると貝殻描紋に櫛描紋が加わる、あるいは貝殻描紋と櫛描紋の相互影響によって型式学的には拡散する状況が生じる。それが貝田町式には型式学的な収束に向かう。まず黒色焼成を特徴とする浅鉢→無頸壺→受け口状口縁細頸壺の系統的器種分化、そして「付加沈線研磨」手法である。前者は朝日式の浅鉢を取り巻く環境の鮮明化といえ「精製器種」の継承である。朝日遺跡では高杯、台付鉢など多くの器種の黒色焼成や特有の紋様が及び、精製器種の範囲は広い。朝日遺跡10km圏とそれ以外における精製器種の保有形態の差異は明確で、離れるに従い器種は脱落して、遠方では細頸壺に収束する。

いっぽう、「付加沈線研磨手法」は朝日式に原型はなく、新たに成立したと考えられてきた。問題は生成過程である。

## (2) 貝田町式壺類「付加沈線手法」の生成過程

貝田町式の「付加沈線研磨手法」の出自について、上述のように岩滑式3期の研磨無紋帯に求めてみた。「付加沈線」となるには竹管の半截内側：平行線から半截外側：沈線への反転という1段階を経る必要はあるが、この場合

には型式変化が急激に進むが故に資料が少ないこと、朝日遺跡という特定の遺跡で型式変化が起った可能性が高いこと、言い換えれば折衷型土器の動態に型式変化の収束点が見えてきた、と指摘できる。「型式」の生成が安定した型式変化の中ではなく、その界にあること、つまり折衷型のうちにあるということ「付加沈線研磨手法」はよく示している。

あるいは、折衷型を対象化できるのが求心的視点であり、それに対して生成の対象化には遠心的視点とともに型式学的ネットワークを必要とする。その型式学的ネットワークにおける一過性の収束点として、同時に多系の共存と交流を反映する折衷型土器が連続的に生産される場である朝日遺跡を軸とする諸関係を示している(図8・9)。

## V あとがき

中期前半における土器の型式学的変遷の全体を対象化することは当然であるが、それを総て表現するには膨大な紙幅が必要となる。今回も肝心な部分に限定して提示した。

図10では「付加沈線研磨手法」の生成を軸に他の諸系の動態も加えた。型式学的には朝日遺跡を母型として影響圏および周辺、さらに外縁という重層的なネットワーク関係(いわゆる



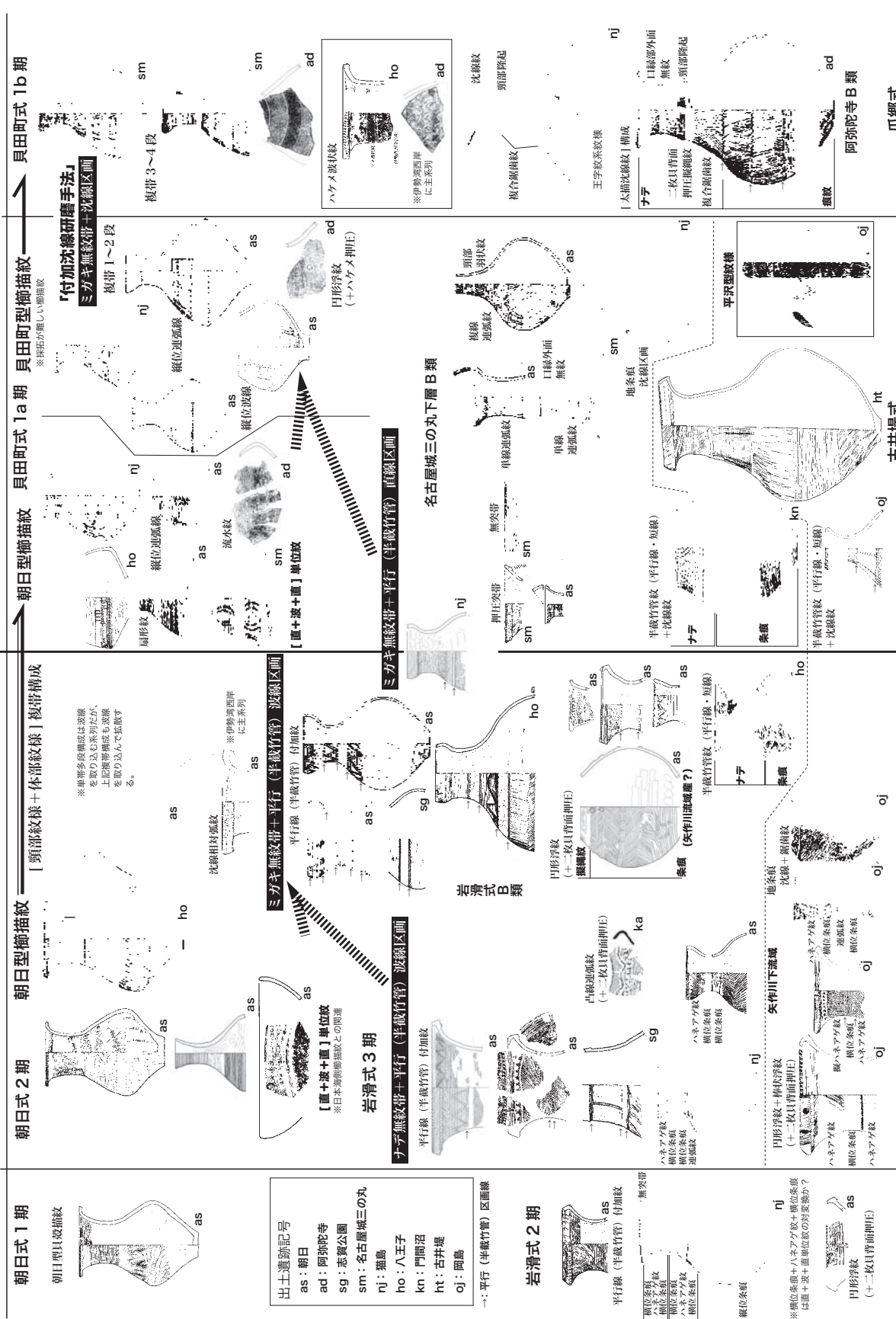


図 10 貝田町式生成史

中心／周縁図式ではない)を図9でも示したが、それらが煩雑な印象を与えるのか、要点は掴めるものとなっているのか、新たな展開をもたらすのか、の評価は諸賢にゆだねたい。

なお、本稿は替田・武之坪遺跡検討会および土器型式検討会での成果をもとにしている。石井智大、川崎志乃、福海貴子、川崎みどり、神谷真佐子、鈴木とよ江、藤田英博、永井宏幸諸氏から有益なご教示をえた。

## 参考・引用文献

- 石黒立人 1990 「濃尾の弥生土器」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』東海埋蔵文化財研究会
- 石黒立人 2008 「貝田町式土器原論」『南山大学人類学博物館オープン・リサーチ・センター 2007 年度年次報告書付編 研究会・シンポジウム資料』
- 石黒立人・宮腰健司 1996 「尾張」『YAY! 弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』弥生土器を語る会
- 池本正明 1993 「岡島 I 式～V 式の設定」『岡島遺跡 II ・不馬入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
- 神谷友和 1988 「愛知県安城市古井堤遺跡出土の条痕文土器について」『古代』86、早稲田大学考古学会
- 紅村 弘 1958 『名古屋城西志賀貝塚』名古屋市
- 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡』総括編、名古屋鉄道株式会社
- 紅村 弘 1981 『東海先史文化の諸段階 本文編』補足・改訂版
- 佐藤由紀男 1994 「長頸壺の出現とその意義」『地域と考古学』向坂綱二先生還暦記念論集刊行会
- 鈴木とよ江 2002 「三河地域」『東海地域の様式と編年』木耳社
- 田中 稔 1967 「尾張における中期弥生土器の研究-朝日式について-」『古代学研究』第 47 号、古代学研究会
- 田中 稔 1968 「尾張における中期弥生土器の研究-貝田町式について-」『古代学研究』第 51 号、古代学研究会
- 中村友博 1982 「土器様式変化の一研究-伊勢湾第 I 様式から伊勢湾第 II 様式へ」『考古学論考』平凡社
- 永井宏幸・村木 誠 2002 「尾張地域」『東海地域の様式と編年』木耳社
- 贊 元洋 1988 「瓜郷式の再検討」『転機』2 号
- 久永春男 1966 「弥生文化の発展と地域性 三 東海」『日本の考古学』弥生時代、河出書房新社
- 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡Ⅳ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1990 『阿弥陀寺遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1990 『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1993 『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡Ⅴ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 1999 『門間沼遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2001 『志賀公園遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2001 『朝日遺跡Ⅵ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2001 『八王子遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『烏帽子遺跡Ⅱ』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『猫島遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『朝日遺跡Ⅶ』
- 名古屋市教育委員会 2009 『朝日遺跡』

# 碧海台地東縁の古代集落

● 永井邦仁

西三河地域の中でも碧海台地東縁を対象として、古代集落遺跡の立地がどのように推移するか検討した。7世紀代には開拓集落が台地縁辺で増加傾向にあるが、8世紀前半は特に、より高燥な台地奥部への進出がみられる。その後、8世紀後葉を面期として水辺近くへの移動が本格化する。この一連の集落移動には村落首長層が伴っており、律令国家的権威を背景にしながらも在地首長層の主體的な意志がはたらいたものと考えた。

## 1. はじめに

律令が制定・施行された8世紀を中心とする前後数百年の間、あるいは都の所在地によって飛鳥・奈良・平安時代と呼称する7～12世紀を、わたしたちは日本列島の古代国家の時代とみなしている。それでは古代の集落に時代や地域の特徴はどのようにあらわれるのであろうか。

本稿では、愛知県内の西三河地域（矢作川中・下流域）、とりわけ碧海台地東縁における古代の集落遺跡をとり上げる。基本的には時間軸でたどりながらその変化を見出すことを目指すことにしたい。しかしながらこのような作業はどうしても建物、すなわち遺構配置の変遷にとどまってしまうがちである。そこで、地形・村落首長・信仰・生産流通の各要素に整理して集落遺跡を観察してみよう。

## 2. 碧海台地東縁の形状

一般的には矢作川の中・下流域における右岸と左岸は一括して西三河地域として扱われることが多い。しかしその沖積平野に立って眺めれば全く異質な地形が右岸（西側）と左岸（東側）に広がることに気づく。すなわち右岸の風景は、沖積平野の向こうに碧海台地の崖や緩斜面がみえるだけであるのに対し、左岸は丘陵の端部の斜面が舌状に張り出し、いく筋もの谷が背後に迫る山地に向かってのびる風景である。単

純化すれば右岸の原野と左岸の山という対比である。この違いに過去の人々が全く無頓着であったとは考えにくい。例えば古代に近い時期では、古墳時代後期の横穴式石室墳の分布をみると右岸の碧海台地よりも左岸丘陵地の方が圧倒的に多い。偏在の理由は様々考えられるであろうが、当該期の流域の人々が墓域の設定にあたって地形に代表される環境に大きく影響されたことは想像できよう。このことから、墓制以上に周辺環境を考慮したと想定される集落を立地の観点から検討するとき、同流域においては右岸と左岸を別個に扱うことが前提になる。まずは遺跡の発掘調査成果が蓄積された右岸碧海台地東縁から検討を始めたい。本稿の表題もここに発している。

碧海台地は地形分類による中位段丘の碧海面のことで、上位段丘の挙母面、下位段丘の越戸面と区分される。概ね挙母面は豊田市北部の古代賀茂郡西部に相当し、碧海面は豊田市南部から安城市・刈谷市に広がり古代碧海郡に相当する。越戸面は上・中位段丘に付随して局地的にみられるが、その分布は豊田市南部が南限である。碧海面の標高は豊田市南部で23～38m、南へ16km下った安城市南部で12mであるから平坦な地形であることが判る。

さて、碧海台地の東縁は高低差が5m以上ある明瞭な段丘崖が多くみられるが、越戸面と組み合うと階段状となり、開削の進んだ現在では緩斜面となる部分もある。また微細にみれば平坦面が崖面に突入するところもあれば緩斜面があつてその先に崖面となるところもある。



そして最も注目すべきはその崖線である。地形分類図はもとより明治24年陸軍参謀本部陸地測量部作成の地図において土地利用の違いや等高線の展開を拾っていくとその特色は明瞭である(図1)。すなわち豊田市南部では単調な崖線が続きそこから台地へ入り込む谷地形は少数であるのに対し、岡崎市・北野廃寺跡から南側の安城市域では大小の谷地形が頻繁に台地に入り込み、その一部は谷奥でさらに分岐して複雑な小支谷を呈する。谷奥の状況もさまざまであり、谷地形を視認できるところもあれば埋没が進んで台地上の窪地にすぎないところもある。

この崖線に遺跡の位置を示すと、古代以前の集落においてはほとんど崖線と谷地形から離れることがないことが判る。例えば単純化された地形区分では台地奥に位置する安城市・御用地遺跡も詳細にみれば谷地形に面する。このことから、台地縁辺に形成された大小の谷地形が、集落維持のために必要な生産活動の場となっていたことがうかがえる。さらに谷地形を取り囲む台地は山林ないしは原野であったと考えられるが、これらを採集あるいは開墾の目的で利用していたとすれば、小支谷が多いほど利用可能な台地縁辺の面積は増えることになる。程よい長さや広さに加えて複雑な谷地形ほど中核的な集落が形成されやすかったものと推察される<sup>\*</sup>。遺跡の分布から、この傾向が碧海台地東縁で明瞭になってくるのは弥生時代中期後葉あたりと考えられる。そして後述するように古代の集落に至るまでそれはより顕著になっていったのである。

### 3. 古代集落の画期

次に碧海郡北部での調査事例をもとに、古代における集落の変遷とその画期を検討してみよう。遺跡は豊田市渡刈町・水入遺跡である。

水入遺跡は、標高22～24mの碧海台地縁辺に立地し、遺跡の中心に矢作川へ開く幅約

<sup>\*</sup> 安城市・古井堤遺跡をはじめとする古井遺跡群は、後背に長い谷地形が控えた弥生～古墳時代の拠点遺跡である。ここは沖積地上に広がる遺跡であるが、谷地形と深い関わりがあると考えられる。

100mの谷地形がある。この谷地形は江戸時代には埋没し小河川(宝蔵川)となっていたが、字名はここを境に北の下糟目、南の大屋敷に分かれる。本稿でもこの字名を地区名として使用し、前者については小谷を挟んで低～高位の下糟目A地区、低位の下糟目B地区と呼称する。

水入遺跡では、縄文時代中期後葉に崖線付近が集落地となった。崖線から離れた台地表面に進出するのは弥生時代末期であるが、このときは大屋敷地区のみである。その後古墳時代前期末から大溝の開削に始まる集落の形成がみられるが、その大部分は大屋敷地区に収まる。5～6世紀の集落は、大溝や崖線下から圧倒的な量の須恵器・土師器が出土し、土師器甕には煮炊の痕跡が認められるにもかかわらず、竪穴建物跡は数棟検出されたにすぎない。そのため集落の建物は掘立柱建物が中心であったと想定しており、7世紀の竪穴建物に先行する柱穴も検出されている。しかしながら想定される平面が正方形の総柱建物は古代の倉庫である可能性もあり、確定的ではない<sup>\*\*</sup>。

竪穴建物で構成される集落が再び大屋敷地区で広がり始めるのは猿投窯須恵器編年<sup>\*\*</sup>のH-44号窯期(6世紀末～7世紀前半)である。調査範囲内では、以後9世紀前葉まで一定量の遺構・遺物が検出され、寡少ながら10世紀代の灰釉陶器も出土した。しかし11世紀代の遺物は出土せず、ここに断絶をみる。そこで本稿では7～10世紀の集落を古代の集落とする。

次に水入遺跡の古代集落における画期を考える。集落の画期を設定するにあたっては、建物遺構の時期別配置状況などを通じて、土地利用の観点から考察されることが多い。一定量の出土遺物によって時期特定が可能な建物跡の時期別変遷を図化したものが図2上である。

7世紀代に大屋敷地区に展開した建物群は、7世紀末～8世紀初頭(I-41号窯期)に下糟目B地区にも広がり始め、8世紀前葉(C-2号窯期)

<sup>\*\*</sup> 古墳時代中期の掘立柱建物については松井1995に提示された2間×2間規模のものを想定した。掘立柱建物の認定とその時期は、問題が生じやすかつ集落景観を根本的に覆す可能性をもつ。本稿ではそれを前提としたうえで(竪穴建物についても同様であるが)、報告書で提示した建物の中からさらに確定的なものに限定して論を進める。

<sup>\*\*</sup> 須恵器の年代観は愛知県史編さん委員会2010による。



本図は、明治24年陸軍参謀本部測量部作成の地図をベースに、その等高線と示された土地利用(水田と畑・山林・市街地)の境界を概ね段丘崖・谷地形の境界ととらえ、その後の地形分類を参照して崖線を記入したものである。ただし矢作川右岸の碧海台地に限定した。

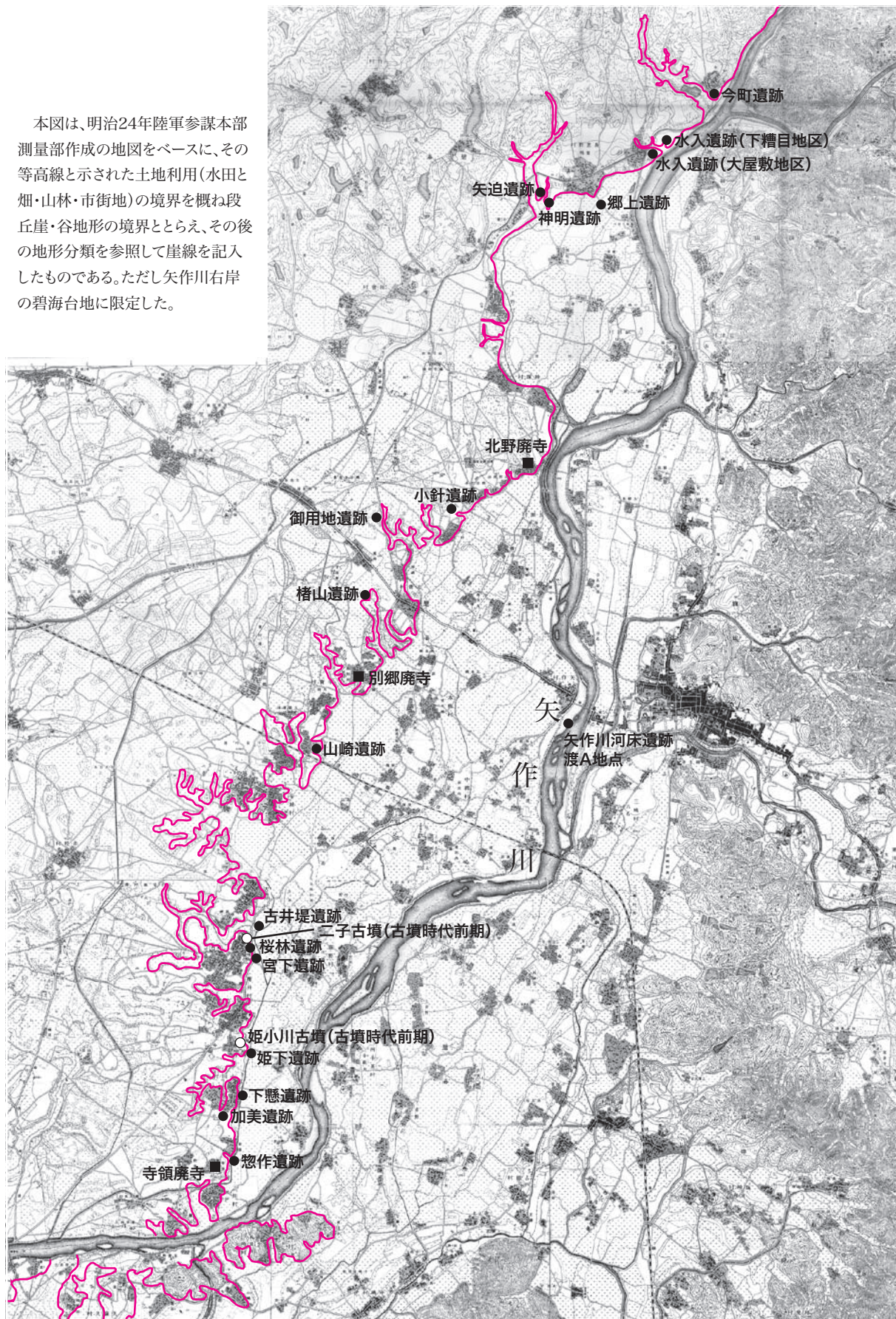


図1 碧海台地の崖線および谷地形と主要古代集落遺跡



には下槽目 A 地区に建物群を見出せる。その一方で大屋敷地区の建物は 7 世紀末段階ではほとんどみられなくなり、遺物も 8 世紀前葉までである。加えてこの時期に変化がみられるのは集落立地が、より高燥な台地の奥部にまで分け入っていることである。下槽目 B 地区は矢作川に近く水辺との高低差も大屋敷地区と同じであるが、下槽目 A 地区は標高 23～24m で水辺から離れている。一つ目の画期は 8 世紀前葉に求められよう。

その後 8 世紀中葉 (I-25 号窯期～NN-32 号窯期) にかけては同様の集落立地であるが、8 世紀後葉～9 世紀初頭 (O-10 号窯期) には、下槽目 A 地区南端、遺跡中心の谷地形の水辺近くで建物遺構の重複が多数みられ、高燥な台地には建物の分布がみられなくなる。これが 2 つ目の画期である。なお、掘立柱建物の居宅は 8 世紀中葉から登場するようであるが、集落建物の主体はあくまで竪穴建物であった。

#### 4. 7 世紀の集落

**地形** 集落は、古墳時代中～後期の集落から継続する立地または先行集落のない崖線付近である。前者の場合、継続性の高い拠点集落という評価がなされることが多い。集落の消長 (図 2 下) のみをみれば豊田市・神明遺跡、岡崎市・小針遺跡が該当するが、内実はどうだったのか個別の検討も必要であろう (図 3-(2),(3))。いずれにせよ立地に限定すれば、谷地形の入り口付近に展開する点は共通する。一方、開拓集落ともとれる後者の例としては安城市・御用地遺跡が挙げられる。小針遺跡南側に開く谷地形で、そこから 600m 奥に位置するが、7 世紀の集落は崖線 (調査区の東縁) に沿う (図 3-(1))。**村落首長** この段階におけるムラの首長の存在は水入遺跡では明瞭ではない。神明遺跡や御用地遺跡でもそうだが、7 世紀の竪穴建物に顕著な大小がみられない<sup>\*</sup>。しかし小針遺跡では掘立柱建物で構成される一角があり、首長の存在がうかがえる。調査区外に存在した可能性も充分にあるが、ごく一部の拠点集落を除きほとん

<sup>\*</sup> 神明遺跡や御用地遺跡の 7 世紀代の集落では、一辺 5～6m 級が標準で、7m を超えて突出した規模のものはない。

どの集落では、特に 7 世紀半ばまでは階層差が視覚化される状況ではなかったようである。

**信仰** 仏教関連の信仰遺物はまだ出現していない。99ASB15 からは、古墳時代的な小型鉢が出土した。口縁が傾斜しており特殊な用途が想定される (図 3-(5))。

**生産と流通** 管状土錘は、河漁の網に付けたものと考えられている。碧海台地の古代集落では一般的な生産用具という印象があるが、広く出土する集落遺跡とそうでない遺跡がある。水入遺跡や神明遺跡では 7～8 世紀の竪穴建物跡からは普遍的に出土し、古代集落における食料獲得のひとつの柱になっていたともいえる (図 3-(4))。一方で碧海郡南部の御用地遺跡や安城市・加美遺跡では出土数は少ないようである。これは後者が谷地形を奥に進んだ立地にあることと大きく関わるともとれるが、その付近の低地の発掘調査においても土錘が多数出土した事例を聞かない。このことは碧海郡北部と南部での小地域差ともとれ、今後検討が必要であろう。

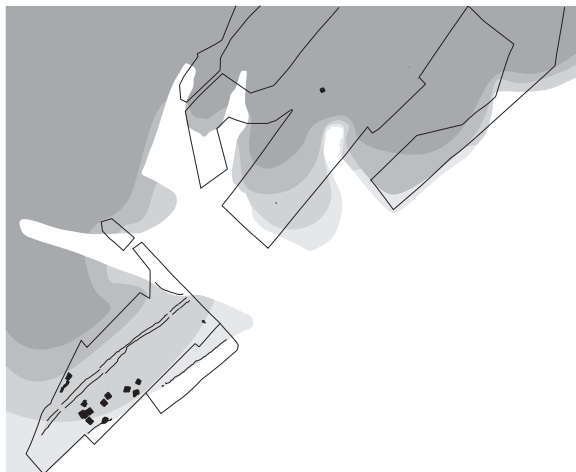
7 世紀代に碧海郡を中心に器壁の薄いナデ仕上げ土師器甕が出現することについて以前指摘した (永井・川井 2005)。水入遺跡 99ASB15 の 2103 や神明遺跡 SB216 の 11 はその初現である (図 3-(6))。このタイプの甕が碧海郡内で目立ち始めるのは 8 世紀に入ってからであるから、それまでは流通範囲が狭かったのであろう。

#### 5. 7 世紀末から 8 世紀前葉の集落

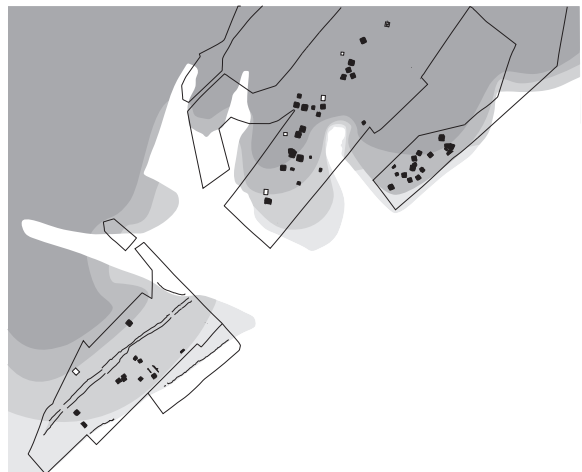
**立地** 集落が崖線付近を横方向に移動・拡大する時期である。まず 7 世紀末～8 世紀初頭の水入遺跡では、谷地形を越えて下槽目 B 地区での建物が中心となっていく。開墾によって利用可能となった土地は増加したと考えられるが、居は基本的に川や低地に近い場所を指しており、前代と大きく変わることはなかった。

高燥な台地に集落が移動したのは 8 世紀前葉である。下槽目 A 地区は、幅 10m に満たないごく小さな谷地形に挟まれた舌状台地であり、その中心を通る尾根筋から南東側斜面が主に新しい居住地となった。

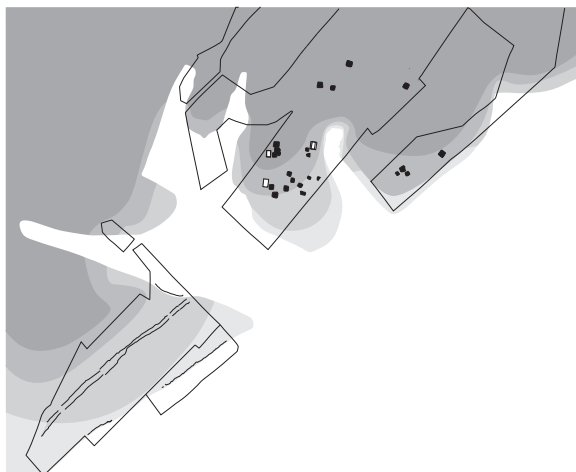




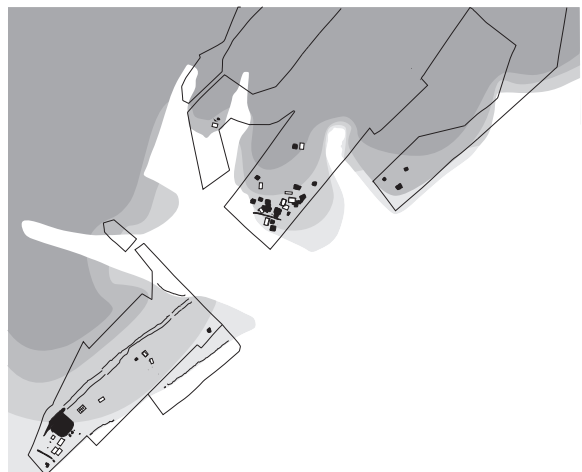
(1) H-44 号窠期～I-17 号窠期 (6 世紀末～7 世紀後半)



(2) I-41 号窠期～C-2 号窠期 (7 世紀末～8 世紀前葉)



(3) I-25 号窠期～NN-32 号窠期 (8 世紀中葉)



(4) O-10 号窠期～H-72 号窠期 (8 世紀後葉～10 世紀後半)

\* 水入遺跡の古代建物のうち、出土遺物があるなど  
詳細な時期区分が可能なものを抽出した。



		6 世紀	7 世紀	8 世紀	9 世紀	10 世紀
碧海郡北部	今町遺跡		—————	—————		
	水入遺跡 (下糟目 A 地区)			—————	—————	—————
	水入遺跡 (下糟目 B 地区)			—————		
	水入遺跡 (大屋敷地区)	—————	—————	—————	—————	—————
	郷上遺跡	—————	—————		—————	—————
神明遺跡・矢迫遺跡		—————	—————	—————		
碧海郡南部	小針遺跡	—————	—————	—————		
	御用地遺跡		—————	—————	—————	
	姫下遺跡				—————	—————
	加美遺跡		—————	—————		
幡豆郡	八ツ面山北部遺跡群		—————	—————	—————	—————
	寄名山遺跡			—————	—————	—————

図2 水入遺跡古代集落の建物変遷と碧海郡・幡豆郡の主要古代集落の消長 (永井 2010 を改変)

水入遺跡以外でもこの時期には集落がより乾燥な立地へと転換する事例がみられる。拠点集落と目される小針遺跡では、比較的早い段階から崖線より奥まった台地にも建物が進出していたが、8世紀前葉の集落は7世紀の集落から現況標高で2～3m高い地点で検出されている。

**村落首長** 状況に変化があらわれるのが7世紀後葉である。水入遺跡では崖下の堆積層(98C2SX01)から暗文のある土師器蓋・盤が出土しており、出土地点付近の大屋敷地区にその使用者がいたと推測される。村落構成員の所有物に階層差が生じ始めた段階である。

小針遺跡の8世紀に集住が進む高位地点<sup>\*</sup>は、7世紀の集落の中でも掘立柱建物の比率が高かった場所であり、もともと首長層の居住地であったところと考えられる。そこに東西棟の建物と倉庫とみられる総柱建物が並ぶ様相はまさに官衙風である。このように首長層の居宅を中心に計画的で集住的な集落建設を進めた時期であると評価されよう(図3-(3)、図4-(5))。

**信仰** 神明遺跡では、崖下の瓦窯(神明瓦窯)で北野廃寺向けの瓦を生産するとともに、台地上でも瓦が出土することから、その場でも使用していたと考えられる(図3-(2))。それが寺院なのか首長居宅なのかは不明であるが、もし前者であるとすれば村落内寺院の初現的な形ととらえられる。すなわち北野廃寺のような定型的な伽藍配置の寺院に次いで、塔は建立されたが統一的な伽藍配置が疑問視される豊田市・舞木廃寺、安城市・寺領廃寺クラスの寺院、そして安城市・別郷廃寺のように礎石建ちの堂の可能性はあるが塔跡が不明な寺院、と序々に「手の届きそうな」ランクの寺院建立に転換していく中で、集落が主体でありその内部に仏教施設を取り入れた形態が登場したと想定されるのである。

**生産と流通** 大屋敷地区では寡少であった製塩土器が竪穴建物跡から出土する例が増加する。98DSB16ではその脚部が8点も出土している。ただし竪穴建物廃絶後の覆土中への廃棄であることや、下糟目B地区でのC-2号窯期須恵器との共伴例が少ないことを考慮すると、むしろ

<sup>\*</sup> 岡崎市教育委員会の調査区B-2区、C区が該当する(斎藤・荒井1999)。

8世紀中葉の集落に関わるものと考えられる。

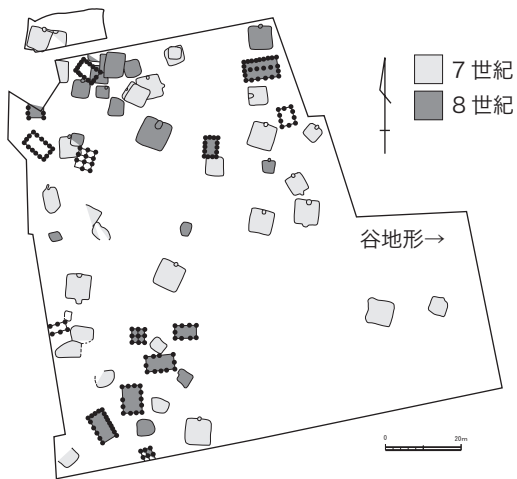
流通に関して注目されるのは、この時期まで濃尾型土師器甕が少数ながら混在していることである。同甕はハケ調整長胴甕であり、一部在地での模倣生産も考えられるが碧海郡域外からの搬入が専らであっただろう。その理由は、この時期の西三河地域における、造り付けカマド固定用の薄型長胴甕生産が小規模で需要に追いつかなかったためと考えられる。西三河地域では7～8世紀の竪穴建物跡で明確な造り付けカマドが検出されない例や土製の移動式カマドが出土する例が多数報告されており、各種の火処とそれに対応する煮炊具がそれぞれ一定のシェアを占めていたと考えられる。

## 6. 8世紀中葉の集落

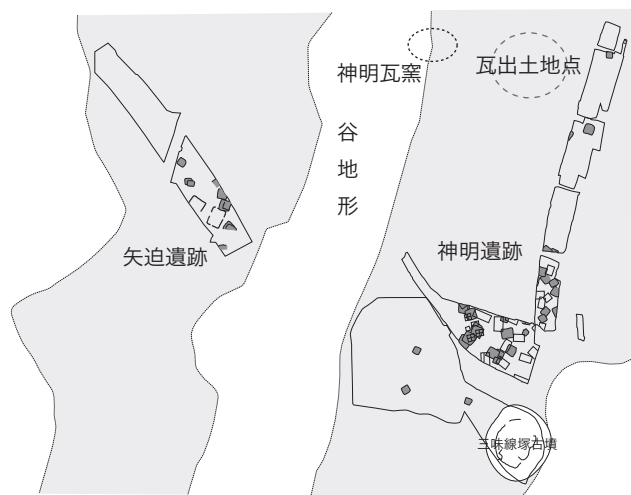
**立地** 8世紀前葉に下糟目A地区の開墾によって形成された集落は、ややその範囲を低位側に拡大させながら同様の場所に立地した。この時期の建物は掘立柱建物が混在し始めることが注目され、それと一辺3m以下の小規模な竪穴建物との組み合わせが想定される。それによると、集落の建物は緩斜面に雛壇状に配置され、水入遺跡の場合、概ね2列構成になっていたと考えられる。

**村落首長** 掘立柱建物98DSH36・37は、3間×5間の南北棟で下糟目地区では98DSH02に次ぐ規模である。その南側には一辺が約3mの竪穴建物98DSB38・39があり、土師器皿・ミニチュア土器・鈔帯金具(巡方)が出土した(図4-(1)、(2))。建物規模や特殊品の存在から村落首長層の居宅であった可能性が考えられる。また先述した製塩土器の集中的な出土も首長層居宅に関連する可能性が高い(森2010)。この居宅は下糟目A・B地区を隔てる小さな谷に面している。同時期の建物は、前代に開拓したやや高位な地点にも所在していることから、必ずしも首長層は視覚的に高位に陣取るわけではなく、むしろ水辺へのアクセスはしっかり確保していたことを示している。

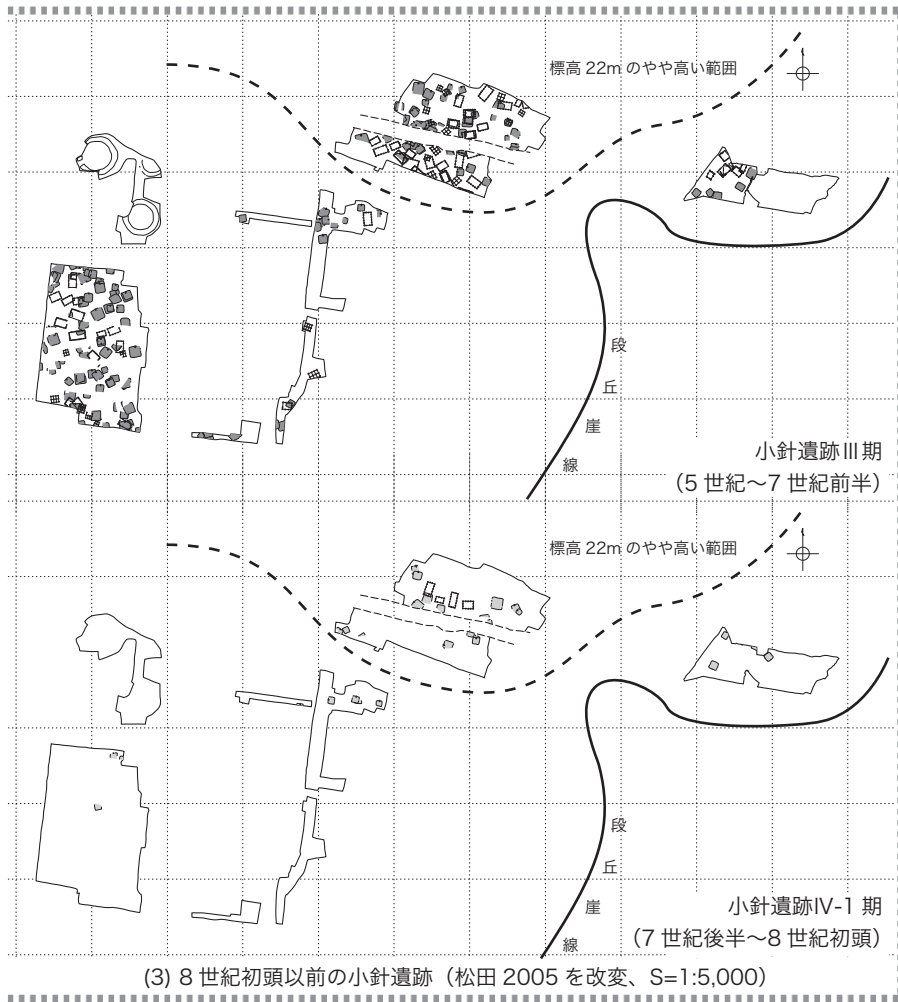
水入遺跡ではこの段階になって、建物と所有物の両面から明確な村落首長層の登場となる。鈔帯の所持は名誉的な意味合いが強くしかも不



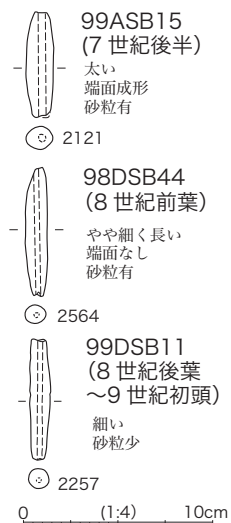
(1) 御用地遺跡 (安城市 2004 を改変、S=1:2,000)



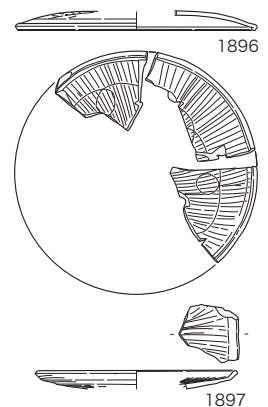
(2) 矢迫遺跡・神明遺跡 (永井2010を改変、S=1:4,000)



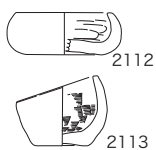
(3) 8世紀初頭以前の小針遺跡 (松田 2005 を改変、S=1:5,000)



(4) 水入遺跡における管状土錘の変遷



(7) 水入遺跡大屋敷地区の段丘崖下出土の暗文土師器



(5) 水入遺跡 99A 区 SB15 出土の特殊器形土器



(6) 7世紀後半に登場した薄型土師器ナデ甕

0 (5)~(7) 1:8 20cm

図3 7世紀から8世紀初頭の集落様相



揃いな状態であったと推察されるが、少しでも「都ふう」の暮らしを演出することで首長の在地での存在意義は充分示せたのであろう。

小針遺跡の主要掘立柱建物は報告書（斎藤1999）によるとIV-2期（8世紀前半）までとされているが、遺物が寡少であることから時期決定はなかなか難しい。一部はIV-3期（8世紀後半）まで存続したと推測される。しかし竪穴建物数は大幅に減少することから、高燥な台地上からの撤退はすでに進行中であったのかもしれない（図4-5）。

**信仰** 金属器写しの須恵器碗が99E区SK192から出土している。また付近には2間×3間の掘立柱建物（99ESH01）が単独で立地する。近接する廃棄土坑（99ESK475）からは黒色付着物のある碗や、遺跡内では数少ない須恵器高盤が出土した。この建物の特殊性を示すものであるが、仏教信仰を示すまとまった遺物の出土ではなく、性格の特定には至らない。

**生産と流通** この時期には、規格化された三河型土師器甕の流通が始まる。出土数が顕著でないのは口縁まで薄手に作るために見つかりにくいからである。カマド固定用の甕としてはやや強度が足りなかったかもしれない。この後に登場する口縁がL字形に屈曲するタイプは、その点を改良したとみられる（図4-3）99DSB20-2302）。

## 7. 8世紀後葉から9世紀前半の集落

**立地** 竪穴建物は下糟目A地区の水辺近くの低位部分に集まる。竪穴建物跡は複雑に重複する傾向にあり、平面形が長方形となるものもみられる。99DSB20・21は、それぞれ個別の竪穴建物として検出されたが、壁面を接しかつその接点で被熱によって赤変したカマド状の炉跡を2基確認した。このような炉跡は遺跡内ではここだけで、厨房のような機能があったのかもしれない（図4-1）。

**村落首長** 98DSH02は出土遺物が少なく時期特定が難しいが、東側に位置する竪穴建物98DSB66からはO-10号窯期古段階の須恵器蓋が出土した。先の98DSH36・37に引き続く首長層の居宅である可能性もある。

そしてさらに崖線近くの99DSB20・21の付近では東西棟と南北棟がL字形に配置された掘立柱建物群（99DSH11～14、図4-1）がある。建物の南側にはちょうど台地縁辺を示すかのような位置に溝（99DSD05）が掘削される。この溝は開口していた時間は短かったとみられ遺物がほとんど出土しなかった。調査時に詳細な情報を得ていなかったのは要反省であるが、板塀を立てるための掘りかただった可能性が考えられる。この溝はO-10号窯期須恵器が出土する竪穴建物の覆土をことごとく掘り込んでおり、時期的にも最終段階に存在したと判断される。

溝南側の崖線下からは、ミニチュア横瓶・把手付杯・高盤といった、古代集落遺跡の出土遺物としてはやや特殊な部類に入るものが比較的まとまって出土した（図4-3）。また水入遺跡では数少ない墨書のある灰釉陶器碗もある（図4-3）1991）。灰釉陶器はK-90号窯期で、古代集落の遺物としては最も後発のものとなる。この段階まで村落首長層がこの地に居住していたことがうかがえる。

**信仰** 下糟目A地区南端と同様の立地である大屋敷地区南端には竪穴建物群はみられないが、古墳時代中期開削の大溝に隣接する船着き場と掘立柱建物（99ASH35ほか）がつくられた。これらの南側に区画溝（98B2SD02）が掘られる。溝からはO-10号窯期古段階以降の須恵器が出土し鉄鉢形須恵器や長頸瓶が仏具であったと考えられる。また船着き場遺構などからは「公寺」墨書の須恵器が複数出土し、やや時期は下がるが遺跡で唯一の緑釉陶器皿が出土した。掘立柱建物の北側には瓦塔片がまとまって出土したことから、ここに建立されたと思われる（図4-4）。

寺の建立主体は現状では村落首長層が念頭にあるが、「公寺」と名乗る点や周囲に同時期の建物がほとんどみられない点、さらに船着場を伴い外部へのアクセスも良好である点を考慮すると、別の主体があった可能性も考えられる。

**生産と流通** 管状土鍾はこの時期もみられる。ただし形態がきわめて細くなり胎土もこのころから大量生産に移行したと考えられる三河型土師器甕（図4-3）2302）とよく似た精良な粘土

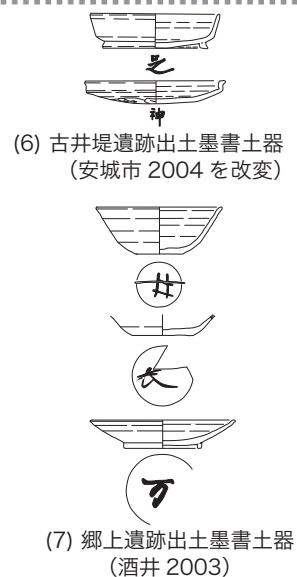
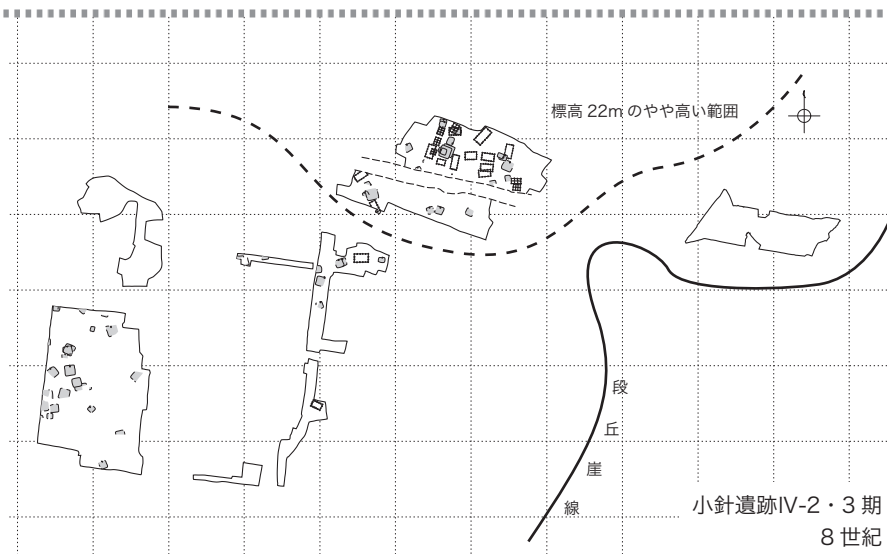
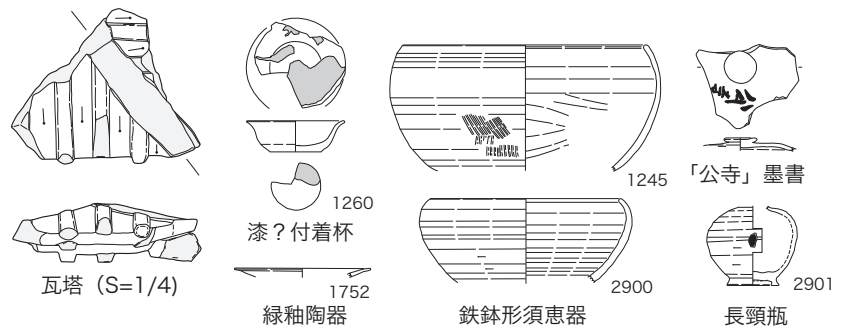
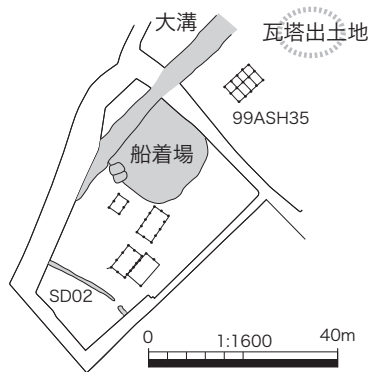
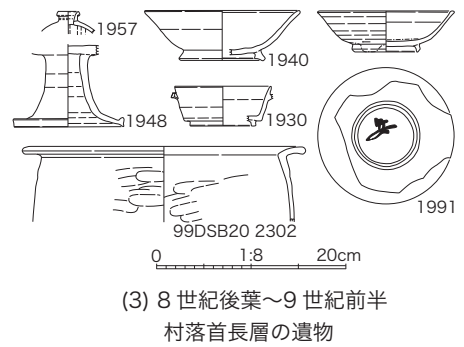
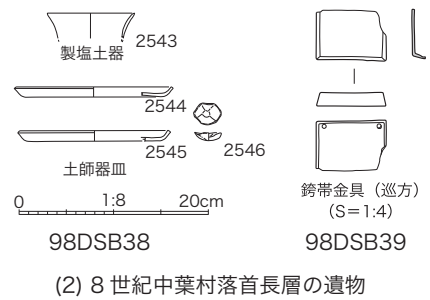
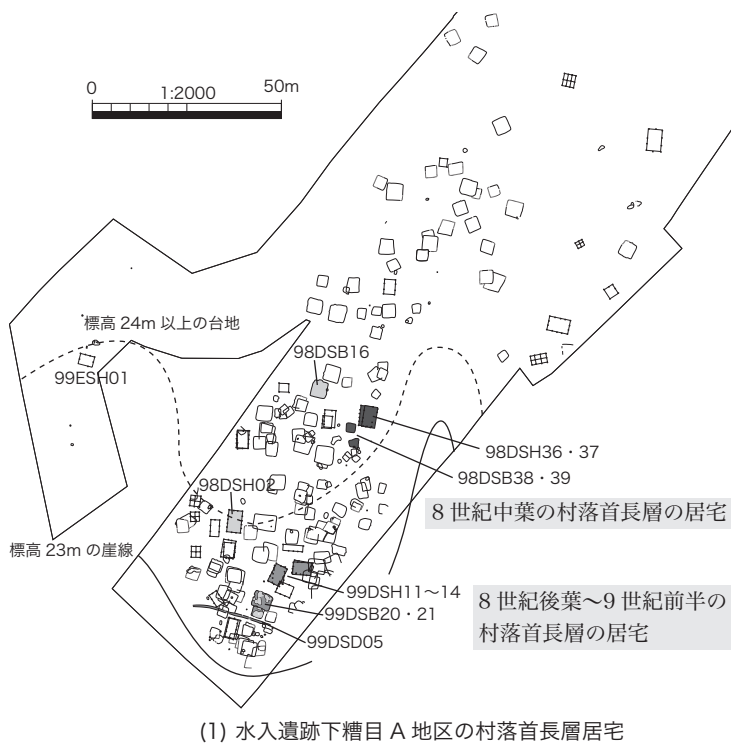


図 4 8 世紀代古代集落の様相

である。その三河型土師器甕は、限定的な環境で採取された粘土と高い規格性で製作されたことが示されており、碧海郡域がその最大候補地とされるが（永井・川井 2005）、水入遺跡出土の同甕はいずれも使用痕跡があるので、ここは生産・搬出地ではなかったようである。この時期の三河型土師器甕は三河国全域から尾張国南部まで流通しており、国衙の関与が大きくなったものと考えられる。すなわち在地首長層の意志を超えたところから生産と流通をコントロールする存在がこの時期になって確立したといえるのである。

## 8. 古代集落の特色

以上、碧海台地上の遺跡を素材に古代集落の変遷を述べてきた。ひじょうに散漫な指摘であり、見落としが多かと思われるが、特に村落首長層の動向に注意して観察することで、集落移動の主体が何であったかを考えてみたい。

水入遺跡では8世紀中葉に明確化した村落首長層であるが、遺物からは8世紀初頭には集落の中で一体となっていた様子がうかがえる。つまり7世紀末に端緒をなす高燥な台地上の開拓は村落首長層の意志が強く働いていたものといえ、地域の構成員が勝手に原野へと分け入ったのではないと考えられる。しかも開拓地での集落建設は場所が限られてくる。結果、建物配置は比較的まとまっていく。

小針遺跡の集落動向や安城市・古井堤遺跡で出土する墨書土器をみると、8世紀中葉段階から既に碧海郡南部では高燥な台地からの撤退が始まり、沖積地上の集落へと中心が移っていた

可能性が考えられる（図4-(6)）。このような遺跡は上位の首長層に関わるためかもしれないし、比較的早い段階から開拓が進んだ結果、台地上が「し尽くした」状況に陥った可能性もあるだろう。

ともあれ結果的に碧海台地上での集落は大幅に減り、沖積地上の集落が増加傾向に転じる。豊田市・郷上遺跡は崖下の沖積地上に展開する古墳時代中期以降の集落であるが、8世紀中葉の断絶時期を経て8世紀後葉～10世紀代に継続する。瓦塔が建立された仏教信仰空間を内包するが、墨書土器には「長」もあり、村落首長層の居住も推測される。また岡崎市・矢作川河床遺跡渡A地点でも墨書土器や緑釉陶器が多数出土しており、沖積地上にさまざまな拠点が発達した時期であったことが判る。

ところで、西三河地域における沖積地上の遺跡については未発見のものもあると見込まれ、台地上での集落減少が単純に地域外への転出という図式にはならない。しかしながら幡豆郡の丘陵地端部や賀茂郡東部山間地域における当該期遺跡数の増加をみると、碧海台地と谷地形の開発からそういった地域の開拓への転換があった可能性は否定しきれないと思う。その場合、大きく本貫地を離れることになるわけで、村落首長層の意志というより郡司層あるいは三河国衙の意志があったものとも考えられる。それは三河型土師器甕の生産・流通が8世紀後葉になって律令制三河国を単位とするようになったこととも関連するのではないだろうか。こうして、古代集落がより時代性を強く示すようになる時期を8世紀後葉以降と見通したところで擱筆したい。

### 引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2010 『愛知県史資料編考古4 古代』 愛知県  
安城市史編集委員会 2004 『新編安城市史5 資料編古代・中世』 安城市  
安城市史編集委員会 2004 『新編安城市史10 資料編考古』 安城市  
岡安雅彦 1996 『御用地遺跡』 安城市教育委員会  
斎藤嘉彦・荒井信貴ほか 1999 『小針遺跡』 岡崎市教育委員会  
酒井俊彦 2003 『郷上遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター  
永井邦仁・川井啓介ほか 2005 『水入遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター  
永井邦仁 2010 「西三河の古代集落」 菊池徹夫編『比較考古学の新天地』 同成社  
松井一明 1995 「古墳時代の掘立柱建物について」『古墳時代の集落 収録集』 静岡県考古学会  
松田 訓ほか 2005 『小針遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター  
森 泰通ほか 2001 『神明遺跡II』 豊田市教育委員会  
森 泰通 2010 「東海地方における古代土器製塩覚え書き 2009-内陸部から出土する製塩土器の意味を考えるために-」『東海土器製塩研究』 考古学フォーラム



## 中世下津宿を考える（その2）

### —自然科学的古環境解析とその評価—

● 奥野絵美\*・蔭山誠一

平成19年度と平成20年度に実施された長野北浦遺跡における発掘調査によりみつかった中世の区画溝や井戸の埋土中より抽出された昆虫化石と植物種実化石を分析し、古環境を考えた。その結果鎌倉時代を中心とする時期（12世紀後半～14世紀）の長野北浦遺跡における調査地点付近の古環境は人間が営む生産域に囲まれた中で、やや人間の営みに伴う人為的廃棄が少数及ぶ居住地に近く、かつ人間による手入れが少ない樹々が生育できる場所と想定した。また平成11年度に報告された下津北山遺跡の自然化学分析の再検討を行い、中世下津宿の古環境の再評価を行った。

### 1. はじめに

長野北浦遺跡は愛知県稲沢市東部に所在し、現在の三宅川左岸の微高地東縁部に立地する集落遺跡であり、平成19年度から平成20年度にかけて愛知県埋蔵文化財センターが行った発掘調査によって、古墳時代前期から古代、鎌倉時代から室町時代前半、江戸時代の大きく3時期に分かれる遺構および遺物が確認された。中世以後は本遺跡の南約100mに位置する真言宗の古刹万徳寺との関係が想定される区画溝などの遺構が確認されている（樋上2008、蔭山2009）。

本分析はこの発掘調査の際に溝や井戸などの埋土から植物種実化石が確認され、調査担当者などにより採取された土壌サンプルより抽出した昆虫化石と植物種実化石を分析し、発掘調査で得られた遺構群の古環境を復元するのが目的である。また長野北浦遺跡の東約500mの地点に所在する下津北山遺跡の発掘調査について報告されている自然科学的分析成果も併せて検討し、中世における尾張国下津宿の景観と遺跡における営みを考えてみたい。

尚、採取した試料は07Ba区の古墳前期の古墳の南西側周溝07Ba区0242SD（地点②）、鎌倉時代を中心とする時期（12世紀後半～14世紀）の区画溝と溝に関連する土坑、水田遺構の5地点07Ba区0152SD（地点①）・08B区081SX（地点④）・08C区北東部東壁中央ST（地

点⑤）・08C区103SD・106ASD・106BSD（地点⑦）、08D区035SD・036SD（地点⑧）、室町時代（14世紀後半～15世紀）の井戸2地点08A区005SE（地点③）・08C区088SE（地点⑥）の計8地点で採取した（図1・図2）。（奥野・蔭山）

### 2. 分析結果

#### （1）分析方法

今回の昆虫化石分析および植物化石分析の作業について述べる。試料は主にコラムサンプリング方法によって採取し（採取地点の概要は図1・図2参照）、ブロック割り法（森1994）を用いて肉眼で昆虫および植物種実化石の検出を行った。さらにその後、細かい化石を検出する為に目の大きさが0.25 μmの篩を用いて1試料につき300gずつ水洗浮遊選別（フローテーション法）にかけた。抽出された化石はクリーニングをおこなったあと、顕微鏡下で一点ずつ同定し、重要なものに関しては写真撮影を行った。（奥野）

#### （2）昆虫化石と植物種実化石の出土傾向

分析の結果得られた昆虫化石と植物種実化石の検出数を表1に記した。また、フローテーション作業後に篩の上に残った土壌の湿潤重量、その土壌中に占める砂・腐食物・炭化物の量の比較をS：砂、P：腐食物、C：炭化物も多産順に表1に記した。

\* 名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室（平成22年3月現在）

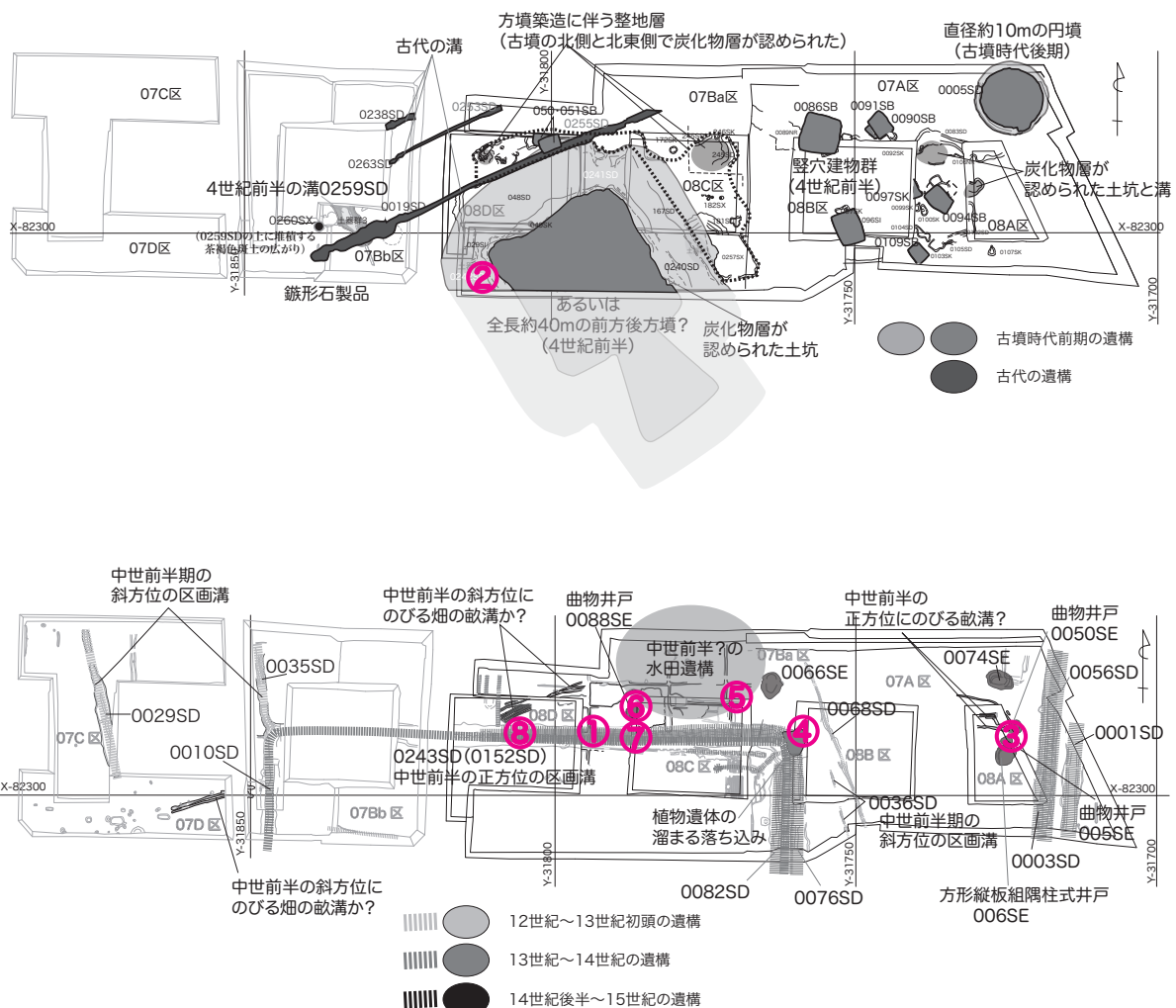


図1 長野北浦遺跡土壌サンプル採取地点（赤丸数字が資料採取地点番号、1：1,250）

その結果、昆虫化石と植物種実化石は、07Ba区・0152SDの6～7層、08B区の081SX、08C区・088SEの4層、08C区の103SD・106SDの3～4層、08D区の036SDの2～4層で多く認められた。これらの試料は、全体として水洗後に腐食物の占める割合が高く、砂の占める割合が少ない資料であった。一方、昆虫化石と植物種実化石が検出されない試料は、全体として水洗後に砂の占める割合が多かった。（奥野）

### （3）昆虫化石分析

分析の結果、長野北浦遺跡の試料からは合計443点の昆虫化石を得た（表2・写真1）。以下、各時代の分析結果を述べる。

#### ・古墳時代

4世紀前半に属する、07Ba区0242SDで分

析を行ったが、昆虫化石を得ることはできなかった。

#### ・鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代を中心とする時期（12世紀後半～14世紀）の区画溝と溝に関連する土坑、水田遺構の07Ba区0152SD（地点①）・08B区081SX（地点④）・08C区北東部東壁中央ST（地点⑤）・08C区103SD・106ASD・106BSD（地点⑦）、08D区035SD・036SD（地点⑧）、室町時代（14世紀後半～15世紀）の井戸08C区088SE（地点⑥）から合計443点の昆虫化石を得た。なお、ここに記した昆虫化石の点数はいずれ節片ないし破片数であり、生息していた昆虫の個体数を示したものではない。

全体の結果をみると、鞘翅目の昆虫としては、ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (294点) が

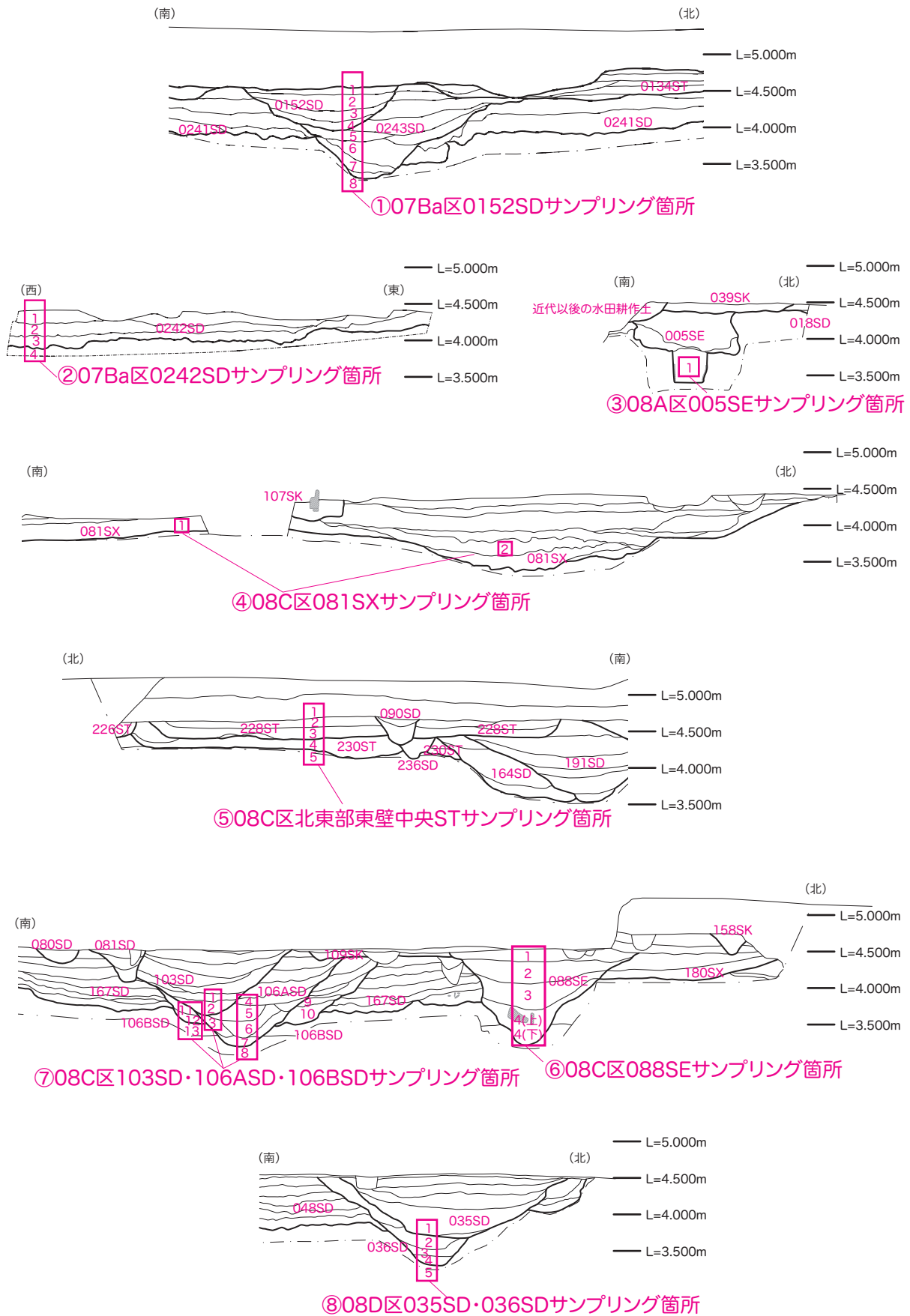


図2 長野北浦遺跡土壌サンプル採取箇所 (1 : 80)



表1 長野北浦遺跡採取土壌サンプルの概要

調査区	資料採取地点	遺構	試料番号	土層注記	試料採取日	湿潤重量 (g)	F量(g)	F後重量(g)	SPC比	昆虫出土数	種子出土数	その他	
07Ba	①	0152SD	1	10YR3/2黒褐色砂質シルト・腐植物ごく微量を含む	070913	2.8	300	20.3	SPc	-	0	12世紀後半～14世紀	
			2	10YR3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量を含む		3.8	300	23.9	SPc	-	5	12世紀後半～14世紀	
			3	10YR3/2黒褐色砂質シルト		5.4	300	18.0	SPc	-	0	12世紀後半～14世紀	
			4	10YR3/2黒褐色シルト・炭化物微量を含む		5.8	300	11.4	SPc	-	0	12世紀後半～14世紀	
			5	10YR3/2黒褐色砂質シルト・炭化物微量を含む		4.3	300	12.7	SPc	-	21	12世紀後半～14世紀	
			6	10YR2/1黒色粘土・炭化物・腐植物含む		6.8	300	2.2	SPc	53	86	12世紀後半～14世紀	
			7	10YR2/1黒色粘土・炭化物多量を含む		6.6	300	12.2	PS	90	122	12世紀後半～14世紀	
			8	10YR4/1褐色砂・シルトブロック含む		4.2	300	17.4	SP	4	0	基盤砂層	
	②	0242SD	1	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	070913	4.4	300	5.1	SP	-	0	古墳時代前期	
			2	2.5Y2/1黒色粘土質シルト		5.4	300	18.1	PS	-	0	古墳時代前期	
			3	2.5Y6/2黄灰色粘土質シルト		5.2	300	45.4	SP	-	0	古墳時代前期	
			4	2.5Y6/2黄灰色細粒砂混じり		4.5	300	9.3	SP	-	0	基盤砂層	
	08A	③	005SE	1	2.5Y4/1黄灰色砂・シルトブロック含む	081003	23.8	300	11.3	SPc	-	1	14世紀後半～15世紀・曲物内埋土
	08B	④	081SX	1	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	080620	13.8	300	16.3	PS	68	46	12世紀後半～13世紀初頭
				2	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト		14.0	300	14.9	SP	18	1	12世紀後半～13世紀初頭
	08C	⑤	北東部 東壁中央 ST	1	10YR4/3鈍い黄褐色シルト質砂	080923	2.8	300	30.6	SPc	-	0	近世以降
2				10YR4/3鈍い黄褐色シルト質砂	3.2		300	44.0	SPc	-	1	12世紀後半～14世紀	
3				10YR4/3鈍い黄褐色砂質シルト・植物質・炭化物微量含む	3.1		300	51.1	SPc	1	0	12世紀後半～14世紀	
4				10YR4/3鈍い黄褐色砂質シルト	3.3		300	15.8	SP	-	0	12世紀後半～14世紀	
5				10YR4/3鈍い黄褐色砂	0.6		300	133.5	PS	-	0	基盤砂層	
⑥		088SE	1	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト	080910	0.7	300	5.5	S	-	0	14世紀後半～15世紀	
			2	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト		0.7	300	20.3	SP	-	0	14世紀後半～15世紀	
			3	2.5Y3/1黒褐色粘土・植物および炭化物少量含む		0.7	300	8.6	SP	-	7	14世紀後半～15世紀	
			4(上)	10YR3/1黒褐色砂まじりシルト・植物および炭化物少量含む		28.0	300	12.3	PcS	14	38	14世紀後半～15世紀・曲物内埋土	
4(下)		10YR3/1黒褐色砂まじりシルト	6.3	300	25.5	PcS	1	20	14世紀後半～15世紀・曲物内埋土				
⑦		103SD	1	2.5Y2/1黒色シルト・植物炭化物微量	080910	3.2	300	5.0	PS	24	1	12世紀後半～14世紀	
			2	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト・炭化物微量含む		3.0	300	11.0	PS	30	9	12世紀後半～14世紀	
		106ASD	3	10YR3/1黒褐色砂まじり粘土・植物含む	080910	2.8	300	16.1	PS	8	12	12世紀後半～14世紀	
			4	10YR3/1黒褐色粘土		3.0	300	2.4	SPc	7	0	12世紀後半～14世紀	
			5	2.5Y2/1黒色粘土・植物含む		3.1	300	9.1	PcS	42	30	12世紀後半～14世紀	
			6	10YR3/1黒褐色シルト質粘土・植物含む		3.0	300	10.3	PcS	8	5	12世紀後半～14世紀	
			7	10YR3/1黒褐色砂質シルト		1.8	300	4.8	PcS	1	0	12世紀後半～14世紀	
			8	10YR3/1黒褐色シルト		2.4	300	5.5	PS	-	0	12世紀後半～14世紀	
		106BSD	9	10YR2/1黒色シルト・植物含む・炭化物ごく微量を含む	080910	1.6	300	13.9	SP	9	0	12世紀後半～14世紀	
			10	10YR2/1黒色シルト・炭化物ごく微量を含む		3.3	300	11.5	PS	1	0	12世紀後半～14世紀	
			11	10YR2/1黒色シルト・炭化物ごく微量を含む		2.4	300	12.3	PcS	5	4	12世紀後半～14世紀	
			12	5Y3/2オリーブ黒砂		1.0	300	5.8	S	5	0	12世紀後半～14世紀	
			13	5Y3/2オリーブ黒細粒砂		2.0	300	8.4	PS	1	0	基盤砂層	
08D		⑧	035SD	1	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量を含む	080716	9.8	300	20.3	SP	14	0	12世紀後半～14世紀
				2	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト・炭化物ごく微量を含む		10.2	300	19.6	PS	19	19	12世紀後半～14世紀
		036SD	3	5Y3/2オリーブ黒・シルト質砂	8.2		300	9.7	PS	3	53	12世紀後半～14世紀	
			4	7.5Y5/2オリーブ黒・砂質シルト	7.2		300	17.3	PS	13	6	12世紀後半～14世紀	
			5	7.5Y5/2オリーブ黒・粘土 砂含む・炭化物微量を含む	7.0		300	4.2	PS	-	0	基盤砂層	

多く認められた。現在における昆虫の生態観察によれば、ヒメコガネは、ダイズやアズキをはじめとしたマメ科植物や、クリ・ブドウなどの果樹を食害する畑作有害昆虫として知られている(湯浅・河田 1952、日本応用動物昆虫学会編 1987)。またヒメコガネは平坦地では台地

や扇状地などに多く発生し、沖積低地では比較的少ないとされ、山間地でも生息密度が低い傾向にあるとされる(桑山 1953)。サクラコガネ属 *Anomala* sp. (17点)として同定された昆虫の切片の多くも、本種に同定されると考えられる。ほかにも植物に依存する昆虫として、広

表2 長野北浦遺跡出土昆虫化石一覧

生態	和名	学名	07Ea			08B			08C				
			0152SD			081SX			東壘ST		103SD		106SD
			6	7	8	1	2	3	4(F)	1	2	3	4
水生	食肉性	オオミズスマシ <i>Dineutus orientalis</i> Modeer		E1									
	食植性	ガムシ科 Hydrophilidae				P3 E1 L3	P1 T1						
		ガムシ <i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky											
地生	食糞性	エンマコガネ属 <i>Onthophagus</i> sp.		P1		T1							E1
		コブマルエンマコガネ <i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse		P1									
	マゴソコガネ属 <i>Aphodius</i> sp.	E1 L1	E3 A1 L3		P1 E2 A1	T1							
地表性	食肉・雑食性	マゴソコガネ <i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)										E1 A1	
		食肉性	エンマムシ科 Histeridae		L1		E2						
		オサムシ科 Carabidae	T1 L1	E3		L1	E1		O1	E1	E8 A5		
		トックリゴミムシ属 <i>Lachnocrepis</i> sp.				E1						H1 E1	
		オオゴミムシ <i>L.esticus magnus</i> (Motschulsky)									P1		
		ゴミムシ科 Harpalidae				E1					E2		
		ミズギワゴミムシ属 <i>Bembidion</i> sp.											
		アオゴミムシ属 <i>Chlaenius</i> sp.		E2									
		ツヤヒラタゴミムシ属 <i>Synuchus</i> sp.				H1 P2 E1							
		ハネカクシ科 Staphylinidae		P2									
陸生	食植性	コガネムシ科 Scarabaeidae									H1 A2		H2
		サクラコガネ属 <i>Anomala</i> sp.		P3 E3 A1	A2	E2 A1							
		ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> Hope											
		ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	P3 E38 T2 L6	P6 E40 A4 L2 O1	H1 E1	H1 P15 E4 T2 A10 L5	P6 E2 T1 L4 O1	E1	S1	E3 L4 L3	H4 P1 E5 L4	E2 L2	H1 E2 L1 O1
		マメコガネ <i>Popillia japonica</i> Newmann											
		カミキリムシ科 Cerambycidae		T2									
		ハムシ科 Chrysomelidae		E1		E4 T1				E2			E1
		クワハムシ <i>Fleutiauxia armata</i> Baly											
		ゾウムシ科 Curculionidae		E2									
		ツノアオカメムシ <i>Pentatoma japonica</i> Distant											
その他	不明甲虫 Coleoptera		T1 L1 O2		A1 L1			E1		L1			
合計			53	90	4	68	18	1	3	20	30	8	7

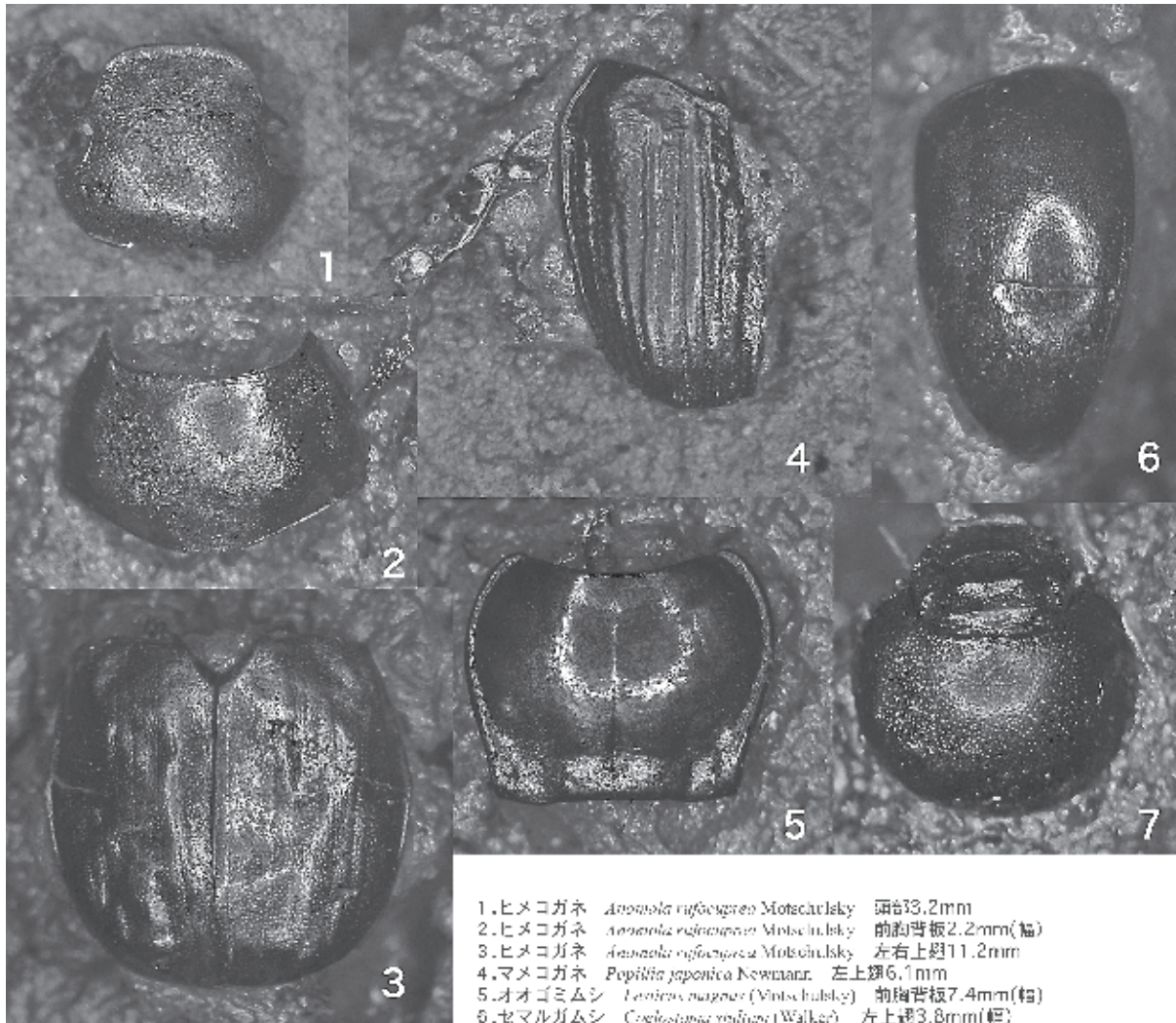
生態	和名	学名	08C						08D			合計		
			106BSD						035SC	036SD				
			5	6	7	9	10	12	1	3	4			
水生	食肉性	オオミズスマシ <i>Dineutus orientalis</i> Modeer										E1	2	
	食植性	ガムシ科 Hydrophilidae												
		ガムシ <i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky					E1							12
地生	食糞性	セマルガムシ <i>Coelostoma stultum</i> (Walker)												
		エンマコガネ属 <i>Onthophagus</i> sp.												
	コブマルエンマコガネ <i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse													
地表性	食肉・雑食性	マゴソコガネ属 <i>Aphodius</i> sp.												
		マゴソコガネ <i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)												
		エンマムシ科 Histeridae		E1										4
陸生	食植性	オサムシ科 Carabidae	A1 L1			A1							L2	
		トックリゴミムシ属 <i>Lachnocrepis</i> sp.		E2										
		オオゴミムシ <i>L.esticus magnus</i> (Motschulsky)												
		ゴミムシ科 Harpalidae												
		ミズギワゴミムシ属 <i>Bembidion</i> sp.					E1							
		アオゴミムシ属 <i>Chlaenius</i> sp.												
		ツヤヒラタゴミムシ属 <i>Synuchus</i> sp.												
		ハネカクシ科 Staphylinidae												
		コガネムシ科 Scarabaeidae		E1										
		サクラコガネ属 <i>Anomala</i> sp.		A1										L1
ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> Hope														
ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky		H2 P2 E18 A2 L11	H1 E3 L4		E3	H1	P4 E1	H1 P2 E7 L1	L1					
マメコガネ <i>Popillia japonica</i> Newmann														
カミキリムシ科 Cerambycidae														
ハムシ科 Chrysomelidae		P1 E1	E1									E1		
クワハムシ <i>Fleutiauxia armata</i> Baly												H2 E1		
ゾウムシ科 Curculionidae		L1												
ツノアオカメムシ <i>Pentatoma japonica</i> Distant														
その他	不明甲虫 Coleoptera											H1 E1	11	
合計			42	13	1	9	1	5	14	3	13	443		

(検出部位凡例)  
H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大顎 S(Scutellum):小楯板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):蛹殻  
E(Elytron):鞘翅 W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿脛節 O(Other):その他

葉樹に集まるサクラコガネ属 *Anomala* sp. (17点) や、花や木の皮などを食べるカミキリムシ科 Cerambycidae (2点) ・広く植物の葉を食べるハムシ科 Chrysomelidae (15点) ・花や果実などを食べるゾウムシ科 Curculionidae (3点) が認められた。調査区南部に位置している区画溝 08D 区 036SD からは、ブドウなどの広葉樹を食害するドウガネブイブイ *Anomala cuprea*、

クワやコウゾの葉を好むクワハムシ *Fleutiauxia armata* (3点)、ダイズやアズキなどに集まるマメコガネ *Popillia japonica* (1点) が認められた。地表性の食肉および雑食性の昆虫については、オサムシ科 Carabidae (30点) や、ハネカクシ科 Staphylinidae (8点) が見つかった。オサムシ科の昆虫としては、ゴミムシ科 Harpalidae (3点) の他に、アオゴミムシ





1.ヒメコガネ *Araucaria nigricornis* Motschulsky 頭長3.2mm  
 2.ヒメコガネ *Araucaria nigricornis* Motschulsky 前胸背板2.2mm(幅)  
 3.ヒメコガネ *Araucaria nigricornis* Motschulsky 左右上翅11.2mm  
 4.マメコガネ *Popillia japonica* Newman 左上翅6.1mm  
 5.オオゴミムシ *Leucis nigrus* (Vitschulsky) 前胸背板7.4mm(幅)  
 6.セマルガムシ *Coelostoma stultum* (Walker) 左上翅3.8mm(幅)  
 7.コブマルエンマコガネ *Onthophagus strigatus* Waterhouse 頭長4.1mm(幅)

写真1 長野北浦遺跡出土昆虫化石顕微鏡写真

属 *Chlaenius* sp. (3点) やトックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp. 属 (5点) が認められた。また、水田や池などの止水域に生息するガムシ *Hydrophilus acuminatus* (1点) や、セマルガムシ *Coelostoma stultum* (2点) のほか、オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (2点) も認められた。人や獣の糞に集まる昆虫は、マグソコガネ属 (24点) ・マグソコガネ *Aphodius rectus* (3点) ・エンマコガネ属 *Onthophagus* sp. (3点) が認められた。また、腐った動物質や糞に集まるエンマムシ科 Histeridae (4点) がみつかった。

また、カメムシ目 Hemiptera の昆虫として、カエデなどの樹木に集まるツノアオカメムシ *Pentatoma japonica* (2点) がみつかった。(奥野)

#### (4) 植物種実化石

土壌サンプルからの抽出作業の結果、合計533点の植物種実化石を得た(表3・写真2)。以下、各時代の分析結果を述べる。

##### ・古墳時代

4世紀前半に属する方墳の周溝にあたる07Ba区SD242SDから採取した土壌からは、種実が検出されなかった。

##### ・鎌倉時代から室町時代

鎌倉時代を中心とする時期(12世紀後半～14世紀)の区画溝と溝に関連する土坑、水田遺構の5地点07Ba区0152SD(地点①)・08B区081SX(地点④)・08C区北東部東壁中央ST(地点⑤)・08C区103SD・106ASD・106BSD(地点⑦)、08D区035SD・036SD(地



点⑧)、室町時代(14世紀後半～15世紀)の井戸2地点08A区005SE(地点③)・08C区088SE(地点⑥)から533点の植物種実化石を得た。同定ができた植物種実化石の形態別出現率は、木本植物が4種で66.4%(354点)、草本植物が10種で31.0%(165点)で、不明の種実が2.6%(14点)であった。種実化石の点数では木本植物が卓越するが、種類数では草本植物の方が多い。生育環境別では水辺に生えるのはヒシ種皮片(1点)のみであり、その他は乾燥地を好む植物である。なお、ここに記した種実化石の点数は二分の一の残存のもの、破片の状態のものを含むので、植生・落下した植物の種実の個体数を示すものとはいえない。

出土した種実化石の主体を占める木本植物のエゴノキとセンダンと比較的日当りの良い乾燥地形に植生する低木や小高木で、種実が1点のみ確認できたサンショウも同様な性格をもつものである。これらの木本植物は長野北浦遺跡の区画溝の内側付近に存在した樹々の一つである可能性が高い。草本植物のエビヅルやウリ類Aとウリ類Bなどはつる性植物であるので、日当りの良い溝際にこれら木本植物に絡んで生えていた可能性がある。しかし、08B区036SDの1層からは、エビヅルの種実化石がエゴノキやセンダンとともに、人為的関与(廃棄)の可能性が高いオオムギの炭化種実と供伴して出土していることを重視すると、エビヅルは食用に供された可能性もある。同様に08C区088SEの4層上部から出土したモモの核は、エゴノキの種実と供伴して出土していることから、人為的関与(廃棄)の高いものと考えておきたい。この088SEからは、フローテーションによりザクロソウとスベリヒユの種実化石を多数検出することができた。これらは乾燥地形に植生する草本植物であるので、区画溝が埋められた後、井戸が掘削された屋敷地になる室町時代には、エゴノキが屋敷地内に存在した可能性はあるが、より開けた環境になった可能性が高い。一方で鎌倉時代を中心に営まれる区画溝08C区106ASDの5層から先に述べたヒシの種皮破片が出土しており、溝の中に水が溜っていた可能性が指摘できるものである。ま

た、鎌倉時代の区画溝に伴う溝の北側に確認されている水田遺構の堆積層(08C区北東部東壁中央ST)の各層からは植物種実化石は検出できなかった。(蔭山)

### 3. 考察

#### (1) 長野北浦遺跡の古環境

長野北浦遺跡は中世における集落遺跡であり、何らかの人為的影響が自然環境に及ぼされた人里環境である。今回の分析の結果得られた昆虫化石群の中で鎌倉時代を中心とする時期(12世紀後半～14世紀)の区画溝などに伴う資料では、ヒメコガネをはじめ、ドウガネブイブイなどコガネムシ科に属する陸生の食植性昆虫が多産しており、他にも陸上の植物上で生息する昆虫として、ハムシ科やゾウムシ科、カミキリムシ科やカメムシ目のツノアオカメムシといった昆虫化石も確認できる。これらの昆虫化石の合計は346点となり、昆虫化石全体の75.7%を占める。現在における昆虫の生態観察によると、ヒメコガネはマメ科植物の葉を好んで食べ、ドウガネブイブイは果樹の葉を好んで食べる畑作害虫としてよく知られている。また水生のガムシやセマルガムシが14点(3.2%)確認された。これらは水田に関係する昆虫とも考えられるが、今回の分析資料中には現在の稲作害虫とされるものは認められなかった。

次に地表を徘徊する昆虫については、合計で90点が認められた。多くがオサムシ科とハネカクシ科と同定できたが、本科に所属する昆虫は食性および生息環境が非常に多種多様であるため、これらの出土から詳細な古環境について述べる事は難しい。オサムシ科の昆虫の中には、ツヤヒラタゴミムシ属などの湿潤地に多い昆虫が合計8点含まれた。また、マグソコガネ属やコブマルエンマコガネといった昆虫も38点(8.3%)認められており、これらの昆虫は人や動物の糞に好んで集まる習性が知られている。この種の昆虫は、現在の昆虫の生態においては、人為的影響の強い居住地付近の空間で生息することが観察されるものである。

植物種実化石については、鎌倉時代を中心とする時期(12世紀後半～14世紀)の試料か

表3 長野北浦遺跡出土植物化石一覧

調査区	資料採取地点	遺構	試料番号	種子出土数	エゴノキ	センダン	モモ	サンショウ	ヒシ	エビツル	ウリ類A	ウリ類B	オオムギ	その他			
07Ba	①	0152SD	1	0													
			2	5	破片5												
			3	0													
			4	0													
			5	21	破片21												
			6	86	完形22,1/2 14,破片49												不明1
			7	122	完形58,1/2 22,破片36							完形4					不明2
			8	0													
08A	③	005SE	1	1											不明1		
			2	0													
			3	0													
			4	0													
08B	④	081SX	1	46		完形2,破片18				完形1,破片9	完形3,破片9						
			2	1								完形1				不明1	
08C	⑤	北東部 東壁中央 ST	1	0													
			2	1												不明1	
			3	0													
			4	0													
			5	0													
	⑥	088SE	1	0													
			2	0													
			3	7												ザクロソウ5,カヤツリグサ科?2,不明1	
			4(上)	38	完形1,破片2		完形1,1/23							炭化種実12	スベリヒユ10,ザクロソウ9,不明3		
	4(下)	20										炭化種実1	スベリヒユ6,ザクロソウ12,不明1				
	⑦	103SD	1	1	完形1												
			2	9							完形2,破片5					不明2	
		106ASD	3	12	完形1	1/2 3,破片1					完形5,1/22						
			4	0													
			5	30		破片4		完形1	破片1	完形3,破片1	破片4	破片1				カナムグラ?完形5,破片3	
			6	5		完形1,1/21,破片3											
7			0														
8			0														
106BSD		9	0														
		10	0														
		11	4		破片3					完形1							
基盤層	0																
08D	⑧	035SD	1	0													
			2	19	完形1	完形1,破片1 1/2 3,破片22				完形9,破片4 完形4,破片7	完形5,破片12		炭化種実2	不明1			
			3	53													
			4	6		完形2					完形2		完形1			スズメウリ?破片1	
			5	0													

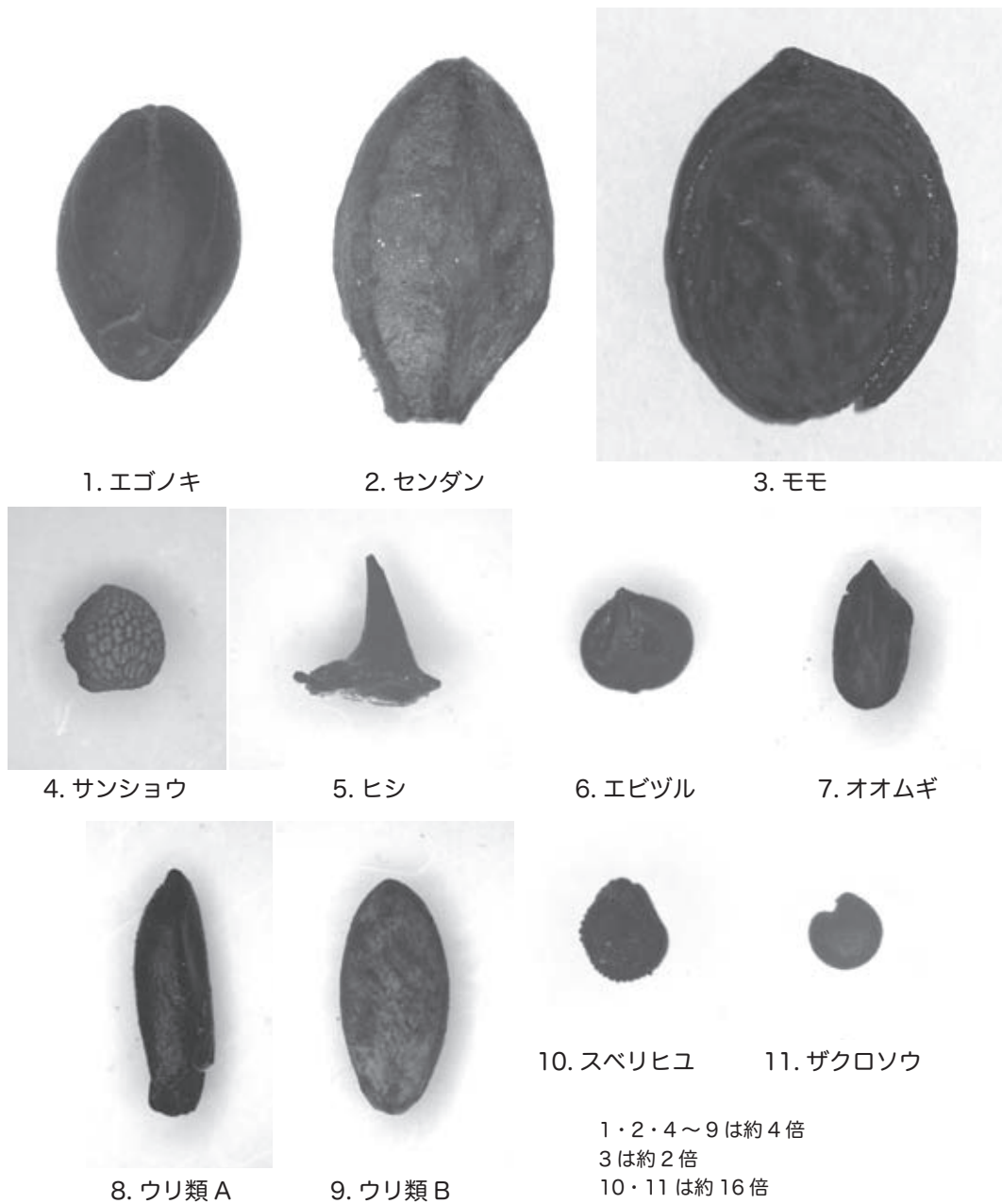


写真2 長野北浦遺跡出土植物種実化石写真

ら確認できたエゴノキやセンダン、サンショウは、現在では放棄された畑地、山火事跡地、崩壊地などに先駆的植物として侵入し、よく繁茂する性質をもつものである。つる性植物であるエビヅルなどの種実の出土からは、これらの樹々に絡まって生育する草本植物の存在が想定され、遺跡における資料採取地周辺が、林域縁辺の比較的日当りの良い開けた空間であったことが考えられる。また、モモの核やオオムギの炭化種実など人為的関与（廃棄）の可能性が高

い植物種実化石が得られており、同時にこれらが出土した区画溝付近まで人為的廃棄による行為が及んだことが推定される。

以上の分析によると、昆虫化石分析による陸生の食植性昆虫が主体を占める状況からは長野北浦遺跡周辺は一定の木本植物や草本植物が生育していた環境が考えられ、一部の昆虫化石からは果樹や栽培植物の存在した可能性も捨て難い。このような状況は植物種実化石による植生の想定とも対応しており、昆虫化石分析におけ



る地表性昆虫とされる生息環境を指標とする昆虫群が一定量存在する結果とも対応するのかも知れない。よって鎌倉時代を中心とする時期（12世紀後半～14世紀）の長野北浦遺跡における調査地点付近の昆虫化石分析と植物種実化石の分析成果は比較的整合する分析結果と考えられ、復元される古環境は人間が営む生産域に囲まれた中で、やや人間の営みに伴う人為的廃棄が少数及ぶ居住地に近く、かつ人間による手入れが少ない樹々が生育できる場所と結論できる。

## （2）下津北山遺跡の古環境

鶴飼他（鶴飼他 2009）によると、中世の下津地域は、旧三宅川と旧青木川の合流する「下津河」と中世東海道の交差する交通の要所に位置し、宿の機能をもつ守護所として繁栄していたと考えられている。この旧地形像から推定すると、下津河を挟んで東に下津北山遺跡、西に長野北浦遺跡が存在していたと考えられる。下津北山遺跡では、12世紀後半に寺院の性格をもつ方形区画が設置され、13世紀前半には方形屋敷地が出現し、以後15世紀まで遺構・遺物が確認されている（早野編 2000）。

12世紀後半に属する97区SD08における微化石分析（鬼頭・堀木・尾崎 2000）では、花粉については木本花粉が多く、うちわけをみるとカバノキ科ハンノキ属についてブナ科ブナ属、ブナ科コナラ属、ブナ科コナラ属アカガシ亜属、ブナ科シノキ属、ブナ科クリ属などが多く認められている。植物珪酸体については、SD08下層の資料より多くの植物珪酸体が確認され、タケ亜科が多く認められたほか、ヨシ属よりウシクサ属が多産する傾向にあり、下津北山遺跡周辺にタケ亜科の植物が繁茂していたことが考えられる。同様に珪藻化石については、97区SD08の溝中に貧塩不定性種・流水性珪藻が多く、比較的流れのある環境であったと推定できる。これらの成果から、河畔や海地帯に多いハンノキ属の花粉の出現率が高いことや、アカガシ亜属をはじめとするブナ科の花粉が比較的多く確認されていることから、下津北山遺跡周辺の「下津河」の河畔側には、ハンノキ属を主体とする河畔林が繁茂しており、同時に遺跡の隣接する別地点には一定の林域が存在して

いた可能性が推定できる。

次に昆虫化石分析（森 2000）については、12世紀後半～13世紀初頭に属する96区SD07で32点の昆虫化石が得られている。出土点数は少ないが、陸生昆虫のヒメコガネ（17点）をはじめ、マメコガネ（1点）などの現在畑作害虫の指標となる昆虫や、水田にも多く認められるガムシ（1点）など、いずれも人為的な介入をうけた環境に多い昆虫化石が認められている。また、乾燥した攪乱地表面に多いサビキコリや、大型の地表性歩行虫であるオオゴミムシ、同じく地表面に多いオサムシ科やハネカクシ科も認められていることから、遺跡周辺の植生は少なく、人間の植栽した畑作物や果樹などがわずかに繁茂するのみであったと推定されている。

植物種実化石分析（蔭山 2000）については、12世紀後半～13世紀初頭に属する溝96区SD07の資料から、モモ核やクリ堅果皮、ウリ類種子、オオムギ種実などの栽培植物やオニグルミ堅果、キカラスウリ類似種子などの半栽培植物、タデ科種子、センダン核のような自然に生息した可能性の高い植物種実化石が見つかっており、96区SD07には溝に伴う湿地性植物の生育とともに人間の営みに伴う人為的廃棄物が及ぶものである。また96区SD07の南5mに位置する12世紀後半の96区SX01では、多数のタデ科種子とともに少数のカヤツリグサ科種子、スベリヒユ種子、ザクロソウ種子、コムギ？炭化種実、ブドウ科種子が認められた。湿地性を示すタデ科種子やカヤツリグサ科種子のような草本植物が多産する状況はあるものの、乾燥地を好んで生育するスベリヒユ種子やザクロソウ種子も伴出していること、人為的廃棄の可能性が高い炭化種実も少数認められることから、96区SD07に伴う区画の北側地点は人間の営みに伴う人為的廃棄も及び、かつやや湿った場所である古環境が推定できる。モモ核については、96区SK18・96区SD21・97区SD08などの同時期とされる遺構から多数確認されており、下津北山遺跡から出土した植物種実化石を特徴づけるものであり、遺跡においてみられた営みと関連するのかも知れない。

以上の分析結果をみると、12世紀後半～13

世紀初頭の下津北山遺跡における古環境は植物種実化石と昆虫化石の分析から想定された古環境は、昆虫化石において食植性昆虫が多産する状況からは植物の繁茂する環境が想定されるが、植物種実化石において人為的影響の強いモモ核を除くと草本植物の卓越した植生が想定され、昆虫化石分析において地表性昆虫の存在から、一部の果樹などを除くと、植生の少ない環境が指摘されている点を考慮すると、比較的共通する要素が多い様相を想定しているように思われる。一方で花粉や植物珪酸体などの微化石分析において想定されるハンノキ属を主体とする河畔林の存在やブナ科植物をはじめとする林域が想定される分析結果とは、対応していない。

### (3) 自然科学分析からみた古環境の二相

ではこの下津北山遺跡にみられた古環境の異なる二相はいかなる要因によるものであろうか。遺跡の土壌中に残る生物や植物の化石は、気流や水流、昆虫や動物などによる媒体により運ばれた結果である。したがって、一つは花粉や昆虫など、生物の種類によって化石自体の粒の大きさが異なっており、飛散や死後の移動などの範囲が異なる可能性があること、もう一つは化石となる生物・植物の元となる生体の活動の違いに起因することが考えられる。

前者の要因の理解への糸口は、抽出された花粉化石と、植物種実化石の対応関係を分析することである。花粉分析で多産したハンノキ属やブナ科のブナ属、コナラ属、シイノキ属は、種実化石では認められていない。対応関係にあるのは、バラ科ヤマモモ属やクルミ属、ブナ科クリ属、センダン科センダン属、イネ科、カヤツリグサ科などの花粉であり、モモやクリ、クルミ、センダン、カヤツリグサ科などの種実と対応している。このように花粉化石と植物種実化石の両方が確認できるものは、遺跡の調査地点付近にその植物が生育していた可能性があるが、同時期の他の遺構において多産したモモ核の出土頻度は、花粉分析の結果と必ずしも一致していない。これは、モモが果樹として付近に存在していたとしても、溝の試料から多量に出土したモモの核は、多くが他所から人為によって運ばれ、利用・廃棄されたものであった可能

性を示している。モモ以外にも両化石の出土が対応しない植物では、花粉化石のみの検出であれば、花粉化石の大きさから遺跡の調査地点の外側からの飛来がまず想定されるが、植物種実化石の形態が小さくて皮膜などが残りにくい形状のものや、反対に花粉化石でも花粉を多産しない植物であれば、遺跡の土壌中には残存しにくい。つまり、植物の種によっては花粉化石と植物種実化石の残存状況も含めて偶然性が多分に含まれるが、花粉化石において多産したブナ科植物の種実化石は種実の比較的大きく木質部の多い果皮の形状やブナ科植物に伴う他の木本植物の種実も確認されていない点を考慮すると、遺跡に残存しなかったのは後者の要因によるもので、特に当時の植生を反映している可能性が高いことになる。ハンノキ属の木本種実が遺跡で確認されなかったことは、湿地性の環境に生育するカヤツリグサ科やタデ科の種実が出土していることから、ハンノキ属の種実の形状などによる影響とブナ科植物と同様に後者の要因による二つの要因が考えられる。

以上の花粉化石をはじめとする微化石の埋没傾向を踏まえた上で、私どもが分析した中世における長野北浦遺跡と下津北山遺跡の昆虫化石と植物種実化石の分析成果についても、同様な特徴を考える必要がある。前者の要因である生物の種類によって化石自体の大きさや飛散や死後の移動などの範囲による違いについては、植物種実化石分析の成果では、人為的利用による廃棄に伴う遺跡土壌への埋没が想定されるものが比較的にみられること、植物種実化石の出土状況が人為的影響の度合いや植物自体がもつ生育の個別的特徴から古環境の復元が可能であることを示し、植物の生育した地点からの飛散や死後の移動などの距離が短い、植物の人為的利用した地点とその後の廃棄されて埋没した地点の距離が短い可能性が高く、遺跡の調査地点付近の植生を反映する可能性が高いものと考えられる。昆虫化石分析の成果では、遺跡における植物の植生を直接示すものではないが、植物化石分析の成果とも共通する点が多くみられることは、昆虫が生息環境に強く影響される点と昆虫化石の大きさを考慮すると死後の土壌への埋没過程が植物種実と類似することが想定され

る。よって後者の要因である化石となる生体の活動の違いも同時に含まれることとなる。(奥野・蔭山)

#### 4. 結び

以上、先に分析した昆虫化石と植物種実化石からみた長野北浦遺跡の古環境は遺跡の調査地点付近の中世の状況を反映しているものであり、下津北山遺跡における古環境分析成果と補完的部分を有する。今後下津地域の古環境と歴史について、他の地点における調査・解析を通じて、地理的環境と人間活動による営みの関係をより追求していくことが必要であろう。(奥野・蔭山)

#### 引用・参考文献

- 鶴飼雅広・蔭山誠一・鬼頭 剛・鈴木正貫・松田 訓 2009 「中世下津宿を考える」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要 第10号』財団法人愛知教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
- 蔭山誠一 2000 「下津北山遺跡出土の植物遺体」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第88集 下津北山遺跡』財団法人愛知教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 蔭山誠一 2009 「長野北浦遺跡」『平成20年度愛知県埋蔵文化財センター年報』財団法人愛知教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美 2000 「下津北山遺跡における古環境解析」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第88集 下津北山遺跡』財団法人愛知教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 中山至大・井乃口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』東北大学出版会
- 日本応用動物学会編 1987 「農林有害動物・昆虫名鑑」日本植物防疫協会
- 早野浩二編 2000 「下津北山遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第88集』財団法人愛知教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 樋上 昇 2008 「長野北浦遺跡」『平成19年度愛知県埋蔵文化財センター年報』財団法人愛知教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
- 森 勇一 1994 「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究 vol.33』日本第四紀学会
- 森 勇一 1999 「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境復元」『国立歴史民俗博物館研究報告 81』国立歴史民俗博物館
- 森 勇一 2000 「愛知県下津北山遺跡から産出した昆虫化石の語るもの」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第88集 下津北山遺跡』財団法人愛知教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター

#### 謝辞

本分析にあたり、鬼頭剛氏と鶴飼雅広氏には多くのご教示を頂いた。記して感謝の意としたい。

本論で扱った分析は、平成20年度6月に若くして亡くなられた大森俊輔君と共同で行う予定であったものである。本論を彼に捧げ、感謝の気持ちを記すとともに、心よりご冥福をお祈りします。



# 稲沢市一色青海遺跡出土の 絵画土器について

樋上 昇

本稿では、平成21年度に発掘調査をおこなった稲沢市一色青海遺跡から出土した、鹿の絵を描いた絵画土器を紹介する。併せて、これまで愛知県内から出土している弥生～古墳時代に属する、鹿の絵を描いた絵画資料についても簡単に触れることとした。

## 一色青海遺跡の概要

一色青海遺跡は愛知県の北西部、稲沢市のほぼ中央に位置し、東は三宅川、西は日光川にはさまれた沖積低地に立地している。

おもに日光川上流浄化センターの施設建設にともなって、平成3年度以来、愛知県埋蔵文化財センターが断続的に発掘調査をおこなっており、平成21年度までに合計36,124㎡を調査している。

遺跡の所属時期は、弥生時代と鎌倉～戦国時代の2時期に大きく分けられる。

弥生時代の遺構は中期後葉（凹線紋期）に限定され、それ以前、それ以降ともに人が居住した形跡は全くみられない。ただし、一色青海遺跡の東には野口北出遺跡（弥生前～中期中葉）、南には須ヶ谷遺跡（縄紋晩期末～弥生中期中葉）があり、これらの集落の居住者が一色青海遺跡を成立させたことは疑いない。

地形的には、北西から南東に流れる河道によって形成された、東西約300m、南北約70mのU字形を呈する幅の狭い微高地上に展開しており、おおむね東に方形周溝墓群、西に居住域が広がっている。

居住域では、これまでの調査で約270棟の竪穴建物、約30棟の掘立柱建物を確認している。このうち、集落中枢部とみられる平成15年度調査区（03A・B区）と、平成21年度調査区（09A・B区）において、竪穴建物約170棟と掘立柱建物約20棟を確認しており、特に長辺が10mを超える大型竪穴建物は、03B区と09A区に集中している（図1）。多くの建物は、

地形に制約されていることもあり、主軸の方位がきれいに揃う点の特徴である。

竪穴建物は比較的同じ箇所での建て替えが多く、重複の激しい箇所では5～6回もの建て替え痕跡が認められる。未調査箇所を考慮すれば、竪穴建物の数は累計で300棟を超えることは間違いない。これを単純に最大重複数の6で割ると50棟という数字を導き出すことができる。ただ、直接の重複関係をもたなくとも、同時併存が困難なほど近接した竪穴建物も存在することを考慮すれば、少なくとも40棟前後の竪穴建物が同時期に存在していた可能性が高い。

また、平成15年度の調査（03A区）で確認した掘立柱建物SB017は、南北（桁行）17.6m、東西（梁間）5.1m、床面積89.8㎡を測る巨大なもので、弥生中期後葉としては、東日本で最大級の掘立柱建物である。

竪穴建物に較べて、方形周溝墓の数が格段に少なく、かつ、墳丘の一辺が15mを超える大型周溝墓は皆無である。このように、居住域と墓域の規模がきわめてアンバランスなことも、本遺跡の特徴といえる。

集落の北を流れる河道（400NR）は、集落成立後の比較的早い時期に埋没する。その後は河道の痕跡に沿って、幅約5m、深さ約1.5mの大溝を掘削している。この大溝も2条の重複が認められる（200SD・600SD）。これら河道・大溝からは、木製品・カゴ類が多数出土している。木製品には、二連の直柄平鍬を始めとする未成品のほか、斧柄などがあることから、これらを利用して木製品を製作していたことがわかっている。

方形周溝墓群

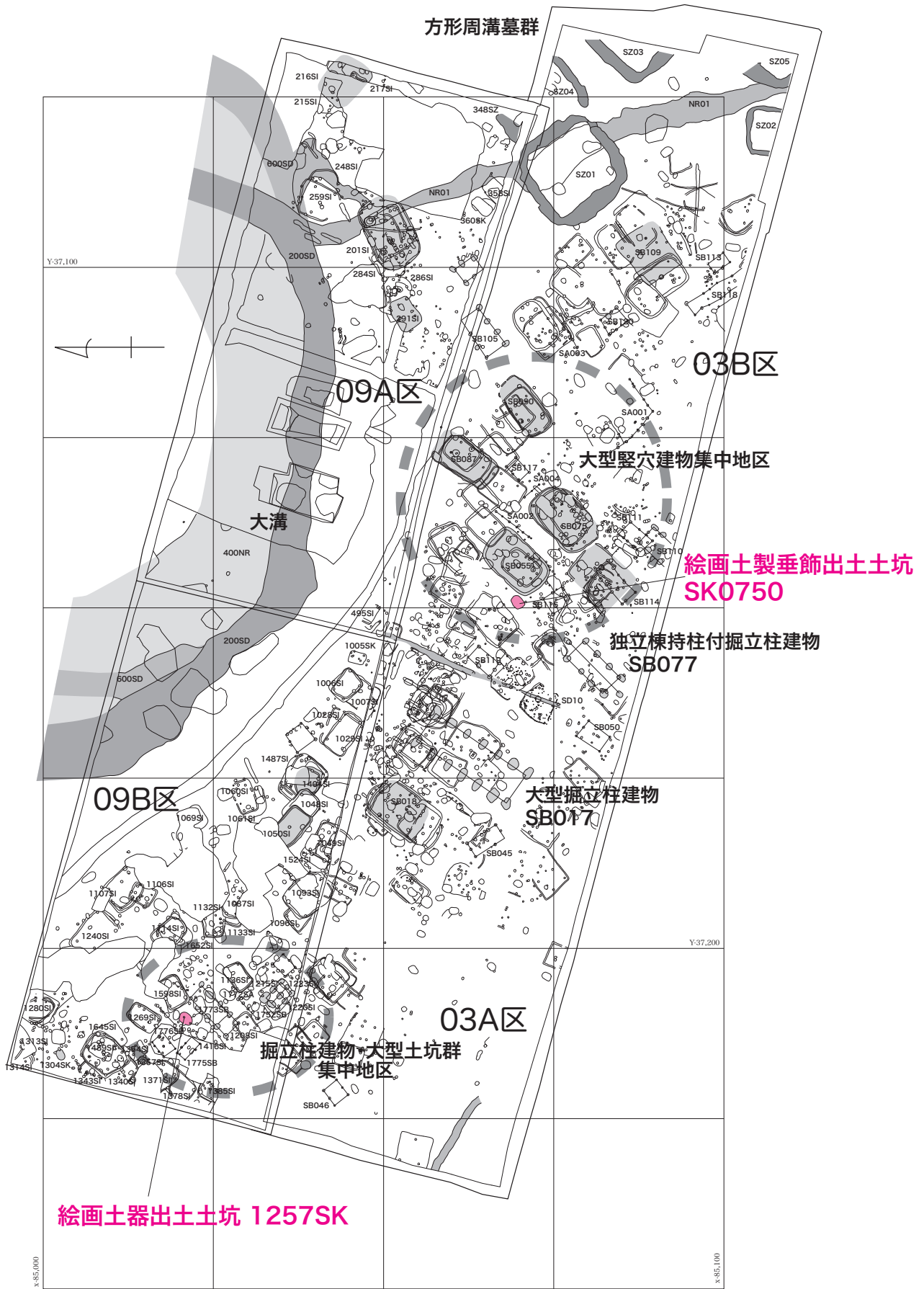


图1 一色青海遺跡遺構図 (S=1:800)

## 鹿の絵の土器

本稿にて紹介する鹿の絵を描いた絵画土器は、09B区の大規模土坑1257SKから出土した。

この1257SK周辺には、掘立柱建物5棟と大規模土坑群約20基が集中している。

うち、掘立柱建物1773SBと1752SBは、柵列1772SAとともに一定の規格で建てられていることから、これらは同時併存していた可能性が高い。このうち、2×2間の総柱建物1752SBは、重複する4棟の竪穴建物が廃絶したのちに築かれていることから、これら2棟の掘立柱建物は、集落存続期間のなかでも後半に属することは確実である。また、4×1間の掘立柱建物1773SBは、北西隅から2番目の柱穴が、1257SKと同規模の大規模土坑に切られている。これらのことから、1257SKは、間接的ではあるが、これら掘立柱建物群よりも新しく、集落存続期間のうちでも最終段階に近い時期に掘削されたと考えている。

鹿の絵は、図2・3に示したように、筒形土器と呼ばれる砲弾形を呈する土器の外面に描か

れていた。口縁部と底部は欠損しているが、図4の最上部に示した朝日遺跡出土土器のように、口縁部は斜めに切り落としたような形状であった可能性が高い。底部はおそらく丸底とおもわれる。外面調整は縦方向の細かなナデで、内面は縦方向のヘラケズリののち、ナデをほどこしている。なお、筒形土器は、朝日遺跡からは比較的多く出土しているが、一色青海遺跡からの出土は、これが初例である。

鹿の絵は体部外面に、縦方向に6頭、頭部を右にして描かれている。土器焼成前に、まず、浅く線刻で下書きをおこない、その上から、同じく焼成前に、ベンガラを用いて面的に塗っている。胴部より尻尾にかけては、器面の剥落が著しく、遺存状況は悪いが、上の2頭に関しては、線刻が比較的よく残っている(図3)。

線刻は、通常の線刻土器(図4)よりもかなり浅いことから、当初からベンガラを塗ることを想定した、あくまでも下書きとして描かれていたようである。頭部は耳あるいは角をV字に描いたのち、鼻先を描いている。頸部は1本線、胴部は2本線で表現し、胴部を描いたのちに、足を描いている。

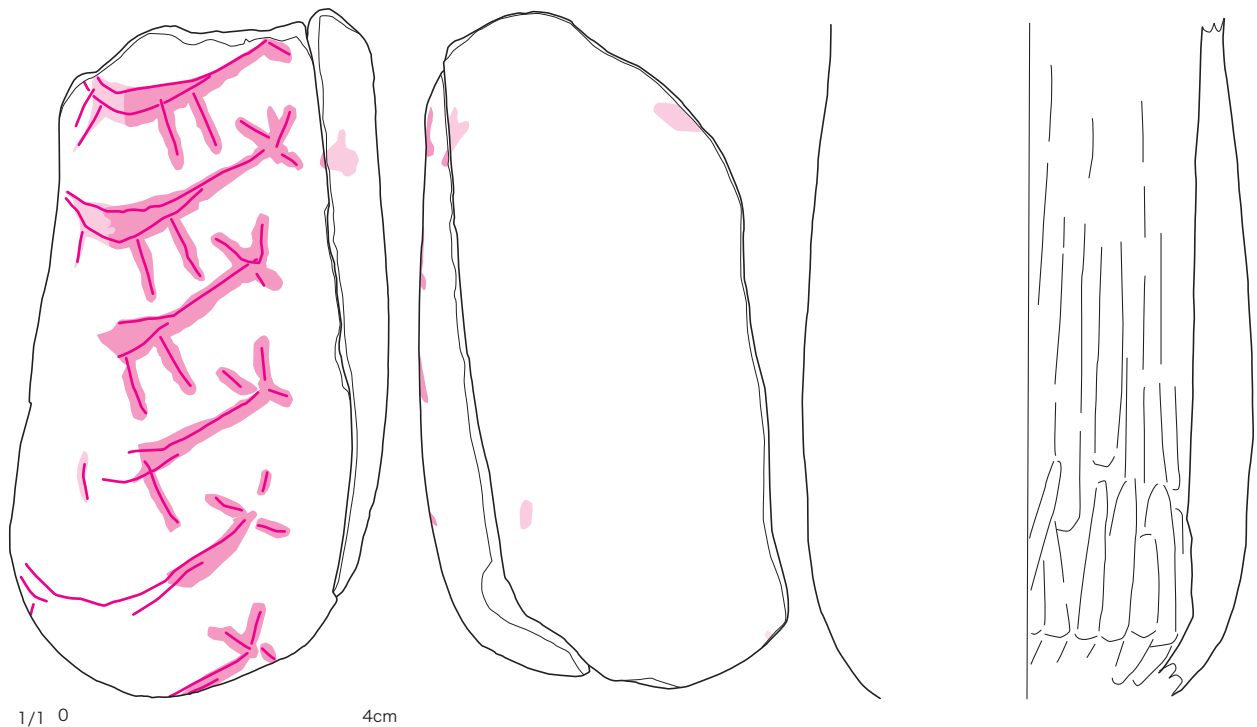


図2 一色青海遺跡出土の絵画土器 (S=1:1)





図3 一色青海遺跡出土の絵画土器写真

ベンガラを塗った工具は不明だが、面的にある程度の幅をもって描かれていることから、筆状のものを使用していた可能性が高い。

右側の破片にも若干ベンガラが付着しているが、鹿の絵状に復元することは困難であり、かつ、線刻が遺存しないことから、絵として描いたものではなく、偶然付着したのであろう。

### まとめにかえて

橋本裕行氏によると、弥生時代の絵画土器はこれまで600例ほどあり、そのうちの4割が鹿の絵とのことである。ただし、鹿に限らず、これまで出土している絵画土器のほとんどは、線刻によるものであり、線刻の上に顔料を塗ったものは、福岡県朝倉郡夜須町（現・筑前町）の大木遺跡から出土した92号甕棺（弥生中期前葉）の口縁部付近に描かれた、線刻の鹿に黒色物質を塗った1例のみである（図5、夜須

町教育委員会1997）。

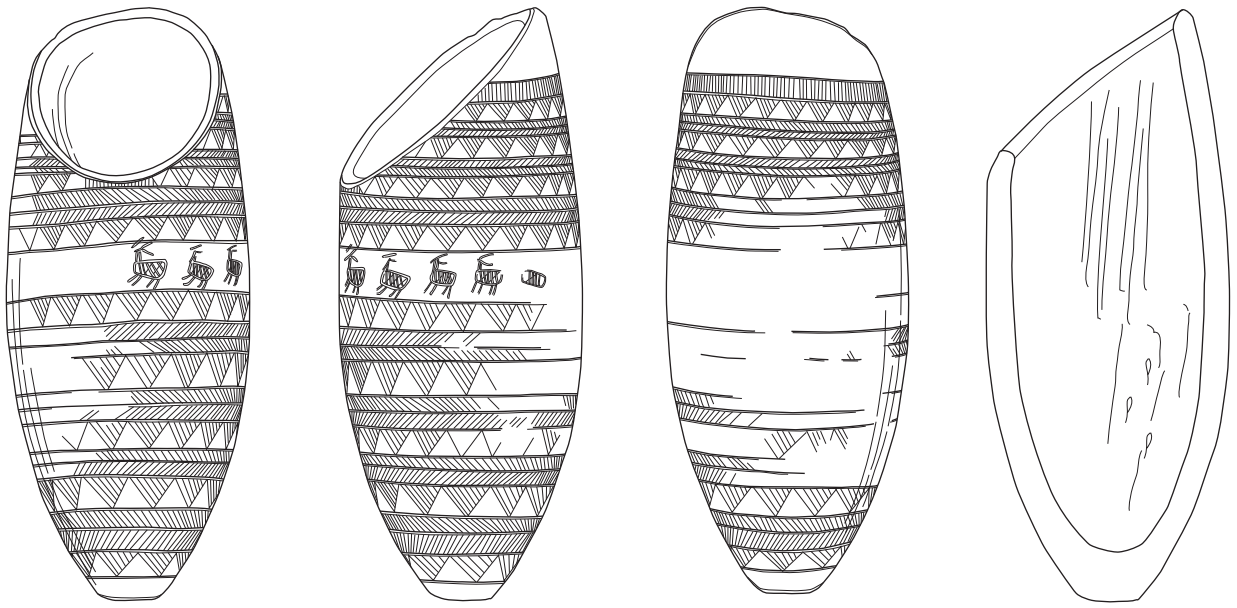
ゆえに、今回の一色青海遺跡出土例は、顔料による弥生時代の絵画土器としては2例目であり、ベンガラを用いたものとしては、全国で初例となる（深澤芳樹・橋本裕行氏のご教示）。

愛知県内では、これまで鹿の絵画土器・土製品は図4にあげた7例（本例で8例目）が知られている。このうち、朝日遺跡VIIIの報告書に掲載されたもの（図4上）は、筒形土器という点で、今回の出土例と共通している（愛知県埋蔵文化財センター2009）。

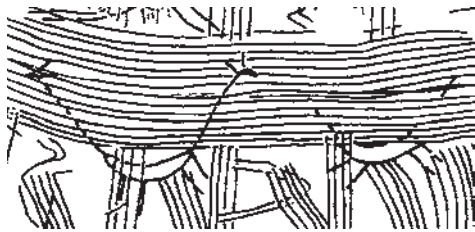
一色青海遺跡では、平成15年度の調査で、03B区SK0750から、線刻で鹿を描いた土製垂飾が出土しており（愛知県埋蔵文化財センター2008）、絵画資料としても、鹿の絵としても、今回が2例目となる。

弥生時代の鹿の絵は、前期末に北部九州で出現し、中期には特に近畿地方で盛行する。

深澤芳樹氏によると、描き方としては、頸部



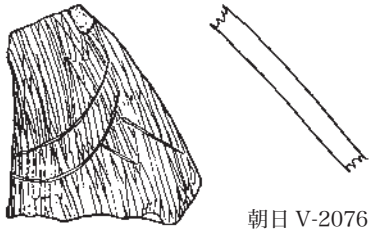
朝日 VIII-05Da-SK63-d034



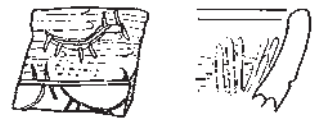
朝日 V-2075 (部分)



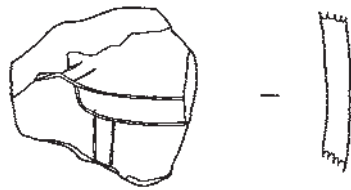
一色青海 09B-1257SK



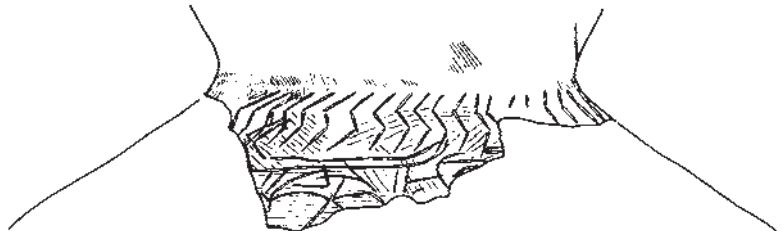
朝日 V-2076



朝日 V-2077

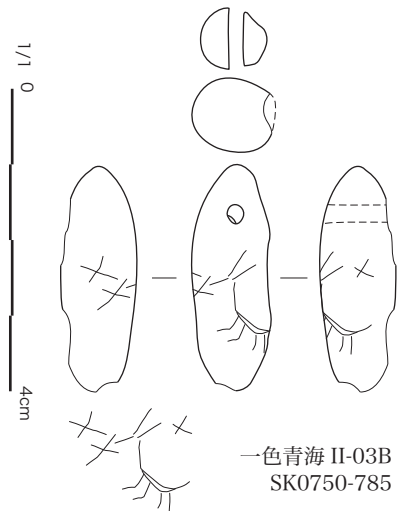


神明 -49



朝日 V-2081

1/2 0 10cm



一色青海 II-03B  
SK0750-785

図4 愛知県内出土の鹿の絵画土器・土製品 (S=1:2・1:1)

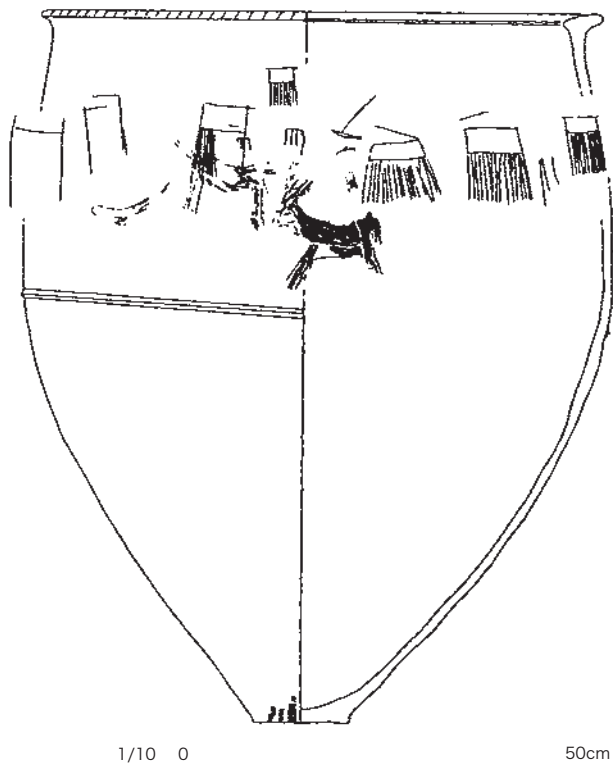


図5 大木遺跡出土の甕棺

から尻尾までをすべて1本の線刻で表現するもの(図4の朝日V-2077の下の鹿)が最も型的に最も古く、その後、胴部を2本線で描くようになり、のちには頸部まで2本線となる(同・上の鹿)。頭部は、耳あるいは角をV字に描き、鼻を1本の別の線で描くのが古く、のちにはこれがつながるようになるのである。

一色青海遺跡出土の鹿の絵は、前回・今回ともに、頸部は1本線、胴部は2本線で描いており、頭部は鼻を別に描いていることから、比較的古い要素を留めているといえよう。

今回の一色青海遺跡の調査では、河道および大溝から、全面にベンガラを塗布した小型壺、赤彩カゴや、同じくベンガラを塗布した赤彩弓などが出土しており、これらとの関連も注目される。

これらベンガラの原料をどのようにして手に入れているのかが、今後の課題となろう。

なお、本稿の執筆にあたっては、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の深澤芳樹氏、奈良県立橿原考古学研究所の橋本裕行氏から多くのご教示を得たことを記し、ここに感謝の意と致します。

### 参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1994 『朝日遺跡 V (土器編・総論編)』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『一色青海遺跡 II』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2009 『朝日遺跡 VIII』
- 安城市歴史博物館 2001 『弥生の絵画 倭人の顔—描かれた 2000 年前の世界—』開館 10 周年記念特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 1992 『弥生の神々—祭りの源流を探る—』平成 4 年春季特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 1996 『卑弥呼の動物ランド—よみがえった弥生犬—』平成 8 年春季特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 2006 『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』平成 18 年春季特別展図録
- 佐原 真 1980 「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』第 66 巻第 1 号、日本考古学会
- 滋賀県立安土城考古博物館 1994 『弥生の祈り人—よみがえる農耕祭祀—』春季特別展図録
- 設楽博己編 2006 『原詩絵画の研究 論考編』六一書房
- 豊田市教育委員会 1996 『神明遺跡』
- 常松幹雄 2006 「鹿と鉤の回廊」設楽博己編『原詩絵画の研究 論考編』六一書房
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986 『絵画と記号—唐古・鍵遺跡調査 50 周年記念—』特別展図録
- 橋本裕行 1988 「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集 第 8 創立 50 周年記念』吉川弘文館
- 橋本裕行 1989 「弥生時代の絵物語」工業善通編『古代史復元 5 弥生人の造形』講談社
- 橋本裕行 2006 「弥生絵画研究のあゆみと展望」『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』大阪府立弥生文化博物館平成 18 年春季特別展図録
- 春成秀爾 1991a 「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」『日本における初期弥生文化の成立』横山浩一先生退官記念論文集 II
- 春成秀爾 1991b 「絵画から記号へ—弥生時代における農耕儀礼の盛衰—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 35 集
- 春成秀爾 1992 「鳥・鹿・人」『弥生の神々—祭りの源流を探る—』大阪府立弥生文化博物館平成 4 年春季特別展図録
- 深澤芳樹 2006 「鹿と羊」『弥生画帖—弥生人が描いた世界—』大阪府立弥生文化博物館平成 18 年春季特別展図録
- 夜須町教育委員会 1997 『大木遺跡』
- 野洲町立歴史民俗資料館 1993 『倭人の絵画』展覧会図録